影さへ見ゆる山の井の淺き心は我思はなくに

飛鳥井―催馬樂、飛鳥井に宿りはすべしかげもよしみもひもさむしみま草もよし、みもひは飲料水

やどりのつかさ―一時任官し暫らくして目的の官に轉ぜしむる官

飛鳥井、みもひも寒しと譽めたるこそをかしけれ。玉の井。少將の井。櫻井。后町の井。千貫の井。

受領は

紀伊守。和泉。

やどりのつかさの權の守は

下野。甲斐。越後。筑後。阿波。

大夫は

式部大夫。左衛門大夫。史大夫。六位藏人、おもひかくべき事にもあらずかうぶりえて、何の大夫、權の守などいふ人の、板屋せばき家もたりて、また小檜垣など新しくし、車やどりに車ひきたて、前ちかく木おほくして、牛つながせて、草などかはするこそいとにくけれ。庭いと淸げにて、紫革して、伊豫簾かけわたして、布障子はりて住居たる。夜は「門强くさせ」など事行ひたる、いみじうおひさきなくこゝろづきなし。親の家、舅は

いたづらなる―明家となれる

またからず―全からず、崩れて

おのづから―さしのぞくに係る

さらなり、伯父兄などの住まぬ家、そのさるべき人のなからんは、おのづからむつましう、うち知りたる受領、又國へ行きていたづらなる、さらずば女院、宮腹などの屋あまたあるに、官まち出でて後、いつしかとよき所尋ね出でて住みたるこそよけれ。女のひとり住む家などは、唯いたう荒れて、築土などもまたからず、池などのある所は、水草ゐ、庭なども、いと蓬茂りなどこそせねども、所々砂の中より青き草見え、淋しげなるこそあはれなれ。物かしこげに、なだらかに修理して、門いたうかため、きはぐ〜しきは、いとうたてこそ覺ゆれ。

宮仕人の里なども、親ども二人あるはよし。人しげく出で入り、奥のかたにあまたさまざまの聲多く聞え、馬の音して騷しきまであれどかなし。されど忍びてもあらはれても、おのづから、「出で給ひけるを知らで」ともいつか參り給ふ」などもいひにさしのぞく。心かけたる人は、「いかがは」と門あけなどするを、うたて騷しうあやふげに、夜半までなど思ひたるけしき、いとにくし。「大御門はさしつや」など問はすれば、「まだ人の

門番の答

供なるものども―わらふの主語

ぬる―一本いぬる

らいさうと―未詳、一説に衍文、一説に今宵らはさぞとの誤

おはすれば」など、なまふせがしげに思ひて答ふるに、「人出で給びなば疾くさせ。このごろは盗人いと多かり」などいひたる、いとむつかしう、うち聞く人だにあり。この人の供なるものども、この客今や出づると、絶えずさしのぞきて、けしき見るものどもを、わらふべかゝめり。眞似うちするも、聞きてはいかにいとゞ厳しういひ咎めん。いと色に出でていはぬも、思ふ心なき人は、必來などやする。されど健なるかたは、「夜更けぬ、御門もあやふかゝなる」といひてぬるもあり。誠に志ことなる人は、「はや」などあまた度やらはるれど、猶居あかせば、たびく〳〵ありくに、あけぬべきけしきをめづらかに思ひて、「いみじき御門を、今宵らいさうとあけひろげて」と聞えごちて、あぢきなく曉にぞさすなる。いかゞにくき。親そひぬるは猶こそあれ。まして誠ならぬは、いかに思ふらんとさへつゝましうて。兄の家なども、實に聞くにはさぞあらん。夜中曉ともなく、門いと心がしこくもなく、何の宮、内裏わたりの殿ばらなる人々の出であひなどして、格子などもあげながら、冬の夜を居あかして、人の出でぬる後も、見出したるこそをかしけれ。有明などはましていとをかし。笛など吹きて出でぬるを、我は急ぎても寢られず、人のうへなどもいひ、歌など語り聞くまゝに、寢いりぬるこそをかしけれ。

おぼえなく―ふと、突然

今日來ん人を―拾遺、山里は雪ふりつみて道もなし今日來ん人を哀

雪のいと高くはあらで、うすらかに降りたるなどは、いとこそをかしけれ。又雪のいと高く降り積みたる夕暮より、端ちかう、同じ心なる人二三人ばかり、火桶中に居ゑて、物語などするほどに、暗うなりぬれば、こなたには火もともさぬに、大かた雪の光いと白う見えたるに、火箸して灰などかきすさびて、あはれなるもをかしきも、いひあはするこそをかしけれ。よひも過ぎぬらんと思ふほどに、沓の音近う聞ゆれば、怪しと見出したるに、時々かやうの折、おぼえなく見ゆる人なりけり。今日の雪をいかにと思ひきこえながら、何でふ事にさはり、そこに暮しつるよしなどいふ。今日來ん人をなどやうのすぢをぞ言ふらんかし。晝よりありつる事どもをうちはじめて、よろづの事をいひ笑ひ、圓座さし出したれど、片つ方の足はしもながらあるに、鐘の音の聞ゆるまでになりぬれど、内にも外にも、いふ事どもは飽かずぞおぼゆる。昧爽のほどに歸るとて、雪何の山

とは見ん

雪何の山―朗詠、曉入二梁王之苑一雪滿二群山一

いと高う―一本いみじうに作る

雪月花の時―朗詠、琴詩酒伴皆抛レ我雪月花時最憶レ君

沖―炭火（おき）に掛けしならん

御形の宣旨―女房の名、今昔物語に、御形の宣旨といふ人は優にやさしく形めでたかりけり

に滿てるとうち誦じたるは、いとをかしきものなり。女のかぎりしては、さもえ居明さざらましを、たゞなるよりはいとをかしう、すきたる有樣などを言ひあはせたる。

村上の御時、雪のいと高う降りたりけるを、楊器にもらせ給ひて、梅の花をさして、月いと明きに、「これに歌よめ、いかゞいふべき」と兵衛の藏人に賜びたりければ、雪月花の時と奏したりけるこそ、いみじうめでさせ給ひけれ。「歌などよまんには世の常なり、かう折にあひたる事なん、言ひ難き」とこそ仰せられけれ。同じ人を御供にて、殿上に人侍はざりける程、佇ませおはしますに、すびつの烟の立ちければ、「かれは何の烟ぞ、見て來」と仰せられければ、見てかへり參りて、

わたつみの沖にこがるゝ物見ればあまの釣してかへるなりけり

と奏しけるこそをかしけれ。蛙の飛び入りてこがるゝなりけり。

御形の宣旨、五寸ばかりなる殿上わらはのいとをかしげなるをつくりて、髻結ひ、裝束などうるはしくして、名かきて奉らせたりけるに、ともあきらのおほきみと書きたりけるをこそ、いみじうせさせ給ひけれ。

宮に始めて參りたるころ、物の恥しきこと數知らず、涙も落ちぬべければ、夜々まゐりて、三尺の御几帳の後に侍ふに、繪など取り出でて見せさせ給ふだに、手もえさし出すまじうわりなし。これはとあり、かれはかゝりなどの給はするに、高杯にまゐりたるおほとの油なれば、髮のすぢなども、なか〳〵畫よりは顯證に見えてまばゆけれど、念じて見などす。いとつめたきころなれば、さし出させ給へる御手のわづかに見ゆるが、いみじう匂ひたる薄紅梅なるは、限なくめでたしと、見知らぬさとび心地には、いかゞはかゝる人こそ世におはしましけれと、驚かるゝまでぞまもりまゐらする。曉には疾くなど急がるゝ。「葛城の神も暫し」など仰せらるゝを、いかですぢかひても御覽ぜんとて臥したれば、御格子もまゐらず。女官まゐりて、「これはなたせ給へ」といふを、女房聞きてはなつを、「待て」など仰せらるれば、笑ひてかへりぬ。物など問はせ給ひの給はするに、久しうなりぬれば、「おりまほしうなりぬらん、さは早」とて、「よさりは疾く」と仰せらるゝ。

念じて―恥しさを耐へて

葛城の神―前註引歌、一八六頁參照

はなたせ給へ―格子を開け給へ、上にまゐらずとあるは開けずの意

あへなきまで―暇もなき程

急がせば―原本出せばに作る

御まかなひ―御配膳

あうよりて―奥へよりて

るざり歸るや遲きとあけちらしたるに、「雪いとをかし、今日は畫つかた參れ、雪にくもりてあらはにもあるまじ」など、たびく召せば、この局主人も、「さのみや籠り居給ふらんとする。いとあへなきまで御前許されたるは、思しめすやうこそあらめ。思ふに遣ふはにくきものぞ」と、唯いそがしに急がせば、我にもあらぬ心地すれば、參るもいとぞ苦しき。火燒屋のうへに降り積みたるも珍しうをかし。御前近くは、例の炭櫃の火こちたくおこして、それにはわざと人も居ず。宮は沈の御火桶の梨繪したるに向ひておはしす。上臈御まかなひし給ひけるまゝに近くさぶらふ。次の間に長炭櫃に間なく居たる人人、唐衣著垂れたるほどなり。安らかなるを見るも羨しく、御文とりつぎ、立ち居ふるまふさまなど、つゝましげならず、物いひゐみわらふ。いつの世にか、さやうに交ひならんと思ふさへぞつゝましき。あうよりて、三四人集ひて繪など見るもあり。暫時ありて、さき高うおふ聲すれば、「殿參らせ給ふなり」とて、散りたる物ども取りやりなどするに、奥に引き入りて、さすがにゆかしきなゝめりと、御几帳のほころびより僅に見入れ

道もなし―拾遺集、山里は雪降りつみて道もなし今日來ん人を哀とは見ん

さぞ―斯樣斯々の者なり

たり。大納言殿の參らせ給ふなりけり。御直衣指貫の紫の色、雪にはえてをかし。柱のもとに居給ひて、「昨日今日物忌にて侍れど、雪のいたく降りて侍れば、おぼつかなさに」などのたまふ。「道もなしと思ひけるに、いかでか」とぞ御答あゝなる。うち笑ひ給ひて、「あはれともや御覽ずるとて」などの給ふ御有樣は、これよりは何事かまさらん。物語にいみじう口にまかせて言ひたる事ども、遊はざゝめりとおぼゆ。宮は白き御衣どもに、紅の唐綾二つ、白き唐綾と奉りたる、御髮のかゝらせ給へるなど、繪に書きたるをこそ、かかることは見るに、現にはまだ知らぬを、夢の心地ぞする。女房と物いひ戯れなどし給ふを、答いさゝか恥しとも思ひたらず聞えかへし、空言などの給ひかくるを、爭ひ論じなど聞ゆるは、目もあやに、あさましきまで、あいなく面ぞ赤むや。御菓子まゐりなどして、御前にも參らせ給ふ。「御几帳の後なるは誰ぞ」と問ひ給ふなるべし。さぞと申すにこそあらめ、立ちておはするを、外へにやあらんと思ふに、いと近う居給ひて、物などの給ふ。まだ參らざりしとき聞きおき給ひける事などの給ふ。「實にさありし」などの給

ふに、御几帳隔てて、よそに見やり奉るだに恥しかりつるを、いとあさましう、さし向ひ聞えたる心地、うつゝとも覺えず。行幸など見るに、車のかたにいさゝか見おこせ給ふは、下簾ひきつくろひ、透影もやと扇をさし隱す。猶いと我心ながらも、おほけなくかで立ち出でにしぞと、汗あえていみじきに、何事をか聞えん。かしこきかげと捧げたる扇をさへ取り給へるに、振りかくべき髪のあやしささへ思ふに、すべて誠にさる氣色やつきてこそ見ゆらめ、疾く立ち給へなど思へど、扇を手まさぐりにして、「繪は誰が書きたるぞ」などの給ひて、頓にも立ち給はねば、袖を押しあてて、うつぶし居たるも、唐衣にしろい物うつりて、まだらにならんかし。久しう居給ひたりつるを、論なう苦しと思ふらんと心得させ給へるにや、「これ見給へ、これは誰が書きたるぞ」と聞えさせ給ふを、嬉しと思ふに、「賜ひて見侍らん」と申し給へば、「猶こゝへ」との給はすれば、「人をとらへてたて侍らぬなり」との給ふ。いといまめかしう、身のほど年には合はず、かたはらいたし。人の草假字書きたる草紙、取り出でて御覽ず。「誰がにかあらん、かれに見せさせ給へ。それぞ世にある人の手は見知りて侍らん」と怪しき事どもを、唯答させんとのたまふ。一所だにあるに、又さきうちおはせて、同じ直衣の人參らせ給ひて、これは今少し花やぎ、猿樂ことなどうちし、譽め笑ひ興じ、我も、なにがしがとある事、かゝる事など、殿上人のうへなど申すを聞けば、猶いと變化の物、天人などのおり來るにやと覺えてしを、侍ひ馴れ、日ごろ過ぐれば、いとさしもなきわざにこそありけれ。かく見る人々も、家のうち出で初めけん程は、さこそは覺えけめど、かく爲もて行くに、おのづから面馴れぬべし。物など仰せられて、「我をば思ふや」と問はせ給ふ。御いらへに、「いかにかは」と啓するに合せて、臺盤所のかたに、鼻をたかくひたれば、「あな心う、虛言するなりけり。よし〳〵」とていらせ給ひぬ。いかでか虛言にはあらん。よろしうだに思ひ聞えさすべき事かは。鼻こそは虛言しけれとおぼゆ。さても誰かかくにくきわざしつらんと、大かた心づきなしと覺ゆれば、わがさる折も、おしひしぎかへしてあるを、ましてにくしと思へど、まだうひ〳〵しければ、ともかくも啓しなほさで、明けぬれば

猶いと云々―此語の上に、然るに今かく近く添はれ奉りてはと補ひ見るべし、おほけなく云々は身分不相應に如何で斯く出仕したりしと也

たて―立たせ、清少が我を捉へて立たしめすと也

一所―御ひと方

我も―其人御自身も

鼻を云々―當時人と會話中傍に嘘する人あれば對手の言を虛言と思ふ俗ありしなり

御けしきは—中宮の思召はこの御歌の如しと取次の人の詞也

職の神—陰陽家に使はれ咒詛などにて災禍をなす神

きしろふ云云—競爭激しき際の藏人に我愛する子をなしたる人

おりたるすなはち、淺緑なる薄様に、艶なる文をもてきたり。見れば、

いかにしていかに知らましいつはりをそらにたどすの神なかりせば

となん、御けしきはとあるに、めでたくも口をしくも思ひ亂るゝに、なほ昨夜の人ぞたづね聞かまほしき。

うすきこそそれにもよらねはなゆゑにうき身の程を知るぞわびしき

猶こればかりは啓しなほさせ給へ、職の神もおのづからいと畏しとて、參らせて後も、うたて、折じもなどてさはたありけん、いとをかし。

したりがほなるもの

正月一日のつどめて、最初にはなひたる人。きしろふたびの藏人に、かなしうする子なしたる人のけしき。除目に、その年の一の國得たる人の、よろこびなどいひて、「いとかしこうなり給へり」など人のいふ答に、「何か、いと異樣に亡びて侍るなれば」などいふも、したり顔なり。また人多く挑みたる中に、選られて增に取られたるも、我はと思ひ

ふくつけき—欲深き、原本ふくつけさに作る

あり〳〵て—長き間待ちに待ちて

ぬべし。こはき物怪調じたる驗者。掩韻の明疾うしたる。小弓射るに、片つ方の人咳嗽をし紛はして騒ぐに、念じて音高う射てあてたるこそ、したり顔なるけしきなれ。碁をうつに、さばかりと知らで、ふくつけきは、又こと所にかゝぐりありくに、ことかたより、目もなくして、多くひろひ取りたるも嬉しからじや。ほこりかに打ち笑ひ、たどの勝よりはほこりかなり。あり〳〵て受領になりたる人の氣色こそうれしげなれ。僅にある從者の無禮にあなづるも、妬しと思ひ聞えながら、いかゞせんとて念じ過しつるに、我にもまさる者どもの、かしこまり、たゞ仰承らむと追從するさまは、ありし人とやは見えたる。女房うちつかひ、見えざりし調度裝束の湧き出づる。受領したる人の中將になりたるこそ、もと公達のなりあがりたるよりも、氣高うしたり顔に、いみじう思ひたゞめれ。位こそ猶めでたきものにはあれ。同じ人ながら、大夫の君や、侍從の君など聞ゆるをりは、いと侮り易きものを、中納言、大納言、大臣などになりぬるは、無下にせんかたなく、やんごとなく覺え給ふ事のこよなさよ。ほど〳〵につけては、受領もさこそは

供奉―内供奉として宮中奉仕の僧

なりかゝり―なり形のみ氣にかけ繕ふ、一説に、あなづられてなり(句)かゝり

こそすれ

花風―一本あまかぜ

あゝめれ。數多國に行きて、大貳や四位などになりて、上達部になりぬれば、おも〳〵し。されど、さりとてほど過ぎ、何ばかりの事かはある。又多くやはある。受領の北の方にてくだるこそ、よろしき人の幸福には思ひてあゝめれ。只人の上達部の女にて、后になり給ふこそめでたけれ。されどなほ男は、わが身のなり出づるこそめでたくうち仰ぎたるけしきよ。法師の、なにがし供奉などいひてありくなどは、何とかは見ゆる。經たふとく讀み、みめ清げなるにつけても、女にあなづられて、なりかゝりこそすれ、僧都僧正になりぬれば、佛のあらはれ給へるにこそとおぼし惑ひて、かしこまるさまは、何にかは似たる。

風は

嵐。こがらし。三月ばかりの夕暮にゆるく吹きたる花風、いとあはれなり。八九月ばかりに、雨にまじりて吹きたる風、いとあはれなり。雨のあし横ざまに、さわがしう吹きたるに、夏とほしたる綿絹の、汗の香などかわき、生絹の單衣に、引き重ねて著たるもをかし。この生絹だにいとあつかはしう、捨てまほしかりしかば、いつの間にかうなりぬらんと思ふもをかし。あかつき、格子妻戸など押しあげたるに、嵐のさと吹きわたりて、顔にしみたるこそいみじうをかしけれ。九月三十日、十月一日のほどの空うち曇りたるに、風のいたう吹くに、黄なる木の葉どもの、ほろ〳〵とこぼれ落つる、いとあはれなり。櫻の葉、椋の葉などこそ落つれ。十月ばかりに、木立多かる所の庭は、いとめでたし。

野分の又の日こそ、いみじう哀におぼゆれ。立蔀、透垣などのふしなみたるに、前栽ども心ぐるしげなり。大なる木ども倒れ、枝など吹き折られたるだに惜しきに、萩女郎花などのうへに、よろぼひ這ひ伏せる、いとおもはずなり。格子のつぼなどに、颯と際を殊更にしたらんやうに、こまぐ〳〵と吹き入りたるこそ、あらかりつる風のしわざともおぼえね。いと濃き衣のうはぐもりたるに、朽葉の織物、羅などの小袿著て、まことしく清げなる人の、夜は風のさわぎにねざめつれば、久しう寐おきたるまゝに、鏡うち見て、

この生絹だに云々―この語の上に、夏の程は、又はさいつ頃はなど補ふべし

おもはず―心外

格子のつぼ―格子の目をいふにや

母屋より少しゐざり出でたる、髪は風に吹きまよはされて、少しうちふくだみたるが、肩にかゝりたるほど、實にめでたし。物あはれなる氣色見るほどに、十七八ばかりにやあらん、ちひさくはあらねど、わざと大人などは見えぬが、生絹の單衣のいみじうほころびたる、花もかへり、濡れなどしたる、薄色の宿直物を著て、髪は尾花のやうなるぞぎすゐも、長ばかりは衣の裾にはづれて、袴のみあざやかにて、そばより見ゆる。わらはべの、若き人の根籠に吹き折られたる前栽などを取り集め起し立てなどするを、羨しげに推し量りて、つき添ひたるうしろもをかし。

花もかへり—花色も褪め
宿直物—寢衣
そぎすゐ—髪の切り揃へたるさき

こゝろにくきもの

物へだてて聞くに、女房とは覺えぬ聲の、忍びやかに聞えたるに、答わかやかにして、うちそよめきて參るけはひ、物まゐる程にや、筋飯匙などのとりまぜて鳴りたる、提の柄のたふれ伏すも、耳こそとどまれ。打ちたる衣の鮮かなるに、騒しうはあらで、髪のぶりやられたる。いみじうしつらひたる所の、おほとなぶらは參らで、長炭櫃に、いと多く

物まゐる—食事をする

おこしたる火の光に、御几帳の紐のいとつやゝかに見え、御簾の帽額のあげたる、鈎のきはやかなるもけざやかに見ゆ。よく調じたる火桶の、灰清げにおこしたる火に、よく書きたる繪の見えたる、をかし。はしのいときはやかにすぢかひたるもをかし。夜いたう更けて、人の皆寢ぬる後に、外のかたにて、殿上人など物いふに、奥に、碁石笥にいる音のあまた聞えたる、いと心にくし。簀子に火ともしたる。物へだてて聞くに、人の忍ぶるが、夜半などうち驚きて、いふ事は聞えず、男も忍びやかに笑ひたるこそ、何事ならんとをかしけれ。

はしの云々—火箸を眞筋違に立てたる
驚きて—目を覺して

島は

浮島。八十島。たはれ島。水島。松が浦島。籬の島。豐浦の島。たと島。

たと島—萬歳抄に、たくのしまの誤か然らば出雲也

濱は

そとの濱。吹上の濱。長濱。打出の濱。諸寄の濱。千里の濱こそ廣うおもひやらるれ。

浦は

生の浦。鹽竈の浦。志賀の浦。名高の浦。こりずまの浦。和歌の浦。

寺は

壺坂。笠置。法輪。高野は、弘法大師の御住處なるがあはれなるなり。石山。粉川。志賀。

經は

法華經はさらなり。千手經。普賢十願。隨求經。尊勝陀羅尼。阿彌陀の大呪。千手陀羅尼。

文は

文集。文選。博士の申文。

佛は

如意輪は、人の心をおぼしわづらひて、頰杖を突きておはする、世に知らずあはれにはづかし。千手、すべて六觀音。不動尊。藥師佛。釋迦。彌勒。普賢。地藏。文殊。

文集—白氏文集七十卷

申文—願書

物語は

すみよし、うつほの類は、殿うつり。月まつ女。交野の少將。梅壺の少將。人め。國ゆづり。むもれ木。道心すゝむる松が枝。こまのの物語は、ふるきかはぼりさし出でていにしが、をかしきなり。

野は

嵯峨野さらなり。印南野。交野。こま野。粟津野。飛火野。しめぢ野。そうけ野こそすずろにをかしけれ。などさつけたるにかあらん。安倍野。宮城野。春日野。紫野。

陀羅尼は

あかつき。

讀經は

ゆふぐれ。

あそびは

殿うつり—以下世に傳らず

かはぼり—扇

そうけ野—國不詳、俗毛にとりなしての洒落にや

あかつき—曉讀むが尊しと也

夜人の顔見えぬほど。あそびわざは、さまあしけれども、鞠もをかし。小弓。掩韻。碁。

舞は

駿河舞。求子。太平樂はさまあしけれど、いとをかし。太刀などうたてくあれど、いとおもしろし。漢土に敵に具して遊びけんなど聞くに。鳥の舞。拔頭は、頭の髪ふりかけたるまみなどはおそろしけれど、樂もいとおもしろし。落蹲は、二人して膝ふみて舞ひたる。こまがた。

漢土に云々—鴻門の會に項莊項伯の劔を拔いて舞べるをいふ。

ひきものは

まみ—目つき

琵琶。箏のこと。

しらべは

鶯のさへづり—春鶯轉

風香調。黄鐘調。蘇香の急。鶯のさへづりといふしらべ。相府蓮。

笛は

横笛いみじうをかし。遠うより聞ゆるが、やう〳〵近うなりゆくもをかし。近かりつるがはるかになりて、いとほのかに聞ゆるも、いとをかし。車にても徒歩にても馬にても、すべて懐にさし入れてもたるも、何とも見えず。さばかりをかしきものはなし。まして聞き知りたる調子など、いみじうめでたし。曉などに、忘れて枕のもとにありたるを見つけたるも、猶をかし。人の許より取りにおこせたるを、おし包みて遣るも、たど文のやうに見えたり。笙の笛は、月のあかきに、車などにて聞えたる、いみじうをかし。所せく、もてあつかひにくくぞ見ゆる。吹く顔やいかにぞ。それは横笛もふきなしありかし。篳篥は、いとむつかしう、秋の蟲をいはば、轡蟲などに似て、うたてけぢかく聞かまほしからず。ましてわろう吹きたるはいとにくきに、臨時の祭の日、いまだ御前には出ではてで、物の後にて、横笛をいみじう吹き立てたる、あなおもしろと聞くほどに、半ばかりより、うちそへて吹きのぼせたる程こそ、唯いみじう麗しき髪もたらん人も、皆立ちあがりぬべき心地ぞする。やう〳〵琴笛あはせて歩み出でたる、いみじう

ふきなしありかし—異本ふきなしなめりかしむつかしう—異本かしがましうちそへて—篳篥を也立ちあがり

—餘り面白さにぞつとして毛髪も立つ

やうしたる—様したる、又は耀(えう)したるにて磨き立てたる義にや

賀茂の社の—古今集、千早振賀茂の社のゆふだすきひと日も君をかけぬ日はなし

をかし。

見るものは

行幸。祭のかへさ。御賀茂詣。臨時の祭、空くもりて寒げなるに、雪少しうち散りて、插頭の花、青摺などにかゝりたる、えもいはずをかし。太刀の鞘の、きはやかに黒うまだらにて、白く廣う見えたるに、半臂の緒のやうしたるやうにかゝりたる。地摺袴の中より、氷かと驚くばかりなる打目など、すべていとめでたし。今少し多く渡らせまほしきに、使は必にくげなるもあるたびは、目もとまらぬ。されど藤の花に隱されたる程はをかしう、猶過ぎぬるかたを見送らるゝに、陪從のしなおくれたる、柳の下襲に、かざしの山吹おもなく見ゆれども、扇いと高くうちならして、「賀茂の社のゆふだすき」と歌ひたるは、いとをかし。

行幸になずらふるものは何かあらん。御輿に奉りたるを見參らせたるは、明暮御前に侍ひ、仕う奉る事もおぼえず、かうぐしいつくしう、常は何ともなきつかさ、ひめま

御綱助—春註に、鳳輦の御綱を奉行する大舍人をいふにや

あえしを—原本あへしをに作る

たかしけれ—原本たかしに作る

奉りて—齋院の乘らせ給ひて

うちぎみさへぞ、やんごとなう珍しう覺ゆる。御綱助、中少將などいとをかし。祭のかへさいみじうをかし。きのふは萬の事うるはしうて、一條の大路の廣う清らなるに、日の影もあつく、車にさし入りたるもまばゆければ、扇にて隱し、居なほりなどして、久しう待ちつるも見苦しう、汗などもあえしを、今日はいと疾く出でて、雲林院、知足院などのもとに立てる車ども、葵かつらもうちなえて見ゆ。日は出でたれど、空は猶うち曇りたるに、いかで聞かんと、目をさまし、起き居て待たるゝ杜鵑の、數多さへあるにやと聞ゆるまで、鳴きひゞかせば、いみじうめでたしと思ふ程に、鶯の老いたる聲にて、かれに似せんとおぼしく、うち添へたるこそ、憎けれど又をかしけれ。いつしかと待つに、御社の方より、赤き衣など著たる者どもなど連れ立ちてくるを、「いかにぞ、事成りぬや」などいへば、「まだ無期」など答へて、御輿、腰輿など持てかへる。これに奉りてはしますらんもめでたく、けぢかく如何でさる下司などの侍ふにかとおそろし。はるかけにいふ程もなく歸らせ給ふ。葵より始めて、青朽葉どものいとをかしく見ゆるに、所の

なさ〳〵しく―尤もらしく、きちんとして

わりなく―詮方なく

おどろかしげに―亂れ茂りて

えも通るまじう―車の

衆の青色白藍を、けしきばかり引きかけたるは、卯の花垣根ちかうおぼえて、杜鵑もかけに隠れぬべう覺ゆかし。昨日は車ひとつに數多乘りて、二藍の直衣、あるは狩衣など亂れ著て、簾取りおろし、物ぐるほしきまで見えし公達の、齋院の垣下にて、ひの裝束うるはしく工、今日は一人づつ、をさ〳〵しく乘りたる後に、殿上童のせたるもをかし。わたりはてぬる後には、などかさしも惑ふらん。我も〳〵と、危くおそろしきまで、前に立たんと急ぐを、「かうな急ぎそ、のどやかに遣れ」と扇をさし出でて制すれど、聞きも入れねば、わりなくて、少し廣き所に強ひてとどめさせて立ちたるを、心もとなくにくしとぞ思ひたる、きほひかゝる車どもを見やりてあるこそをかしけれ。少しよろしき程にやり過して、道の山里めきあはれなるに、うつ木垣根といふ物の、いと荒々しう、おどろかしげにさし出でたる枝どもなど多かるに、花はまだよくもひらけはてず、つぼみがちに見ゆるを折らせて、車のこなたかなたなどに插したるも、桂などの萎みたるが口惜しきに、をかしうおぼゆ。遠きほどは、えも通るまじう見ゆる行くさきを、近う行き

雜書して也

峯にわかるる―古今、風吹けば峯に別るゝ白雲の絶えてつれなき君が心か

おぼめかしきに―黄昏時にて判然と見えざるに

もてゆけば、さしもあらざりつるこそをかしけれ。男の車の誰とも知らぬが、後に引きつゞきてくるも、たゞなるよりはをかしと見る程に、引き別るゝ所にて、「峯にわかるゝ」といひたるもをかし。

五月ばかり、山里にありく、いみじくをかし。澤水も實にたゞいと青く見えわたるに、へはつれなく草生ひ茂りたるを、ながく〳〵とたゞさまに行けば、下はえならざりける水の、深うはあらねど、人の歩むにつけて、とばしりあげたるいとをかし。左右にある垣の枝などのかゝりて、車のやかたに入るも、急ぎてとらへて折らんと思ふに、ふとはづれて過ぎぬるも口惜し。蓬の車に押しひしがれたるが、輪のまひたちたるに、近うかゞへたる香もいとをかし。

いみじう暑きころ、夕すゞみといふ程の、物のさまなどおぼめかしきに、男車のさきおふはいふべき事にもあらず、たゞの人も、後の簾あげて、二人も一人も乘りて、走らせて行くこそ、いと涼しげなれ。まして琵琶ひきならし、笛の音聞ゆるは、過ぎていぬるも

口惜しく、さやうなるほどに、牛の鞦の香の、怪しうかぎ知らぬさまなれど、うち嗅かれたるが、をかしきこそ物ぐるほしけれ。いと暗闇なるに、さきにともしたる松の煙の、かの車にかゝれるもいとをかし。

五日の菖蒲の、秋冬過ぐるまであるが、いみじう白み枯れて怪しきを、引き折りあげたるに、その折の香残りて、かゞへたるもいみじうをかし。

よくたきしめたる薫物の、昨日、一昨日、今日などはうち忘れたるに、衣を引きかづきたる中に、煙の残りたるは、今のよりもめでたし。

月のいとあかきに川を渡れば、牛の歩むまゝに、水晶などのわれたるやうに、水のちりたるこそをかしけれ。

おほきにてよきもの

法師。くだもの。家。餌袋。硯の墨。男の目、あまりほそきは女めきたり、又鋺のやうならんはおそろし。火桶。酸漿。松の木。山吹のはなびら。馬も牛も、よきは大にこそあゝめれ。

かゞへたる——一説かゝへたる、香残りて含まれ居るなり

山吹のはな

びら——一本山吹櫻のはなびら

みじかくてありぬべきもの

とみの物ぬふ糸。燈臺。下種女の髪、うるはしく短くてありぬべし。人の女の聲。

人の家につきぐしきもの

厨。侍の曹司。帷のあたらしき。懸盤。童女。はしたもの。衝立障子。三尺の几帳。裝束よくしたる餌袋。からかさ。かきいた。棚厨子。ひさげ。銚子。中盤。圓座。ひぢをりたる廊。竹王繪かきたる火桶。

かき板——物を載せて運ぶ板

竹王繪——一説に作り繪の誤かといへり

ものへ行く道に、清げなる男の、竪文のほそやかなる持ちて急ぎ行くこそ、何地ならんとおぼゆれ。又清げなる童女などの、袖いと鮮かにはあらず、萎えばみたる、扇子のつやゝかなるが、革に土多くついたるをはきて、白き紙に包みたる物、もしは箱の蓋に、草紙どもなど入れて持て行くこそ、いみじう、呼び寄せて見まほしけれ。門ぢかなる所をわたるを、呼び入るゝに、愛敬なく答もせで往く者は、つかふらん人こそ推しはからる

れ。

行幸はめでたきもの、上達部、公だち車などのなきぞ少しさうぐしき。よろづの事よりも、わびしげなる車に、裝束わろくて物見る人、いともどかし。説經などはいとよし。罪うしなふかたの事なれば。それだに猶あながちなるさまにて、見苦しかるべきを、まして祭などは、見でありぬべし。下簾もなくて、白きひとへうち垂れなどしてあゝめりかし。唯その日の料にとて、車も下簾もしたてて、いと口をしうはあらじと出でたるだに、まさる車など見つけては、何しになど覺ゆるものを、ましていかばかりなる心地にて、さて見るらん。おりのぼりありく公達の車の、推し分けて近う立つ時などこそ、心ときめきはすれ。よき所に立てんといそがせば、疾く出でて待つほどいと久しきに、居張り立ちあがりなど、あつく苦しく、まち困ずる程に、齋院の垣下に參りたる殿上人、所の衆、辨、少納言など、七つ八つ引きつゞけて、院のかたより走らせてくるこそ、事なりにけりと驚かれて、嬉しけれ。殿上人の物言ひおこせ、所々の御前どもに水飯くは

あながち云云—あまり甚しくやつしたる樣にてあらんは

何しに—此語の下にかくは出立ちけんなど補ふべし

おぼえある—良家の、世に時めく

簾も—一本ながえども

に作る

人給—副車

所ある—すきたる場所のある

げすも—一本げすども

に作る

便なき人—宿らすまじき人

すとて、棧敷のもとに馬ひき寄するに、おほえある人の子どもなどは、雜色などおりて、馬の口などしてをかし。さらぬものの、見もいれられぬなどぞ、いとほしげなる。御輿の渡らせ給へば、簾もあるかぎり取りおろし、過ぎさせ給ひぬるに、まどひあぐるもをかし。その前に立てる車は、いみじう制するに、などて立つまじきぞと、强ひて立つれば、いひわづらひて、消息などするこそをかしけれ。所もなく立ち重りたるに、よき所の御車、人給ひきつゞきて多くくるを、いづくに立たんと見る程に、御前ども唯おりに下りて、立てる車どもを唯のけに退けさせて、人給つゞきて立てるこそ、いとめでたけれ。逐ひのけられたるえせ車ども、牛かけて、所あるかたにゆるがしもて行くなど、いとわびしげなり。きらゝしきなどをば、えさしも推しひしがずかし。いと清げなれど、又ひなび怪しく、げすも絶えず呼びよせ、ちご出しするなどするもあるぞかし。

鄙に便なき人なん、曉に笠さゝせて出でけるといひ出でたるを、よく聞けば我がうへなりけり。地下などいひても、めやすく、人に許されぬばかりの人にもあらざゝめるを、怪

しの事やと思ふほどに、うへより御文もて來て、「返事只今」と仰せられたり。何事にかと思ひて見れば、大笠の繪をかきて、人は見えず、唯手のかぎり笠をとらへさせて、下に、

三笠山やまの端あけしあしたより

とかゝせ給へり。猶はかなき事にても、めでたくのみ覺えさせ給ふに、恥しく心づきなき事は、いかで御覽ぜられじと思ふに、さるそらごとなどの出でくるこそ苦しけれと、をかしうて、こと紙に、雨をいみじう降らせて、下に、

雨ならぬ名のふりにけるかな

さてや濡れぎぬには侍らんと啓したれば、右近内侍などにかたらせ給ひて、笑はせ給ひけり。

三條の宮におはしますころ、五日の菖蒲輿など持ちてまゐり、藥玉まゐらせなど、わかき人々、御匣殿など、藥玉して、姫宮若宮つけさせ奉り、いとをかしき藥玉ほかよりも參

手のかぎり—手だけ

こと紙—別の紙

菖蒲輿—菖蒲にて飾れる小さき輿

あをさし—青麥にて作れる菓子

ませこし—ませがき越しの麥

あたらしき—可惜しき又は目新しく風變りの義ならん

よくも云々—よくも靫負佐に似たまひしかなと言ひてやがて靫負佐と渾名したりと也

蚊の睫の云

らせたるに、あをさしといふものを人の持てきたるを、青き薄樣を艶なる硯の蓋に敷きて、「これませこしにさふらへば」とてまゐらせたれば、

みな人は花やてふやといそぐ日もわがこゝろをば君ぞ知りける

と、紙の端を引き破りて、書かせ給へるもいとめでたし。

十月十餘日の月いとあかきに、ありきて物見んとて、女房十五六人ばかり、皆濃き衣をうへに著て、引きかくしつゝありし中に、中納言の君の、紅の張りたるを著て、頸より髪をかいこし給へりしかば、「あたらしきぞ」とて、「よくも似たまひしかな。靫負佐」とぞわかき人々はつけたりし。後に立ちて笑ふも知らずかし。

成信の中將こそ、人の聲はいみじうよう聞き知り給ひしか。同じ所の人の聲などは、常に聞かぬ人は、更にえ聞き分かず、殊に男は、人の聲をも手をも、見わき聞きわかぬものを、いみじう密なるも、かしこう聞き分き給ひしこそ。

大藏卿ばかり耳とき人なし。まことに蚊の睫の落つるほども、聞きつけ給ひつべくこそ

云―列子湯問篇の比喩にもとづく

勞多きに云云―墨の久しく使はれしをいふ、さふし―一本さし、墨挾み也、傍註には、たる(句)かさしなど云云筆のかさ也とあれど如何

青磁の龜―

ありしか。職の御曹司の西おもてに住みしころ、大殿の四位少將と物いふに、側にある人、この少將に、扇の繪の事いへとさゞめけば、「今かの君立ち給ひなんにを」と密にいひ入るゝを、その人だにえ聞きつけで、「何とか〳〵」と耳をかたぶくるに、手をうちて、「にくし、さのたまはゞ今日はたゞじ」とのたまふこそ、いかで聞き給ひつらんと、あさましかりしか。

硯きたなげに塵ばみ、墨の片つかたにしどけなくすりひらめかし、勞多きになりたるが、さゞしなどしたるこそ心もとなしと覺ゆれ。萬の調度はさるものにて、女は鏡硯こそ心のほど見ゆるなゝめれ。おきぐちのはざめに、塵ゐなど打ち捨てたるさま、こよなしかし。男はまして文机清げに押し拭ひて、重ねならずば、ふたつ懸子の硯のいとつきづきしう、蒔繪のさまもわざとならねどをかしうて、墨筆のさまなども、人の目とむばかりしたてたるこそ、をかしけれ。とあれどかゝれどおなじ事とて、黑箱の蓋も片方おちたる硯、わづかに墨のゐたる、塵のこの世には拂ひがたけなるに、水うち流して、青磁の龜の口おちて、首のかぎり穴のほど見えて、人わろきなども、つれなく人の前にさし出づかし。人の硯を引き寄せて、手ならひをも文をも書くに、「その筆な使ひたまひそ」と言はれたらんこそ、いとわびしかるべけれ。うち置かんも人わろし、猶つかふもあやにくなり。さ覺ゆることも知りたれば、人の爲るもいはで見るに、手などよくもあらぬ人の、さすがに物かゝまほしうするが、いとよくつかひためたる筆を、あやしのやうに、水がちにさしぬらして、こはものややりと、假名に細櫃の蓋などに書きちらして、横ざまに投げ置きたれば、水に頭はさし入れてふせるも、にくき事ぞかし。されどさいはんやは。人の前に居たるに、「あなくら、奥より給へ」といひたるこそ、又わびしけれ。さしのぞきたるを見つけては、驚きいはれたるも。思ふ人の事にはあらずかし。めづらしといふべきことにはあらねど、文こそ猶めでたきものなれ。遙なる世界にある人の、いみじくおほつかなく、いかならんと思ふに、文を見れば、唯今さし向ひたるやうにおぼゆる、いみじきことなりかし。わが思ふ事を書き遣りつれば、あしこまでも行

龜形の水入、一説には瓶

人わろし―體裁惡し

こはものややりと―一説こはものへやりとてに作る、落合直文氏は假名にこはものややりと細櫃の蓋などに書き散らしてならん、こは

きつかざらめど、こゝろゆく心地こそすれ。文といふ事なからましかば、いかにいぶせく、くれふたがる心地せまし。よろづの事思ひ〳〵て、その人の許へとて、こまぐ〳〵と書きて置きつれば、おぼつかなさをも慰む心地するに、まして返事見つれば、命を延ぶべかゝめる、實にことわりにや。

むまやは

梨原。ひくれの驛。望月の驛。野口の驛。やまの驛、おはれなる事を聞き置きたりしに、又あはれなる事のありしかば、なほ取りあつめてあはれなり。

岡は

船岡。片岡。鞆岡は笹の生ひたるがをかしきなり。かたらひの岡。人見の岡。

社は

布留の社。活田の社。龍田の社。はなふちの社。美久理の社。杉の御社。しるしあらんとをかし。任事の明神いとたのもし。さのみ聞きけんとやいはれ給はんと思ふぞいとを

ものは堅き物、やりは遣戸の義といへり

笹の云々―神樂歌に、この笹はいづこの笹ぞ舍人等が腰にさがれる鞆岡の笹

杉の社―三輪の社、しるしはしるしの杉也、古今集に、我庵はみわの山本こひしくばとぶらひ來ませ杉たてる門

家に云々―老人の出で仕へずして家に居らん者をば云々

かしき。蟻通の明神、貫之が馬のわづらひけるに、この明神のやませ給ふとて、歌よみて奉りけんに、やめ給ひけん、いとをかし。この蟻通とつけたる意は、まことにやあらん、昔おはしましける帝の、唯若き人をのみ思しめして、四十になりぬるをば、失はせ給ひければ、他の國の遠きに往きかくれなどして、更に都のうちにさる者なかりけるに、中將なりける人の、いみじき時の人にて、心なども賢かりけるが、七十ちかき親ふたりをもたりけるが、かう四十をだに制あるに、ましていとおそろしと懼ぢ騷ぐを、いみじう孝ある人にて、遠き所には更に住ませじ、一日に一度見ではえあるまじとて、密によるく家の内の土を掘りて、その内に屋を建てて、それに籠めすゑて、往きつゝ見る。おほやけにも人にも、うせ隱れたるよしを知らせてあり。などてか、家にいり居たらん人をば、知らでもおはせかし、うたてありける世にこそ。親は上達部などにやありけん、中將など子にてもたりけんは。いと心かしこく、萬の事知りたりければ、この中將若けれど、才あり、いたり賢くして、時の人に思すなりけり。唐土の帝、この國の帝を、いかで謀り

まろに―丸く

かへりて―向き返り先に立ちて

すばえ―末生（すゑはえ）又は直生（すぐはえ）の義か、普通には末條の義にて

て、この國うち取らむとて、常にこよろみ、爭事をしておくり給ひけるに、つや〳〵と、まろに、美しげに削りたる木の二尺ばかりあるを、「これが本末いづかたぞ」と問ひ奉りたるに、すべて知るべきやうなければ、帝思しめし煩ひたるに、いとほしくて、親の許に行きて、かう〳〵の事なんあるといへば、「只はやからん川に立ちながら、横ざまに投げ入れ見んに、かへりて流れん方を、末と記してつかはせ」と敎ふ。參りて我しり顏にして、「こころみ侍らん」とて、人々具して投げ入れたるに、さきにして行くかたに印をつけて遣したれば、實にさなりけり。又二尺ばかりなる蛇の同じやうなるを、「これはいづれか雄雌」とて奉れり。又更に人え知らず。例の中將行きて問へば、「二つをならべて、尾のかたに細きすばえをさしよせんに、尾はたらかさんを雌と知れ」といひければ、やがてそれを內裏のうちにてさ爲ければ、實に一つは動さず、一つは動しけるに、又しるしつけて遣しけり。ほど久しうて、七曲にわだかまりたる玉の中通りて、左右に口あきたるが小さきを奉りて、「これに緒通してたまはらん、この國に皆し侍ることなり」とて奉りたるに、い

すわえの假名なりと云へり、木の若枝

なほ―やはりの義

老いたる父母―自己の父母のみに限らず廣く世間一般に對する禁令を解き給へとの意にて言へりと見ゆ

みじからん物の上手不用ならん。そこらの上達部より始めて、ありとある人知らずといふに、又いきて、かくなんといへば、「大なる蟻を二つ捕へて、腰に細き糸をつけ、又それに今少しふときをつけて、あなたの口に蜜を塗りて見よ」といひければ、さ申して、蟻を入れたりけるに、蜜の香を嗅ぎて、實にいと疾う穴のあなた口に出でにけり。さてその糸の貫かれたるを遣したりける後になん、なほ日本はかしこかりけりとて、後々はさる事もせざりけり。この中將をいみじき人に思しめして、「何事をし、いかなる位をか賜はるべき」と仰せられければ、「更に官位をも賜はらじ、唯老いたる父母の隱れうせて侍るを尋ねて、都にすますることを許させ給へ」と申しければ、「いみじうやすき事」とて許されにければ、よろづの人の親これを聞きて、よろこぶ事いみじかりけり。中將は大臣までになさせ給ひてなんありける。さてその人の神になりたるにやあらん、この明神の許へ詣でたりける人に、夜現れてのたまひける、

七曲にまがれる玉の緒をぬきてありとほしとも知らずやあるらん

とのたまひけると、人のかたりし。

ふるものは

雪。霰。霙はにくけれど、雪の眞白にてまじりたるをかし。雪は檜皮葺いとめでたし。少し消えがたになりたるほど、又いと多うは降らぬが、瓦の目ごとに入りて、黑う眞白に見えたる、いとをかし。時雨。霰は板屋。霜も板屋。庭。

まじりたる—一本、まじりてふるに作る

庭—一本には庭の字なし

日は

入日、入りはてぬる山際に、ひかりの猶とまりて、赤う見ゆるに、うす黃ばみたる雲のたなびきたる、いとあはれなり。

昂星—七曜の星、和名抄に、六星火神也云々

月は

有明。東の山の端に、ほそうて出づるほどあはれなり。

星は

昂星。牽牛。明星。長庚。流星をだになからましかば、まして。

雲は

しろき。むらさき。黑き雲あはれなり。風吹くをりの天雲。明け離るゝほどの黑き雲の、やうやう白うなりゆくもいとをかし。朝にさる色とかや、文にも作りけり。月のいと明き面に、薄き雲いとあはれなり。

黑き雲云々

一本、くろきもたかし

朝にさる色—文選宋玉賦に朝爲行雲暮爲行雨などあるを云ふにや

霧は

川霧。

さわがしきもの

はしり火。板屋のうへにて、烏の齋の產飯くふ。十八日清水に籠りあひたる。くらうなりて、まだ火もともさぬほどに、外々より人の來集りたる。まして遠き所、他國などより家の主のぼりたる、いと騷がし。近き程に火出で來ぬといふ、されど燃えは附かざりける。物見はてて車のかへり騷ぐほど。

產飯—散飯ならん、飲食物の端を食前神佛に供ふるもの、後取り下げて家根

に撒けるにや

宮のめ―巫覡の類、かんなぎ

おし―一本なし、なは強勢辭、しは爲の義といへりしてかけ―作りて懸け、一本しでかけに作る、垂れかけ也

女官どもの髪あげたるすがた。唐繪の革の帶のうしろ。聖僧の舉動。

ことばなめげなるもの

宮のめの祭文よむ人。舟こぐものども。雷鳴の陣の舍人。相撲。

さかしきもの

今やうの三年子。兒の祈、祓などする女ども。物の具こひ出でて、いのりの物どもつぐるに、紙あまたおし重ねて、いと鈍き刀してきるさま、ひとへだに斷つべくも見えぬに、さる物の具となりにければ、おのが口をさへ引きゆがめておし、切目おほかるものどもしてかけ、竹うち切りなどして、いとかうぐしうしたてて、うちふるひ、祈る事どもいとさかし。かつは「何の宮のその殿の若君、いみじうおはせしを、かいのごひたるやうにやめ奉りしかば、祿多く賜はりし事、その人々召したりけれど、しるしもなかりければ、今に女をなん召す。御德を見ること」など語るもをかし。げすの家の女あるじ。されたるものそひしもをかし。まことに賢しき人を、をしへなどすべし。

頭の辨―辨官にして藏人頭を兼ねる者

内供―内供奉に同じ、禁中奉仕の僧

異深けれど―齋院は神を祀る役に

上達部は

春宮大夫。左右の大將。權大納言。權中納言。宰相中將。三位の中將。東宮權大夫。

侍從宰相。

公達は

頭辨。頭中將。權中將。四位少將。藏人辨。藏人少納言。春宮亮。藏人兵衛佐。

法師は

律師。内供。

女は

典侍。掌侍。

宮仕所は

内。后宮。その御腹の姫宮。一品の宮。齋院は罪深けれどをかし。ましてこのころはめでたし。春宮の御母女御。

て佛事を忌めば也

御琴もたりし―賀茂臨時祭に所の雑色、或は所の衆など御琴を舁く也

おどろおどろしき―ことごとしき、色の麗はしきをいふ

身をかへたらん人などはかくやあらんと見ゆるもの

たゞの女房にて侍ふ人の、御乳母になりたる。唐衣も著ず、裳をだに用意なく、白衣にて御前に添ひ臥して、御帳のうちを居所にして、女房どもを呼びつかひ、局に物いひやり、文とりつがせなどしてあるさまよ。言ひ盡すべくだにあらず。雑色の藏人になりたるめでたし。去年の霜月の臨時の祭に御琴もたりし人とも見えず。君達に連れてありくは、いづくなりし人ぞとこそおぼゆれ。外よりなりたるなどは、おなじ事なれどさしもおぼえず。

雪たかう降りて、今もなほふるに、五位も四位も、色うるはしう若やかなるが、袍の色いと清らにて、革の帶のかたつきたるを、宿直すがたにひきはこえて、紫の指貫も、雪に映えて、濃さ勝りたるを著て、袖の紅ならずば、おどろ〳〵しき山吹を出して、傘をさしたるに、風のいたく吹きて、横ざまに雪を吹きかくれば、少し傾きて歩みくる、深沓半靴などのきはまで、雪のいと白くかゝりたるこそをかしけれ。

櫻を云々―冠の後に垂れたる櫻を前に引越して顔をふさぐなり

凶會日―暦に記しあれど世人さまで忌み憚らぬ日なりしならん、拾芥抄に、凶會日正月庚寅、辛卯、甲寅云々

廊の遣戸、いと疾う押しあけたれば、御湯殿の馬道よりおりてくる殿上人の、萎えたる直衣指貫の、いたくほころびたれば、いろ〳〵の衣どもの、こぼれ出でたるを、押し入れなどして、北の陣のかたざまに歩み行くに、あきたる遣戸の前を過ぐとて、櫻をひきこして、顔にふたぎて過ぎぬるもをかし。

たゞすぎにすぐるもの

帆あげたる舟。人のよはひ。春夏秋冬。

ことに人にしられぬもの

人の女親の老いたる。凶會日。

五六月の夕かた、青き草を細う麗しくきりて、赤衣著たる子兒の、ちひさき笠を著て、左右にいと多くもちてゆくこそ、すゞろにをかしけれ。

賀茂へ詣づる道に、女どもの、新しき折敷のやうなるものを笠にきて、いと多くたてりて、歌をうたひ、起き伏すやうに見えて、唯何すともなく、うしろざまに行くは、いか

いかなりし人か—春註には之も俗歌といへど抄により清少の評言と見るべからむ、なかだか云々は歌詞

鶯は—重出錯簡にや

早苗とりしか—古今集、昨日こそ早苗とりしかいつの間に稻葉そよぎて秋風の吹く

なるにかあらん、をかしと見る程に、郭公をいとなめくうたふ聲ぞ心愛き。「ほとゝぎすよ、おれよ、かやつよ、おれなきてぞ、われは田にたつ」とうたふに、聞きも果てずいかなりし人か、いたくなきてぞといひけん。「なかだかわらはおひ、いかでおどす人」と。鶯に郭公は劣れるといふ人こそ、いとつらう憎くけれ。鶯は夜なかぬいとわろし。すべて夜なくものはめでたし。兒どもぞはめでたからぬ。

八月晦日がたに、太秦にまうづとて見れば、穂に出でたる田に、人多くてさわぐ。稻刈るなりけり。早苗とりしか、いつの間にとはまこと。實にさいつごろ賀茂に詣づとて見しが、哀にもなりにけるかな。これは女もまじらず、男の片手に、いと赤き稻の、もとは青きを刈りもちて、刀か何にあらん、もとを切るさまのやすげに、めでたき事にいとせまほしく見ゆるや。いかでさすらん、穂をうへにて並み居る、いとをかしう見ゆ。庵のさまことなり。

いみじくきたなきもの

がうし—和名抄三器四部に合子とあり、それにや、今の朱塗椀の類

たのめたる—たのましめたる

まが〳〵しき—呪詛などする程にいふなり

蚰蜒。えせ板敷の端。殿上のがうし。

せめておそろしきもの

夜鳴る神。近き隣に盗人の入りたる。わが住む所に入りたるは、唯物もおぼえねば、何とも知らず。

たのもしきもの

心地あしきころ、僧あまたして修法したる、思ふ人の心地あしきころ、眞にたのもしき人の言ひ慰めたのめたる。物おそろしき折の親どものかたはら。

いみじうしたてて壻取りたるに、いとほどなくすまぬ壻の、さるべき所などにて舅に逢ひたる、いとほしとや思ふらん。ある人の、いみじう時に逢ひたる人の壻になりて、一月もはか〴〵しうも來で止みにしかば、すべていみじう言ひ騒ぎ、乳母などやうの者は、まが〳〵しき事どもいふもあるに、そのかへる年の正月に藏人になりぬ。「あさましうかゝるなからひに、いかでとこそ人は思ひたゝめれ」など言ひあつかふは聞くらんか

とみのを―鴟尾（トビノヲ）、轅の如くにて牛車の後に出でしもの

かなし―可憐、可愛などの義

し。

六月に、人の八講し給ひし所に、人々集りて聞くに、この藏人になれる壻の、綾のうへの袴、蘇芳襲、黒半臂などいみじう鮮かにて、忘れにし人の車のとみのをに、半臂の緒ひきかけつばかりにて居たりしを、いかに見るらんと、車の人々も、知りたる限はいとほしがりしを、他人どもも「つれなく居たりしものかな」など後にもいひき。なほ男は物のいとほしさ、人の思はんことは知らぬなゝめり。

世の中に猶いと心憂きものは、人ににくまれんことこそあるべけれ。誰てふ物ぐるひか、われ人にさおもはれんとは思はん。されど自然に、宮づかへ所にも、親はらからの中にても、思はるゝおもはれぬがあるぞ、いとわびしきや。よき人の御事は更なり、げすなどのほども、親などのかなしうする子は、目だち見たてられて、いたはしうこそおぼゆれ。見るかひあるはことわり、いかゞ思はざらんと覺ゆ。ことなることなきは、又これをかなしと思ふらんは、親なればぞかしとあはれなり。親にも君にも、すべてうち

いかで―契らんと望願するなり

おほやけはらだち―我が閑せぬ事ながら傍より見聞きて腹立つをいふ、宣長の

かたらふ人にも人に思はれんばかりめでたき事はあらじ。

男こそ猶いとありがたく、怪しき心地したるものはあれ。いと清げなる人をすてて、にくげなる人をもたるもあやしかし。おほやけ所に入りたちする男、家の子などは、あるが中に、よからんをこそは選りて思ひ給はめ。及ぶまじからん際をだに、めでたしと思はんを、死ぬばかりも思ひかくれかし。人のむすめ、まだ見ぬ人などをも、よしと聞くをこそは、いかでとも思ふなれ。かつ女の目にも、わろしと思ふをおもふは、いかなる事にかあらん。かたちいとよく、心もをかしき人の、手もよう書き、歌をもあはれに詠みておこせなどするを、返事はさかしらにうちするものから、寄りつかず、らうたげにうち泣きて居たるを、見捨てて往きなどするは、あさましうおほやけはらだちて、眷屬の心地も心疑く見ゆべけれど、身のうへにては、つゆ心ぐるしきを思ひ知らぬよ。よろづの事よりも、情ある事は、男はさらなり、女もこそめでたく覺ゆれ。なげの詞なれど、せちに心にふかく入らねど、いとほしき事をいとほしとも、あはれなるをば實にいかに

説には法界音氣の語によくあたるといへり

かど—瑕疵 缺點

いとほし云々—欲點を擧げんはいたはしと我心に思ひ解き我慢していはぬと也

思ふらんなどいひけるを傳へて聞きたるは、さし向ひていふよりもうれし。いかでこの人に、思ひ知りけりとも見えにしがなと、常にこそおぼゆれ。必思ふべき人、訪ふべき人は、さるべきことなれば、取りわかれしもせず。さもあるまじき人のさし答をも、心易くしたるは嬉しきわざなり。いと易き事なれど、更にえあらぬ事ぞかし。大かた心よき人の、實にかどなからぬは、男も女もありがたきことなゝめり。又さる人も多かるべし。

人のうへいふを、腹立つ人こそ、いとわりなけれ。いかでかはあらん、我身をさし置きて、さばかりもどかしく、いはまほしきものやはある。されどけしからぬやうにもあり。又おのづから聞きつけて恨もぞする、あいなし。また思ひ放つまじきあたりは、いとほしなど思ひ解けば、念じていはぬをや。さだになくば、うち出で笑ひもしつべし。

人の顔に、とりわきてよしと見ゆる所は、度ごとに見れども、あなをかし、珍しとこそ覺ゆれ。繪など數多たび見れば、目もたゝずかし。近う立てる屏風の繪などは、いとめ

みにくきも—みにくき顔も

やり捨て—破り捨て

合せ—夢合はせ

われに云々—我目を見合はせ給ひて云々

のたまふものゝ折—一説のたまふ

でたけれども見もやられず。人の貌はをかしうこそあれ。にくげなる調度の中にも、一つよき所のまもらるゝよ。みにくきもさこそはあらめと思ふこそわびしけれ。

うれしきもの

まだ見ぬ物語の多かる。又一つを見て、いみじうゆかしう覺ゆる物語の、二つ見つけたる。心おとりするやうもありかし。人のやり捨てたる文を見るに、同じつゞき數多見つけたる。いかならんと夢を見て、恐しと胸つぶるゝに、ことにもあらず合せなどしたる、いとうれし。よき人の御前に、人々數多侍ふ折に、昔ありける事にもあれ、今聞しめし、世にいひける事にもあれ、かたらせ給ふを、われに御覺じ合せてのたまはせ、いひきかせ給へる、いとうれし。遠き所は更なり、おなじ都の内ながら、身にやんごとなく思ふ人の惱むを聞きて、いかに〳〵と覺束なく歎くに、おこたりたる消息得たるもうれし。思ふ人の、人にも譽められ、やんごとなき人などの、口をしからぬものに思しのたまふものゝ折、もしは人と言ひかはしたる歌の聞えてほめられ、うちきゝなどに譽め

にて句、其下にうれしと補ふ

物の中―何か書物の中

はかり―たばかりだます

たう―春註黨、だまさるゝ人の加擔、一説たふの誤、答にて其だましたる返報の義

らるゝ、みづからのうへには、まだ知らぬ事なれど、猶思ひやらるゝよ。いたううち解けたらぬ人のいひたる古き事の知らぬを、聞き出でたるもうれし。後に物の中などにて、見つけたるはをかしう、唯これにこそありけれと、かのいひたりし人ぞをかしき。檀紙、白き色紙、たどのも、白う清きは得たるもうれし。恥しき人の、歌の本末問ひたるに、ふとおぼえたる、われながらうれし。常にはおぼゆる事も、又人の問ふには、清く忘れて止みぬる折ぞ多かる。頓に物もとむるに、見出でたる。只今見るべき文などを、もとめ失ひて、萬の物をかへすゞ見たるに、捜し出でたる、いとうれし。物あはせ、何くれと挑むことに勝ちたる、いかでか嬉しからざらん。又いみじうわれはと思ひて、したりがほなる人はかり得たる。女どちよりも、男はまさりてうれし。これがたうは必せんずらんと、常に心づかひせらるゝもをかしきに、いとつれなく、何とも思ひたらぬやうにて、たゆめ過すもをかし。にくき者のあしきめ見るも、罪は得らんと思ひながらうれし。指櫛むすばせて、をかしげなるも又うれし。思ふ人は、我身よりも勝りてうれし。御

むつかしう―心煩はしく、じれつたき義

姥捨山の月―古今集、我心なぐさめかねつ更科や姥捨山に入る月を見て

前に人々所もなく居たるに、今のぼりたれば、少し遠き柱のもとなどに居たるを、御覽じつけて、「こち來」と仰せられたれば、道あけて、近く召し入れたるこそ嬉しけれ。御前に人々あまた、物仰せらるゝ序などにも、「世の中のはらだたしう、むつかしう、片時あるべき心地もせで、いづちも〳〵行きうせなばやと思ふに、たどの紙のいと白う清らなる、よき筆、白き色紙、檀紙など得つれば、かくても暫時ありぬべかりけりとなん覺え侍る。また高麗縁の疊の筵、青うこまかに、縁の紋あざやかに、黑う白う見えたる、引き廣げて見れば、何か猶さらに、この世はえおもひはなつまじと、命さへ惜しくなんなる」と申せば、「いみじくはかなき事も慰むなるかな。姥捨山の月は、いかなる人の見るにか」と笑はせ給ふ。さぶらふ人も、「いみじくやすき息災のいのりかな」といふ。さて後にほど經て、すゞろなる事を思ひて、里にあるころ、めでたき紙を二十つゝみに裏みて賜はせたり。仰事には、「疾く參れ」などのたまはせて、「これは聞しめし置きたる事ありしかばなん。わろかゝめれば、壽命經もえ書くまじげにこそ」と仰せられたる、い

とをかし。無下に思ひ忘れたりつることを、思しおかせ給へりけるは、猶たゞ人にてだにをかし、ましておろかならぬ事にぞあるや。心も亂れて、啓すべきかたもなければ、ただ、

かけまくもかしこきかみのしるしには鶴のよはひになりぬべきかな

あまりにやと啓せさせ給へとてまゐらせつ。臺盤所の雜仕ぞ、御使には來たる。青き單衣などぞ取らせて。まことにこの紙を、草紙に作りてもてさわぐに、むつかしき事も紛るゝ心地して、をかしう心のうちもおぼゆ。二月ばかりありて、赤衣著たる男の、疊を持て來て「これ」といふ。「あれは誰そ、あらはなり」など物はしたなういへば、さし置きて往ぬ。「いづこよりぞ」と問はすれば、「まかりにけり」とて取り入れたれば、殊更に御座といふ疊のさまにて、高麗などいと清らなり。心の中にはさにやあらんと思へど、猶おぼつかなきに、人ども出しもとめさすれど、うせにけり。怪しがり笑へど、使のなければいふかひなし。所たがへなどならば、おのづからも又いひに來なん。宮のほとりに案内

御座といふ疊―春註に貴人のしかるゝ疊といふ心也、疊は卷き疊むといふ義より出でし語にて元は今の所謂ござの類に云へる也

すゞろにさるわざは―やたらに斯樣な物ずきな事なば

積善寺―原本釋泉寺に作る、寺は道隆が法興院内に別に造營せる堂、法興院は二條北にあり元は道兼の邸也

しに參らせまほしけれど、なほ誰すゞろにさるわざはせん、仰事なめりといみじうをかし。二日ばかり音もせねば、うたがひもなく、左京の君の許に、「かゝる事なんある。さる事やけしき見給ひし。忍びて有樣のたまひて、さる事見えずば、かく申したりとも、なほ漏し給ひそ」と言ひ遣りたるに、「いみじうかくさせ給ひし事なり。ゆめ〳〵まろが聞えたるとなく、後にも」とあれば、さればよと、思ひしもしるく、をかしくて、文かきて、又密に御前の高欄におかせしものは、惑ひしほどに、やがてかきおとして、御階のもとにおちにけり。

關白殿、二月十日のほどに、法興院の積善寺といふ御堂にて、一切經供養せさせ給ふ。女院、宮の御前もおはしますべければ、二月朔日のほどに、二條の宮へ入らせ給ふ。夜更けてねぶたくなりにしかば、何事も見入れず。翌朝、日のうらゝかにさし出でたる程に起きたれば、いと白うあたらしうをかしげに作りたるに、御簾より始めて、昨日かけたるなゝめり。御しつらひ、獅子、狛犬など、いつのほどにや入り居けんとぞをかしき。

御階のもとに―一本、御階の束に作る
うるさかり―巧みに麗しき義
直衣―一本御直衣に作る
立紋―一説綾紋、（リウモン）地紋ありて織目高くなれる綾

櫻の一丈ばかりにて、いみじう咲きたるやうにて、御階のもとにあれば、いと疾う咲きたるかな、梅こそ只今盛なゝめれと見ゆるは、作りたるなゝめり。すべて花のにほひなど、咲きたるに劣らず、いかにうるさかりけん。雨降らば、萎みなんかしと見るぞ口惜しき。小家などいふ物の多かりける所を、今作らせ給へれば、木立などの見所あるは、いまだなし。たゞ宮のさまぞ、けぢかくをかしげなる。殿渡らせ給へり。青鈍の堅紋の御指貫、櫻の直衣に、紅の御衣三つばかり、唯直衣にかさねてぞ奉りたる。御前より初めて、紅梅の濃きうすき織物、堅紋、立紋など、あるかぎり著たれば、唯ひかり滿ちて、唐衣は萌黄、柳、紅梅などもあり。御前に居させ給ひて、物など聞えさせ給ふ。御答のあらまほしさを、里人に僅にのぞかせばやと見奉る。女房どもを御覽じ渡して、「宮に何事を思しめすらん。こゝらめでたき人々を並べすゑて御覽ずるこそ、いと羨しけれ。一人わろき人なしや、これ家々の女ぞかし。あはれなり。よくかへりみてこそさぶらはせ給はめ。さてもこの宮の御心をば、いかに知り奉りて集り參り給へるぞ。いかにいやしく物惜

しりうごと―後言、陰口
辱く―畏おほく
すみのまより―一本みすのうちよりに作る

しみせさせ給ふ宮とて、われは生れさせ給ひしより、いみじう仕うまつれど、まだおろしの御衣一つ給はぬぞ。何かしりうごとには聞えん」などの給ふがをかしきに、みな人々笑ひぬ。「まことぞ、をこなりとてかく笑ひいまするが恥し」などの給はする程に、内裏より御使にて、式部丞某まゐれり。御文は、大納言殿取り給ひて、殿に奉らせ給へば、ひき解きて、「いとゆかしき文かな。ゆるされ侍らば、あけて見侍らん」との給はすれば、怪しうとおぼいたゝめり。「辱くもあり」とて奉らせ給へば、取らせ給ひても、ひろげさせ給ふやうにもあらず、もてなさせ給ふ、御用意などぞありがたき。すみのまより、女房茵さし出でて、三四人御几帳のもとに居たり。「あなたにまかりて、祿の事ものし侍らん」とてたゞせ給ひぬる後に、御文御覽ず。御返しは紅梅の紙に書かせ給ふが、御衣のおなじ色ににほひたる、猶斯うしも推し量り參らする人はなくやあらんとぞ口をしき。今日は殊更にとて、殿の御かたより祿は出させ給ふ。女の裝束に、紅梅の細長そへたり。肴などあれば、醉はさまほしけれど、「今日はいみじき事の行幸に、あが君許させ給へ」と大

うへなど云云―大人び給ひて、うへなど申上げんにふさはしと也、うへは奥方の義

納言殿にも申して立ちぬ。君達などいみじう假粧し給ひて、紅梅の御衣も劣らじと著給へるに、三の御前は御匣殿なり。中の姫君よりも大に見え給ひて、うへなど聞えんにぞよかゝめる。うへも渡らせ給へり。御几帳ひき寄せて、新しく參りたる人々には見え給はねば、いぶせき心地す。さし集ひて、かの日の裝束、扇などの事をいひ合するもあり。又挑みかはして、「まろは何か、唯あらんにまかせてを」などいひて、「例の君」などにくまる。夜さりまかゝづる人も多かり。かゝる事にまかゝづれば、え止めさせ給はず。うへ日々に渡り、夜もおはします。君達などおはすれば、御前人少く候はねばいとよし。内裏の御使日々に參る。御前の櫻、色はまさらで、日などにあたりて、萎みわるうなるだにわびしきに、雨の夜降りたる翌朝、いみじうむとくなり。いと疾く起きて、「泣きて別れん顔に、心おとりこそすれ」といふを聞かせ給ひて、「げに雨のけはひしつるぞかし、いかならん」とて驚かせ給ふに、殿の御方より侍の者ども、下種など來て、數多花のもとに唯よりによりて、引き倒し取りて、「密に往きて、まだ暗からんに取れとこそ仰せられつ

むとく―無得、甲斐なく見所なし

いはゞ云々―後撰、山守はいはゞいはなん高砂の尾上の櫻折りてかざさん

れ、明け過ぎにけり、不便なるわざかな、疾く〳〵」と倒し取るに、いとをかしくて、いはゞいはなんと、兼澄が事を思ひたるにやとも、よき人ならばいはまほしけれど、「かの花盗む人は誰ぞ、あしかゝめり」といへば、笑ひて、いとゞ逃げて引きもていぬ。なほ殿の御心はをかしうおはすかし。莖どもにぬれまろがれつきて、いかに見るかひなからましと見て入りぬ。掃殿寮まゐりて御格子まゐり、主殿の女官御きよめまゐりはてて、起きさせ給へるに、花のなければ、「あなあさまし。かの花はいづちいにける」と仰せらる。「あかつき盗人ありといふなりつるは、なほ枝などを少し折るにやとこそ聞きつれ」がしつるぞ。見つや」と仰せらる。「さも侍らず。いまだ暗くて、よくも見侍らざりつるを、しろみたるものの侍れば、花を折るにやと、うしろめたさに申し侍りつる」と申す。「さりともかくはいかでか取らん。殿の隠させ給へるなゝめり」とて笑はせ給へば、「いで、よも侍らじ。春風の爲て侍りなん」と啓するを、「かくいはんとて隠すなりけり。ぬすみにはあらで、ふりにこそふるなりつれ」と仰せらるゝも、珍しき事ならねど、いみじうめ

うしろめたさに―氣に掛る爲めに、不安心にて

我よりさきに―新拾遺、鶯のなく音を聞けば山深み我より先に春は知りけり

今は山田も―貫之集、山田さへ今は作るを散る花のかごとは風におほせざらなん

うるさく―一本うるせくに作る、何れもえらく又は功者

でたき。殿おはしませば、疾くたれの朝顔も、時ならずや御覽ぜんと引き入らる。おはしますまゝに、「かの花うせにけるは、いかにかくは盗ませしぞ、いぎたなかりける女房たちかな。知らざりけるよ」と驚かせ給へば、「されど我よりさきにとこそ思ひて侍るめりつれ」と忍びやかにいふを、いと疾く聞きつけさせ給ひて、「さ思ひつる事ぞ、世に他人いでて見つけじ、宰相とそこととの程ならんと推し量りつ」とて、いみじう笑はせ給ふ。「さりげなるものを、少納言は春風におほせける」と宮の御前にうちゑませ給へる、めでたし。「虚言をおほせ侍るなり。今は山田も作るらん」とうち誦ぜさせ給へるも、いとなまめきをかし。「さてもねたく見つけられにけるかな。さばかり誠めつるものを、人の所に、かゝるしれもののあるこそ」との給はす。「春風はそらにいとをかしうも言ふかな」と誦ぜさせ給ふ。「たゞことには、うるさく思ひよりて侍りつかし。今朝のさまいかに侍らまし」とて笑はせ給ふを、小若君「されどそれはいと疾く見て、雨にぬれたりなど、おもてぶせなりといひ侍りつ」と申し給へば、いみじうねたがらせ給ふもをかし。さ

にの義

花のこゝろ云々―白氏文集、二月東來草析花必開云々、又その前に、思ノ君秋夜長、一夜魂升云々

かうか―これだけか

得選―采女の中より選出せられし厨子所の女房

て八日九日の程にまかゝづるを、「今少し近うなして」など仰せらるれど、出でぬ。いみじう常よりものどかに照りたる晝つかた、「花のこゝろ開けたりや、いかゞいふ」との給はせたれば、「秋はまだしく侍れど、よにこの度なんのぼる心地し侍る」など聞えさせつ。出させ給ひし夜、車の次第もなく、まづ〳〵とのり騒ぐがにくければ、さるべき人三人と、「猶こゞの車に乗るさまのいとさわがしく、祭のかへさなどのやうに、倒れぬべく惑ふいと見ぐるし。たゞさはれ、乗るべき車なくてえ參らずば、おのづから聞しめしつけて賜はせてん」など笑ひ合ひて立てる前より、押し凝りて、惑ひ乗り果てて出でて、「かうか」といふに、「まだこゝに」と答ふれば、宮司寄り來て、「誰々かおはする」と問ひ聞きて、「いと怪しかりけることかな。今は皆乗りぬらんとこそ思ひつれ。こはなどてかくは後れさせ給へる。今は得選を乗せんとしつるに。めづらかなるや」など驚きて寄せさすれば、「さばまづ、その御志ありつらん人を乗せ給ひて、次にも」といふ聲聞きつけて「けしからず腹ぎたなくおはしけり」などいへば、乗りぬ。その次には、誠にみづしが車

にあれば、火もいと暗きを、笑ひて、二條の宮に參りつきたり。御輿は疾く入らせ給ひて、皆しつらひ居させ給ひけり。「こゝに呼べ」と仰せられければ、左京、小左近などいふ若き人々、參る人ごとに見れど、なかりけり。おるゝに隨ひ、四人づつ御前に參り集ひて侍ふに、「いかなるぞ」と仰せられけるも知らず、ある限おりはててぞ、辛うじて見つけられて、「かばかり仰せらるゝには、などかくおそく」とて率ゐて參るに、見れば、いつの間に、かうは年ごろの住居のさまに、おはしましつきたるにかとをかし。「いかなれば、かう何かと尋ぬばかりは見えざりつるぞ」と仰せらるゝに、とかくも申さねば、諸共に乘りたる人、「いとわりなし。さいはての車に侍らん人は、いかでか疾くは參り侍らん。これもほと〳〵え乘るまじく侍りつるを、みづしがいとほしがりて、ゆづり侍りつるなり。暗う侍りつる事こそ、わびしう侍りつれ」と笑ふ〳〵啓するに、「行事するもののいとあやしきなり。又などかは心知らざらん者こそつゝまめ、右衛門などはいへかし」など仰せらる。「されどいかでか走りさきだち侍らん」などいふも、かたへの人、にく

左京―原本右京に作る

さいはて―最終

ほと〳〵―殆ど

笑ふ〳〵―旁註本笑ひ笑ひに作る

右衛門―清少と同車の女房ならん

しと聞くらんと聞ゆ。「さまあしうて、かく乘りたらんもかしこかるべき事かは。定めたらんさまの、やんごとなからんこそよからめ」とものしげに思し召したり。「おり侍るほどの待遠に、苦しきによりてにや」とぞ申しなほす。

御經のことに、明日渡らせおはしまさんとて、今宵參りたり。南院の北面にさしのぞきたれば、たかつきどもに火をともして、二人三人四人、さるべきどち、屏風引き隔てつるもあり、几帳中にへだてたるもあり。又さらでも集り居て、衣ども閉ぢ重ね、裳の腰さし、假粧ずるさまは、更にもいはず、髮なゞどいふものは、明日より後はありがたげにぞ見ゆる。「寅の時になん渡らせ給ふべかなる。などか今まで參り給はざりつる。扇もたせて、尋ね聞ゆる人ありつ」など告ぐ。「まて、實に寅の時か」とさうぞき立ちてあるに、明け過ぎ、日もさし出でぬ。西の對の唐廂になん、さし寄せて乘るべきとて、あるかぎり渡殿へ行く程に、まだうひ〳〵しきほどなる今參どもは、いとつゝましげなるに、西の對に殿すませ給へば、宮にもそこにおはしまして、まづ女房車に乘せさせ給ふを御覽

おり侍る云云―私共の降りてあるが待遠しく苦しければ他の人々先に乘車せしならん、清少申譯之言也

給ふべかなる―原本給へるなりに作る

書立―順序書

さ見ろ―人も亦左様に物見車とは見るならん

ずとて、御簾の中に、宮、淑景舎、三四の君、殿のうへ、その御弟三所、立ち並みておはします。車の左右に、大納言、三位中將二所して、簾うちあげ、下簾ひきあげて乘せ給ふ。皆うち群れてだにあらば、隱れ所やあらん。四人づつ書立に隨ひて、それ〳〵と呼び立てて、乘せられ奉り、歩み行く心地、いみじう實にあさましう、顯證なりとも世の常なり。御簾のうちに、そこらの御目どもの中に、宮の御前の見ぐるしと御覽ぜんは、更にわびしき事かぎりなし。身より汗のあゆれば、繕ひ立てたる髪などもあがりやすらんと覺ゆ。辛うじて過ぎたれば、車のもとに、いみじう恥しげに、清げなる御さまどもして、うち笑みて見給ふも現ならず。されど倒れず、そこまでは往き著きぬるこそ、かしこき顔もなきかと覺ゆれど、皆乘りはてぬれば、引き出でて、二條の大路に榻立てて、物見車のやうにて立ち並べたる、いとをかし。人もさ見るらんかしと、心ときめきせらる。四位五位六位など、いみじう多う出で入り、車のもとに來て、つくろひ物いひなどす。まづ院の御むかへに、殿を始め奉りて、殿上と地下と皆參りぬ。それ渡らせ給ひて

尼の車―原本尼車に作る

袈裟衣―原本けさぎぬに作る

かとり―縑、堅織（カタオリ）の約、生絹なり

いと久し―原本此一句なし

いと心ことなり―原本此一句なし

後、宮は出させ給ふべしとあれば、いと心もとなしと思ふほどに、日さしあがりてぞおはします。御車ごめに十五、四つは尼の車、一の御車は唐の車なり。それに續きて尼の車、後口より水精の珠數、薄墨の袈裟衣などいみじくて、簾はあげず。下簾も薄色の裾少し濃き。次にたどの女房の十、櫻の唐衣、薄色の裳、紅をおしわたし、かとりの表著ども、いみじうなまめかし。日はいとうららかなれど、空は淺緑に霞み渡るに、女房の裝束の匂ひあひて、いみじき織物のいろ〳〵の唐衣などよりも、なまめかしう、をかしき事限なし。關白殿、その御次の殿ばら、おはする限もてかしづき奉らせ給ふ、いみじうめでたし。これら見奉り騷ぐ、この車どもの二十立ち並べたるも、又をかしと見ゆらんかし。いつしか出でさせ給はどなど、待ち聞えさするに、いと久し。いかならんと心もとなく思ふに、辛うじて、采女八人馬に乘せて引き出づめり。青末濃の裳、裙帶、領巾などの風に吹きやられたる、いとをかし。豐前といふ采女は、典藥頭重正が知る人なり。葡萄染の織物の指貫を著たれば、いと心ことなり。「重正は色許されにけり」と山の

井の大納言は笑ひ給ひて、皆乘り續きて立てるに、今ぞ御輿出でさせ給ふ。めでたしと見え奉りつる御有樣に、これは比ぶべからざりけり。朝日はなゞとさしあがる程に、木の葉のいと花やかに輝きて、御輿の帷子の色艶などさへぞいみじき。御綱はりて出でさせ給ふ。御輿の帷子のうちゆるぎたるほど、實に頭の毛など、人のいふは更に虛言ならず。さて後に髮あしからん人もかごちつべし。あさましう、いつくしう、猶いかでかゝる御前に馴れ仕うまつるらんと、わが身もかしこうぞ覺ゆる。御輿過ぎさせ給ふほど、車の榻ども、人給にかきおろしたりつる、また牛どもかけて、御輿の後につゞきたる心地の、めでたう興あるありさま、いふかたなし。おはしましつきたれば、大門のもとに高麗唐土の樂して、獅子狛犬をどり舞ひ、笙の音、鼓の聲に物もおぼえず。こはいづくの佛の御國などに來にけるにかあらんと、空に響きのぼるやうにおぼゆ。內に入りぬれば、いろ〳〵の錦のあげばりに、御簾いと靑くてかけ渡し、屏幔など引きたるほど、なべてたどにこの世とおぼえず。御棧敷にさし寄せたれば、又この殿ばら立ち給ひて、「疾くお

頭の毛など云々―めでたさに慄然として毛髮も立つと人の言ふも事實也

屏幔―和名抄に、小幔曰レ斗（俗云斗幔、一云屏幔）形如二覆斗一也

りよ」との給ふ。乘りつる所だにありつるを、今少しあかう顯證なるに、大納言殿、いともの〳〵しく淸げにて、御下襲のしりいと長く所せげにて、簾うちあげて、「はや」とのたまふ。つくろひそへたる髮も、唐衣の中にてふくだみ、あやしうなりたらん。色の黑さ赤ささへ見わかれぬべき程なるが、いとわびしければ、ふとも得降りず。「まづ後なるこそは」などいふほども、それも同じこゝろにや、「退かせ給へ、かたじけなし」などいふ。「恥ぢ給ふかな」と笑ひて、立ちかへり、辛うじておりぬれば、寄りおはして、「むねたかなどに見せで、隱しておろせと、宮の仰せらるれば來たるに、思ひぐまなき」とて引きおろして率て參り給ふ。さ聞えさせ給ひつらんと思ふもかたじけなし。參りたれば初おりける人どもの、物の見えぬべき端に、八人ばかり出で居にけり。一尺と二尺ばかりの高さの長押のうへにおはします。こゝに立ち隱して、「率て參りたり」と申し給へば、「いづら」とて几帳のこなたに出でさせ給へり。まだ唐の御衣裳奉りながらおはしますぞいみじき。紅の御衣よろしからんや、中に唐綾の柳の御衣、葡萄染の五重の御衣に、赤

乘りつる所だに云々―さきに乘車したる所すら恥しくありたるにまして此所はあかるくあらはなる所なるに云々

むれたかなどに云々―以下中宮の御詞を大納言の取次ぎて淸少に言ふ也、思ひぐまなきは思ふ甲斐なしの義

地摺―白き地にはなだ色の小紋等を摺りし物

なども―など申上ぐるも

色の唐の御衣、地摺の唐の羅に、象眼重ねたる御裳など奉りたり。織物の色、更になべて似るべきやうなし。「我をばいかゞ見る」と仰せらる。「いみじうなん候ひつる」なども、言に出でてはよのつねにのみこそ。「久しうやありつる。それは殿の大夫の、院の御供にきて、人に見えぬる、おなじ下襲ながら、宮の御供にあらん、わろしと人思ひなんとて、殊に下襲ぬはせ給ひけるほどに、遅きなりけり。いとすき給へり」などとうち笑はせ給へる、いとあきらかに晴れたる所は、今少しけざやかにめでたう、御額あげさせ給へる

釵子―婦人儀式の時前髪に插す具

釵子に、御分目の御髪の聊よりて、著く見えさせ給ふなどさへぞ、聞えんかたなき。三尺の御几帳一雙をさしちがへて、こなたの隔にはして、その後には、壁一枚を、長ざまに縁をして、長押の上に敷きて、中納言の君といふは、殿の御伯父の兵衛督忠君と聞えけるが御女、宰相の君とは、富小路の左大臣の御孫、それ二人ぞうへに居て見え給ふ。御覧じわたして、「宰相はあなたに居て、うへ人どもの居たる所、往きて見よ」と仰せらるるに、心得て、「こゝに三人いとよく見侍りぬべし」と申せば、「さば」とて召し上げさせ給へば、しもに居たる人々、「殿上許さるゝ内舎人なゝめりと笑はせんと思へるか」といへば、「うまさへのほどぞ」などいへば、そこに入り居て見るは、いとおもだたし。かゝる事などをみづからいふは、ふきがたりにもあり、また君の御ためにも輕々しう、かばかりの人をさへ思しけんなど、おのづから物しり、世の中もどきなどする人は、あいなく畏き御事にかゝりて、かたじけなけれど、あな辱き事などは、又いかゞは。誠に身の程過ぎたる事もありぬべし。院の御桟敷、所々の桟敷ども見渡したる、めでたし。殿はまづ院の御桟敷に參り給ひて、暫時ありてこゝに參り給へり。大納言二所、三位中將は陣近う參りけるまゝにて、調度を負ひて、いとつきゞしうをかしうておはす。殿上人、四位五位、こちたうち連れて、御供に侍ひ並み居たり。入らせ給ひて見奉らせ給ふに、女房あるかぎり、裳、唐衣、御匣殿まで著給へり。殿のうへは、裳のうへに小袿をぞ著給へる。「繪に書きたるやうなる御さまどもかな。今いらい今日はと申し給ひそ。三四の君の御裳ぬがせ給へ。この中の主君には、御前こそおはしませ。御桟敷の前に陣をするさ

うまさへ―馬副童、一本うまそへに作る

ふきがたり―濱臣の説に、吹き語り即ち吹聽の義

いかゞは―此語の下に辭し申すべきと補ふ

繪に云々―關白道隆の詞

いらい―以來、原本いい

らへに作る非也

調め―調べに同じ、調べ製するを云ふ

僧都の君―隆圓

僧綱―僧正、僧都、律師をいふ

導師まゐり

せ給へるは、おぼろけのことか」とてうち泣かせ給ふ。實にと、見る人も涙ぐましきに、赤色櫻の五重の唐衣を著たるを御覽じて、「法服ひとくだり足らざりつるを、俄にまとひしつるに、これをこそかり申すべかりけれ。さらばもし又、さやうの物を切り調めたるに」との給はするに、又笑ひぬ。大納言殿少し退き居給へるが、聞き給ひて、「清僧都のにやあらん」との給ふ。一言としてをかしからぬ事ぞなきや。僧都の君、赤色の羅の御衣、紫の袈裟、いと薄き色の御衣ども、指貫著たまひて、菩薩の御樣にて、女房にまじりありき給ふもいとをかし。「僧綱の中に、威儀具足してもおはしまさで、見ぐるしう女房の中に」など笑ふ。父の大納言殿、御前より松君率て奉る。葡萄染の織物の直衣、濃き綾のうちたる、紅梅の織物など著給へり。例の四位五位いと多かり。御棧敷に女房の中に入れ奉る。何事のあやまりにか、泣きのゝしり給ふさへいとはえぐ〳〵し。事始りて、一切經を、蓮の花のあかきに、一花づつに入れて、僧俗、上達部、殿上人、地下六位、何くれまでもて渡る、いみじうたふとし。大行道導師まゐり、回向しばし待ちて舞などす

―讀經の音頭取りをなす

などす―一本なんとす

千賀の鹽竈―續後撰、陸奥の千賀の鹽竈近ながらかからきは人に逢はぬなりけり

る、日ぐらし見るに、日もたゆく苦しう。うちの御使に、五位の藏人まゐりたり。御棧敷の前に胡床立てて居たるなど、實にぞ猶めでたき。夜さりつかた、式部丞則理まゐりたり。「やがて夜さり入らせ給ふべし。御供に侍へと、宣旨侍りつ」とて歸りも參らず。宮は「なほ歸りて後に」との給はすれども、また藏人の辨まゐりて、殿にも御消息あれば、唯「仰のまゝ」とて、入らせ給ひなどす。院の御棧敷より、千賀の鹽竈などやうの御消息、をかしき物など持て參り通ひたるなどもめでたし。事はてて院還らせ給ふ。院司上達部など、このたびはかたへぞ仕う奉り給ひける。宮は内裏へ入らせ給ひぬるも知らず、女房の從者どもは、「二條の宮にぞおはしまさん」とて、そこに皆往き居て、待てど〳〵見えぬ程に、夜いたう更けぬ。内裏には宿直物持て來らんと待つに、きよく見えず。あざやかなる衣の、身にもつかぬを著て、寒きまゝに、にくみ腹立てどかひなし。翌朝きたるを、「いかにかく心なきぞ」などいへば、となふる如もさ言はれたり。又の日雨降りたるを、殿は「これになん、わが宿世は見え侍りぬる。いかゞ御覽ずる」と聞えさせ給ふ。御

おちゐ—一本おごりもに作る

心おちゐ理なり。

たふときもの

九條錫杖。念佛の回向。

歌は

杉たてる門。神樂歌もをかし。今様はながくてくせづきたる。風俗よくうたひたる。

指貫は

紫の濃き。萌黄。夏は二藍。いと暑き頃、夏蟲の色したるもすゞしげなり

狩衣は

香染のうすき。白きふくさの赤色。松の葉いろしたる。青葉。さくら。やなぎ。又あをき。ふぢ。男は何色のきぬも。

ひとへは

白き。ひの裝束の紅のひとへ。袙などかりそめに著たるはよし。されどなほ色きばみたくせ—曲節

夏蟲の色—裏なき生絹にて所謂蟬の羽衣（桃華薬葉）

白きふくさの—萬歳本にはのの字無く、ふくさにて句

松の葉いろしたる—萬歳本にはいろしたるの五字なし

あて—上品

物語こそ—一本こそをさへに作る

なほす—春註によればいと口惜し

る單など著たるは、いと心づきなし。練色のきぬも著たれど、なほ單は白うてぞ、男も女もよろづの事まさりてこそ。

わろきものは

詞の文字あやしくつかひたるこそあれ。たゞ文字一つに、あやしくも、あてにも、いやしくもなるは、いかなるにかあらん。さるはかう思ふ人、萬の事に勝れてもえあらじかし。いづれを善き惡しきとは知るにかあらん。さりとも人を知らじ、唯さうち覺ゆるもいふめり。難義の事をいひて、「その事させんとす」といはんといふを、と文字をうしなひて、唯「いはんずる」「里へ出でんずる」などいへば、やがていとわろし。まして文を書きては、いふべきにもあらず。物語こそあしう書きなどすれば、いひがひなく、作者さへいとほしけれ。「なほす」「定本のまゝ」など書きつけたる、いと口惜し。「祕點つくるまに」などいふ人もありき。「もとむ」といふ事を「見ん」と皆いふめり。いと怪しき事を、男などは、わざとつくろはで、殊更にいふはあしからず。わが詞にもてつけていふが、心

に係る、然らば括孤を取去るべき也

祕點―一説批點

おとりする事なり。

下襲は

冬は蹴鞠、搔練襲、蘇枋襲。夏は二藍、白襲。

扇の骨は

青色はあかき、むらさきはみどり。

檜扇は

無紋。から繪。

神は

松尾。八幡、この國の帝にておはしましけんこそいとめでたけれ。行幸などに、なぎの花の御輿に奉るなど、いとめでたし。大原野。賀茂は更なり。稲荷。春日いとめでたく覺えさせ給ふ。佐保殿などいふ名さへをかし。平野はいたづらなる屋ありしを、「こゝは何する所ぞ」と問ひしかば、「神輿宿」といひしもめでたし。嚴瀧に蔦などの多くかゝり

この國の云云―男山八幡の祭神は應神天皇、神功皇后、玉依姫三柱なればなり

なぎの花の御輿―恋花螢、鳳螢の次也

貫之が歌―千早振神の嚴瀧に這ふ葛も秋にはあへず色づきにけり

て、紅葉のいろ〳〵ありし、秋にはあへずと、貫之が歌おもひ出でられて、つく〴〵と久しうたゝれたりし。水分神いとをかし。

崎は

唐崎。いかど崎。三保が崎。

屋は

丸屋。四阿屋。

時奏するいみじうをかし。いみじう寒きに、夜中ばかりなどに、こほ〳〵とごほめき、沓すり來て、弦うちなどして、「何家の某、時丑三つ、子四つ」など、あてはかなる聲にいひて、時の杌さす音などいみじうをかし。子九つ、丑八つなどこそ、さとびたる人はいへ。すべて何も〳〵、四つのみぞ杌はさしける。

四つのみぞ云々―一日を二時間づつ十二支に配し其各を

日のうら〳〵とある晝つかた、いたう夜ふけて、子の時など思ひ參らするほどに、男ども召したるこそ、いみじうをかしけれ。夜中ばかりに、また御笛の聞えたる、いみじう

一二三四の四剋に分つ部合四十八剋、而して子四つ丑四つの如く四つ時に限りて時の杌をさすと也

名を姓にて―紫式部などの如く呼名を姓とせるを云ふ

おもと―原本おとゞに作る

めでたし。

成信の中將は、入道兵部卿の宮の御子にて、かたちいとをかしげに、心ばへもいとをかしうおはす。伊豫守兼輔がむすめの忘られて、伊豫へ親のくだりしほど、いかに哀なりけんとこそ覺えしか。あかつきに往くとて、今宵おはしまして、有明の月に歸り給ひけん直衣すがたなどこそ。そのかみ常に居て、ものがたりし、人のうへなど、わろきは「わろし」などの給ひしに。物忌などくすしうするものの、名を姓にて持たる人のあるが、ことびとの子になりて、平などいへど、唯もとの姓を、若きひとゞ〳〵言種にて笑ふ。ありさまも異なることなし。兵部とて、をかしき方などもかたきが、さすがに人などにさしまじり心などのあるは、御前わたりに「見苦し」など仰せらるれど、腹ぎたなく知り告ぐる人もなし。一條の院つくられたる一間のところには、つらき人をば更に寄せず。東の御門につと向ひて、をかしき小廂に、式部のおもと諸共に、夜も晝もあれば、うへも常に物御覽じに出でさせ給ふ。「今宵は皆内に寐ん」とて南の廂に二人臥しぬる後に、いみじう叩く人のあるに、「うるさし」などいひ合せて、寐たるやうにてあれば、猶いみじうかしかましう呼ぶを、「あれおこせ、虚寐ならん」と仰せられければ、この兵部來て起せど、寐たるさまなれば、「更に起き給はざりけり」といひに往きたるが、やがて居つきて物いふなり。しばしかとおもふに、夜いたう更けぬ。權中將にこそあゝなれ。「こは何事をかうはいふ」とてたゞ密に笑ふも、いかでか知らん。あかつきまでいひ明して歸りぬ。「この君いとゆゝしかりけり。更におはせんに物いはじ。何事をさは言ひあかすぞ」など笑ふに、遣戸をあけて女は入りぬ。翌朝例の廂に物いふを聞けば、「雨のいみじう降る日きたる人なん、いとあはれなる。日ごろおぼつかなうつらき事ありとも、さて濡れて來らば、憂き事も皆忘れぬべし」とはなどていふにかあらんを。昨夜も昨日の夜も、それがあなたの夜も、すべてこのごろは、うちしきり見ゆる人の、今宵もいみじからん雨にさはらで來らんは、一夜も隔てじと思ふなゝめりと、あはれなるべし。さて日ごろも見えず、おぼつかなくて過さん人の、かゝる折にしも來んをば、更にまた志あるにはえせじとこそ思

物いふ―兵部のいふなり

とはなどて云々―以下清少の評論と見るべし、春註にはよべも昨日の夜も云云より以下を兵部が詞のあやしき子細をこと わる也といへり

もとよりのよすがー以前より夫婦の契りを交はしたる女

へ。人の心々なればにやあらん、物見しり、思ひ知りたる女の、心ありと見ゆるなどをばかたらひて、數多いく所もあり、もとよりのよすがなどもあれば、繁うしもえ來ぬを、猶さるいみじかりし折に來りし事など、人にも語りつがせ、身をほめられんと思ふ人のしわざにや。それも無下に志なからんには、何しにかは、さも作事しても見えんとも思はん。されど雨の降る時は、唯むつかしう、今朝まではれぐしかりつる空とも覺えずにくくて、いみじき廊のめでたき所ともおぼえず。ましていとさらぬ家などは、疾く降り止みねかしとこそ覺ゆれ。月のあかきに來らん人はしも、十日二十日一月、もしは一年にても、まして七八年になりても、思ひ出でたらんは、いみじうをかしと覺えて、え逢ふまじうわりなきところ、人目つゝむべきやうありとも、かならず立ちながらも、ものいひて返し、又とまるべからんをば留めなどしつべし。月のあかき見るばかり、遠く物思ひやられ、過ぎにし事、戀かりしも、嬉しかりしも、をかしと覺えしも、只今のやうに覺ゆる折やはある。こまのゝ物語は、何ばかりをかしき事もなく、詞もふるめき、見物多

こそ覺ゆれ—一本、ぞ覺ゆる

こまのゝ物語—今傳らず

からねど、月に昔を思ひ出でて、むしばみたる蝙蝠とり出でて、もと見し駒にといひて立てる、いとあはれなり。雨は心もとなきものと思ひしみたればにや、片時降るもいとにくくぞある。やんごとなき事、おもしろかるべき事、尊くめでたかるべき事も、雨だに降ればいふかひなく口惜しきに、何かその濡れてかこちたらんがめでたからん。實に交野少將もどきたる落窪少將などはをかし。それも昨夜一昨日の夜も、ありしかばこそをかしけれ。足洗ひたるぞ、にくくきたなかりけん。さらでは何か、風などの吹く、荒しき夜きたるは、たのもしくをかしうもありなん。雪こそいとめでたけれ。忘れめやなどひとりごちて、忍びたることは更なり。いとさあらぬ所も、直衣などは更にもいはず、狩衣、袍、藏人の青色などの、いとひやゝかに濡れたらんは、いみじうをかしかるべし。綠衫なりとも、雪にだに濡れなばにくかるまじ。昔の藏人は、夜など人の許などに、たゞ青色を著て、雨にぬれても、しぼりなどしけるとか。今は晝だに著ざゝめり。ただ綠衫をのみこそ、うちかづきたゝめれ。衛府などの著たるは、ましていとをかしかり

交野少將云云—落窪物語に、左近の少將落窪の君に通ひ殊に雨夜厚き志を見えて同時に思をかけし交野少將を凌げること見ゆ

綠衫—六位の袍の色

をかしかりし—一本い

みじかりし　あらず―別義ならず、手紙の詞

今は―この下に、文をもやらじ若しくは契絶えなんなど補ふ

水ます雨の―古今、眞菰刈る淀の河水雨ふれば常より殊にまさる我が戀むすべーむ

しものを、かく聞きて、雨にありかぬ人やはあらんずらん。月のいとあかき夜、紅の紙のいみじう赤きに、唯「あらず」とも書きたるを、廂にさし入れたるを、月にあてて見しこそをかしかりしか。雨降らん折はさはありなんや。

常に文おこする人の、「何かは今はいふかひなし。今は」などいひて、又の日音もせねば、さすがにあけたてば、文の見えぬこそさうぐしけれと思ひて、「さてもきはぐしかりける心かな」などいひて暮しつ。又の日、雨いたう降る晝まで音もせねば、「無下に思ひ絶えにけり」などいひて、端のかたに居たる夕暮に、笠さしたる童の持てきたるを、常よりも疾くあけて見れば、「水ます雨の」とある、いと多くよみ出しつる歌どもよりはをかし。ただ朝はさしもあらず、さえつる空の、いと暗うかき曇りて、雪のかきくらし降るに、いと心ぼそく、見出すほどもなく、白く積りて、猶いみじう降るに、隨身だちて細やかに美しき男の、傘さして、側の方なる家の戸より入りて、文をさし入れたるこそをかしけれ。いと白き檀紙、白き色紙のむすべたる、うへにひきわたしける墨の、ふと氷りに

すばれ、一本むすびに作る　くだりせばに―行間狹く

ければ、すこ薄になりたるを開けたれば、いと細く卷きて、結びたる卷目は、こまぐくとくぼみたるに、墨のいと黑う濃く、くだりせばに、裏表書きみだりたるを、うち返し久しう見るこそ、何事ならんと、よそにて見やりたるもをかしけれ。まいてうちほゝゑむ所はいとゆかしげれど、遠う居たるは、黑き文字などばかりぞ、さなゝめりと覺ゆるかし。額髪ながやかに、おもやうよき人の、暗きほどに文を得て、火ともす程も心もとなきにや、火桶の火を挾みあげて、たどくしげに見居たるこそをかしけれ。

きらくしきもの

大將の御さきおひたる。孔雀經の御讀經。御修法は五大尊。藏人式部丞。白馬の日、大路ねりたる。御齋會、左右衛門佐摺衣やりたる。季の御讀經。熾盛光の御修法。神のいたく鳴るをりに、雷鳴の陣こそいみじうおそろしけれ。左右大將、中少將などの、御格子のつらに侍ひ給ふ、いとをかしげなり。はてぬるをり、大將の仰せて、のぼりおりとの給ふらん。坤元錄の御屏風こそ、をかしう覺ゆる名なれ。漢書の御屏風は、雄々しくぞ

熾盛光―春註に、妖星のたゝり國大臣などの居所の祈禱などに行ふ云々

月次―年中行事の給也

聞えたる。月次の御屏風もをかし。方違などして夜ふかくかへる、寒きことといとわりなく、顔などもぬぐべきを、辛うじて來つきて、火桶引き寄せたるに、火の大きにて、つゆ黒みたる所なくめでたきを、こまかなる灰の中よりおこし出でたるこそ、いみじう嬉しけれ。物などいひて、火の消ゆらんも知らず居たるに、こと人の來て、炭入れておこすこそいとにくけれ。されどめぐりに置きて、中に火をあらせたるはよし。皆火を外ざまにかき遣りて、炭を重ね置きたるいたづきに、火ども置きたるがいとむつかし。

香爐峯の雪―遺愛寺鐘欲レ枕聽香爐峯雪撥レ簾看、白樂天香爐峰下新卜山居草

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、炭櫃に火起して、物語などして集り侍ふに、「少納言よ、香爐峯の雪はいかならん」と仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高く巻き上げたれば、笑はせたまふ。人々も「皆さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほこの宮の人には、さるべきなめり」といふ。陰陽師の許なる童こそ、いみじく物は知りたれ。祓など爲に出でたれば、祭文など讀む

堂初成偶題東壁五首之内

事、人はなほこそ聞け。そと立ちはしりて、白き水いかけさせよともいはぬに、爲ありくさまの、例知り、いさゝか主に物いはせぬこそ羨しけれ。さらん人もがな、つかはんとこそ覺ゆれ。

三月ばかり物忌しにとて、かりそめなる人の家にいきたれば、木どもなどはかぐしからぬ中に、柳といひて、例のやうになまめかしくはあらで、葉廣う見えてにくげなるを、「あらぬものなゝめり」といへば、「かゝるもあり」などいふに、

さかしらに柳のまゆのひろごりて春のおもてをふする宿かな

とこそ見えしか。そのころ又おなじ物忌しに、さやうの所に出でたるに、二日といふ晝つかた、いとゞ徒然まさりて、只今も參りぬべき心地する程にしも、仰事あれば、いとうれしくて見る。淺緑の紙に、宰相の君いとをかしく書き給へり。

春のおもてをふす―春の面目を失はしむ、柳の葉の廣ごりにくげなるを誹れる也

いかにしですぎにしかたを過しけん暮しわづらふ昨日けふ哉

くらしわづらふ―千載集には、くとなん。わたくしには、「今日しも千年の心地するを、曉だに疾く」とあり。この君のの

給はんだにをかしかるべきを、まして仰事のさまには、おろかならぬ心地すれど、啓せん事とはおぼえぬこそ。

雲のうへにくらしかねけるはるの日を所がらともながめつる哉

私には、「今宵の程も、少將にやなり侍らんずらん」とて、曉に參りたれば、「昨日の返し、暮しかねけるこそいとにくし。いみじうそしりき」と仰せらるゝ、いとわびしう誠にさることも。

清水に籠りたる頃、茅蜩のいみじう鳴くをあはれと聞くに、わざと御使しての給はせたりし。唐の紙の赤みたるに、

山ちかき入相の鐘のこゑごとに戀ふるこゝろのかずは知るらん

ものを、こよなのながるやと書かせ給へる。紙などのなめげならぬも取り忘れたるたびにて、紫なる蓮の花びらに書きてまゐらする。

十二月二十四日、宮の御佛名の初夜の御導師聞きて出づる人は、夜半も過ぎぬらんか

らしわぶてふとあり、后宮の御歌なり

少將にや云云―深草の少將百夜通へといひし女の許へ九十九夜通ひ今一夜待ちあへで死したる故事を取りて、今宵の内もえ堪へずして死にもすべしと云へる也

かれなど云云―銀など云々、白雪に殘月の映じて皚々たる樣也

凜々として―朗詠、八

し。里へも出で、もしは忍びたる所へも、夜のほど出づるにもあれ、合ひ乘りたる道の程こそをかしけれ。日ごろ降りつる雪の、今朝はやみて、風などのいたう吹きつれば、垂氷のいみじうしだり、土などこそむら〳〵黑きなれ、屋のうへは唯おしなべて白きに、あやしき賤の屋もおもがくして、有明の月のくまなきに、いみじうをかし。かねなどおしへぎたるやうなるに、水晶の莖などいはまほしきやうにて、長く短く、殊更かけ渡したると見えて、いふにもあまりてめでたき垂氷に、下簾も懸けぬ車の簾を、いと高く上げたるは、奥までさし入りたる月に、薄色、紅梅、しろきなど、七つ八つばかり著たるうへに、濃き衣のいとあざやかなる艶など、月に映えて、をかしう見ゆる傍に、葡萄染の竪紋の指貫、白き衣どもあまた、山吹、紅など著こぼして、直衣のいと白き引きときたれば、ぬぎ垂れられて、いみじうこぼれ出でたり。指貫の片つかたは、軾の外にふみ出されたるなど、道に人の逢ひたらば、をかしと見つべし。月影のはしたなさに、後ざまへすべり入りたるを、引き寄せあらはになされて笑ふもをかし。凜々として氷鋪けりといふ

月十五夜、秦甸之一千餘里凜々氷鋪

内外のはし―一本、内、殿原に作る

くる人もあるは―訪れ來る人など有る場合には

詩を、かへすがへす誦じておはするは、いみじうをかしうて、夜一夜もありかまほしきに、往く所の近くなるもくちをし。

宮仕する人々の出で集りて、君々の御事めで聞え、宮の内外のはしの事ども、互に語り合せたるを、おのが君々、その家あるじにて聞くこそをかしけれ。

家廣く清げにて、親族は更なり、唯うちかたらひなどする人には、宮づかへ人、片つ方にすゑてこそあらまほしけれ。さるべき折は、一所に集りゐて物語し、人の詠みたる歌、何くれと語りあはせ、人の文など持てくる、もろともに見、返事かき、また睦しうくる人もあるは、清げにうちしつらひて入れ、雨など降りてえ歸らぬも、をかしうもてなし、參らん折はその事見入れて、思はんさまにして出し立てなどせばや。よき人のおはします御有樣など、いとゆかしきぞ、けしからぬ心にやあらん。

見ならひするもの

欠伸。兒ども。なまけしからぬえせもの。

うちたる―搗ちて光澤を出せる布

うちとくまじきもの

あしと人にいはるゝ人。さるはよしと知られたるよりは、うらなくぞ見ゆる。船の路。日のうらゝかなるに、海の面のいみじうのどかに、淺緣のうちたるを引き渡したるやうに見えて、聊恐しき氣色もなき若き女の、袖ばかり著たる、侍の者の若やかなる諸共に、楢といふもの押して、歌をいみじううたひたる、いとをかしう、やんごとなき人にも見せ奉らまほしう思ひいくに、風いたう吹き、海のおもてのたゞ荒れにあしうなるに、物もおぼえず、泊るべき所に漕ぎつくるほど、船に浪のかけたるさまなどは、さばかり和かりつる海とも見えずかし。思へば船に乘りてありく人ばかり、ゆゝしきものこそなけれ。よろしき深さにてだに、さまはかなき物に乘りて、漕ぎ往くべき物にぞあらぬや。まさまはかなき―一本さるはかなき

してそこひも知らず、千尋などもあらんに、物いと積み入れたれば、水際はたゞ一尺ばかりだになきに、下種どもの、聊恐しとも思ひたらず、走りありき、つゆ荒くもせば沈みやせんと思ふに、大なる松の木などの、二三尺ばかりにてまろなるを、五つ六つほ

早緒―又早絲とも云ふ、櫓に著くる縄
すきかげ―一本すかけに作る、簾掛けなり
遊艇―はしけ也、つけては名附けて
あとのしら涙―沙彌滿誓、世の中を何にたとへん朝ぼらけ漕ぎいにし船の跡の白涙、萬葉には朝開き漕ぎいにし船のあとなきがごとと見ゆ
盆―今も行はるゝ于闐盆の供養
薪こる―釋迦法華經を

うほうと投げ入れなどするこそいみじけれ。蓬庫といふ物にぞおはす。されど奥なるはいさゝかたのもし。端に立てる者どもこそ、目くるゝ心地すれ。早緒つけて、のどかにすげたる物の弱けさよ。絶えなば何にかはならん、ふと落ち入りなんを、それだにいみじう太くなどもあらず。わが乘りたるはきよげに、帽額のすきかげ、妻戸格子あげなどして、されどひとしう重げになどもあらねば、たゞ家の小きにてあり。他船見やるこそいみじけれ。遠きはまことに笹の葉を作りて、うち散したるやうにぞいと能く似たる。泊りたる所にて、船ごとに火ともしたる、をかしう見ゆ。遊艇とつけて、いみじう小きに乘りて漕ぎありく早朝など、いとあはれなり、あとのしら浪は、誠にこそ消えてもゆけ。よろしき人は、乘りてありくまじき事とこそ猶おぼゆれ。陸路も又いとおそろし。されどそれは、いかにも〳〵地につきたれば、いとたのもしと思ふに、蟹のかづきしたるは憂きわざなり。腰につきたる物絶えなば、いかゞせんとなん。男だにせば、さてもありぬべきを、女はおぼろげの心ならじ。男は乘りて、歌などうちうたひて、この栲縄を海にうけありく、いと危く、うしろべたくはあらぬにや、蟹ものぼらんとては、その縄をなん引く。取り惑ひ繰り入るゝさまぞ、理なるや。船のはたを抑へて、放ちたる息などこそ、まことに唯見る人だにしほたるゝに、落し入れて漂ひありく男は、目もあやにあさまし。更に人の思ひかくべきわざにもあらぬことにこそあめれ。

右衛門尉なる者の、えせ親をもたりて、人の見るにおもてぶせなど、見ぐるしう思ひけるが、伊豫國よりのぼるとて、海に落し入れてけるを、人の心うがり、あさましがりけるほどに、七月十五日、盆を奉るとていそぐを見給ひて、道命阿闍梨、

わたつ海に親をおし入れてこの主のぼんする見るぞあはれなりける

とよみ給ひけるこそ、いとほしけれ。

又小野殿の母うべこそは、普門寺といふ所に八講しけるを聞きて、又の日小野殿に人々集りて、あそびし、文つくりけるに、

薪こることはきのふにつきにしを今日はをのゝえこゝにくたさん

求めんとて拾ヘ薪設ヘ食仙人に仕ふ（提婆品）

いよ〳〵見まく―老いぬればさらぬ別の有りといへばいよいよ見まくほしき君哉（伊勢物語）

と詠み給ひけんこそめでたけれ。こゝもとは打聞になりぬるなめり。

また業平が母の宮の、いよ〳〵見まくとの給へる、いみじうあはれにをかし。引きあけて見たりけんこそ思ひやらるれ。

をかしと思ひし歌などを、草紙に書きておきたるに、下種のうち歌ひたるこそ心憂けれ。よみにもよむかし。

よろしき男を、下種女などの譽めて、「いみじうなつかしうこそおはすれ」などいへば、やがて思ひおとされぬべし。そしらるゝはなか〳〵よし。下種にほめらるゝは女だにわろし。また譽むるまゝにいひそこなひつるものをば。

大納言殿まゐり給ひて、文の事など奏し給ふに、例の夜いたう更けぬれば、御前なる人人、一二人づつうせて、御屏風几帳の後などに、みな隠れふしぬれば、唯一人になりて、ねぶたきを念じてさぶらふに、丑四つと奏するなり。「明け侍りぬなり」とひとりごつに、大納言殿、「今更におほとのごもりおはしますよ」とて、寝べきものにも思したらぬを、う

又人の云々―他に人のあらば我言も紛れもすべけれど我一人なれば紛れん様もなしと也

聲明王の云云―朗詠、鷄人曉唱聲驚二明王之眠一

遊子なほ云云―朗詠、

たて何しにさ申しつらんと思へども、又人のあらばこそはまぎれもせめ。うへの御前の柱に寄りかゝりて、少し眠らせ給へるを、「かれ見奉り給へ、今は明けぬるに、かくおほとのごもるべき事かは」と申させ給ふ。「實に」など宮の御前にも笑ひ申させ給ふも知らせ給はぬほどに、長女が童の、鷄を抱へて持ちて、明日里へ往かんといひて隠し置きたりけるが、いかゞしけん、犬の見つけて追ひければ、廊の先に逃げ往きて、恐しう泣きのゝしるに、みな人起きなどしぬなり。うへもうち驚かせおはしまして、「いかにありつるぞ」と尋させ給ふに、大納言殿の、聲明王の眠を驚すといふ詩を、高ううち出し給へる、めでたうをかしきに、一人ねぶたかりつる目も大になりぬ。「いみじき折の事かな」と宮も興ぜさせ給ふ。なほかゝる事こそめでたけれ。又の日は、夜の御殿に入らせ給ひぬ。夜半ばかりに、廊に出でて人呼べば、「おるゝか、われ送らん」との給へば、裳唐衣は屏風にうち懸けていくに、月のいみじう明くて、直衣のいと白う見ゆるに、指貫の半ふみくゝまれて、袖をひかへて、「たふるな」といひて率ておはするまゝに、「遊子なほ殘

佳人盡飾ニ於晨粧一魏宮鐘動遊子猶行ニ於殘月一函谷鷄鳴

男ある―或男といふに同じ

よどの―夜殿に淀野を掛く

の月に行けば」と誦じ給へる、又いみじうめでたし。「かやうの事めで惑ふ」とて笑ひ給へど、いかでか、猶いとをかしきものをば。僧都の君の御乳母のまゝと、御匣殿の御局に居たれば、男ある板敷のもと近く寄り來て、「辛いめを見候ひつる。誰にかはうれへ申し候はんとてなん」と泣きぬばかりの氣色にていふ。「何事ぞ」と問へば、「あからさまに物へまかりたりし間に、きたなく侍る所の燒けはべりにしかば、日ごろは寄居蟲のやうに、人の家に尻をさし入れてなん侍ふ。厩寮の御秣積みて侍りける家よりなん、出でまうで來て侍るなり。たゞ垣を隔てて侍れば、よどのに寢て侍りける童もほと〳〵燒け侍りぬべくなん、いさゝか物もとうで侍らず」などいひ居る。御匣殿も聞き給ひて、いみじう笑ひ給ふ。

みまくさをもやすばかりの春のひによどのさへなど殘らざるらん

と書きて、「これを取らせ給へ」とて投げ遣れば、笑ひのゝしりて、「このおはする人の、家の燒けたりとていとほしがりて給ふめる」とて取らせたれば、「何の御短策にか侍らん、物いくらばかりにか」といへば、「まづよめかし」といふ。「いかでか、片目もあき仕うまつらでは」といへば、「人にも見せよ、只今召せば、頓にてうへへ參るぞ。さばかりめでたき物を得ては、何をか思ふ」とて皆笑ひ惑ひてのぼりぬれば、「人にや見せつらん。里にいきて、いかに腹立たん」など、御前に參りて、まゝの啓すれば、また笑ひさわぐ。御前にも、「などかく物ぐるほしからん」と笑はせ給ふ。

故上―亡母

男は女親なくなりて、親ひとりある、いみじく思へども、わづらはしき北の方の出で來て後は、内にも入れられず、裝束などの事は、乳母、また故上の人どもなどしてせさす。西東の對のほどに、客人にもいとをかしう、屏風障子の繪も見所ありてすまひたり。殿上のまじらひのほど、口惜しからず、人々も思ひたり。うへにも御氣色よくて、常に召しつゝ、御あそびなどのかたきには、思しめしたるに、なほ常に物なげかしう、世のなか心にあはぬ心地して、すきぐしき心ぞ、かたはなるまであるべき。上達部のまたなきに、もてかしづかれたる妹一人あるばかりにぞ、思ふ事をもうちかたらひ、慰め所なり

すきぐしき云々―不平の餘好色

の心に偏せりとにや

いぶき―春註、伊吹は美濃近江の堺なるにはあらず、下野國なりと能因が坤元儀に出でたるよし袖中抄に見ゆ

ける。「定澄僧都に袿なし、すいせい君に袙なし」といひけん人もこそをかしけれ。

「まことや、下野にくだる」といひける人に、

おもひだにかからぬ山のさせも草たれかいぶきの里は告げしぞ

ある女房の、遠江守の子なる人をかたらひてあるが、おなじ宮人をかたらふと聞きて恨みければ、「親などもかけて誓はせ給ふ。いみじき虚言なり、夢にだに見ずとなんいふ。いかどいふべき」といふと聞きて、

誓へきみ遠つあふみのかみかけてむげに濱名のはし見ざりきや

「便なき所にて人に物をいひけるに、胸のいみじうはしりける、などかくはある」といひける答に、

逢坂はむねのみつねにはしり井のみつくる人やあらんと思へば

女のうはぎは

薄色。荷葉染。萌黄。さくら。紅梅。すべて薄色の類。

しびら―春註に、褶裳とて裳の一やうと見えたり

唐衣は

あかいろ。ふぢ。夏はふたあゐ。秋は枯野。

裳は

大海。しびら。

汗衫は

春は躑躅。櫻。夏は青朽葉、朽葉。

織物は

むらさき。しろき。萌黄に柏葉織りたる。紅梅もよけれども、なほ見ざめこよなし。

紋は

あふひ。かたばみ。

夏うすもの、片つ方のゆだけ著たる人こそにくけれど、數多かさね著たれば、ひかれて著にくし。綿など厚きは、胸などもきれて、いと見ぐるし。まぜて著るべき物にはあら

かたばみ―一本この下に、あられぢとあり

片つかた―原本片ばかまに作る

そこはかとなく―何となく、別段これといふ事もなく

ず。なほ昔より、さまよく著たるこそよけれ。左右のゆだけなるはよし。それもなほ女房の裝束にては、所せかゝめり。男の數多かさぬるも、片つかた重くぞあらんかし。清らなる裝束の、織物、うすものなど、今は皆さこそあゝめれ。今樣に又さまよき人の著給はん、いと便なきものぞかし。かたちよき君達の、彈正にておはする、いと見ぐるし。宮の中將などの口惜しかりしかな。

やまひは

胸。物怪。脚氣。唯そこはかとなく物食はぬ。十八九ばかりの人の、髪いと麗しくて、たけばかりすそふさやかなるが、いとよく肥えて、いみじう色しろう、顏あいぎやうづき、よしと見ゆるが、齒をいみじく病みまどひて、額髪もしとどに泣きぬらし、髪の亂れかゝるも知らず、面赤くて抑へ居たるこそをかしけれ。八月ばかり、白き單衣、なよらかなる袴よきほどにて、紫苑の衣の、いとあざやかなるを引きかけて、胸いみじう病めば、友だちの女房たちなどかはるゞ來つゝ、「いといとほしきわざかな、例もかくや惱み給ふ」

人知れぬ中―忍び男

見來て―見え來りて、見舞に來るなり

數多ある云云―其子の乳母の詞

など、事なしびに問ふ人もあり。心かけたる人は、誠にいみじと思ひ歎き、人知れぬ中などは、まして人目思ひて、寄るにも近くもえ寄らず、思ひ歎きたるこそをかしけれ。いと麗しく長き髪を引きゆひて、物つくとて起きあがりたる氣色も、いと心苦しくらうたげなり。うへにも聞し召して、御讀經の僧の聲よき給はせたれば、訪人どももあまた見來て、經聞きなどするもかくれなきに、目をぐばりつゝ讀み居たるこそ、罪や得らんとおぼゆれ。

こゝろづきなきもの

物へゆき、寺へも詣づる日の雨。使ふ人の我をばおぼさず、「某こそ只今の人」などいふをほの聞きたる。人よりはなほ少しにくしと思ふ人の、推量事うちし、すゞろなる物恨し、我かしこげなる。心あしき人の養ひたる子、さるはそれが罪にもあらねど、かゝる人にしもと覺ゆる故にやあらん。「數多あるが中に、この君をば思ひおとし給ひてや、にくまれ給ふよ」などあらゞかにいふ。兒は思ひも知らぬにやあらん、もとめて泣き惑

なか〳〵なる―却りて悪しき

さてなん―それまでの事なり

猶ぞある―やはりよろしからず

ふ、心づきなきなめり。おとなになりても、思ひ後見もて騒ぐほどに、なか〳〵なる事こそおほかゝめれ。わびしくにくき人に思ふ人の、はしたなくいへど、添ひつきてねんごろがる。いさゝか心あしなどいへば、常よりも近く臥して、物くはせ、いとほしがり、その事となく思ひたるに、まつばれ追従し、とりもちて惑ふ。宮仕人の許に來などする男の、そこにて物くふこそいとわろけれ。くはする人もいとにくし。思はん人の、「まづ」など志ありていはんを、忌みたるやうに口をふたぎて、顔を持てのくべきにもあらねば、くひ居るにこそあらめ。いみじう醉ひなどして、わりなく夜更けて泊りたりとも更にゆづけだにくはせじ。心もなかりけりとて來ずばさてなん。さとにて、北面よりし出してはいかゞせん。それだに猶ぞある。初瀬に詣でて局に居たるに、あやしき下種どもの、後さしまぜつゝ、居並みたるけしきこそ、ないがしろなれ。いみじき心を起して詣でたるに、川の音などの恐しきに、樽階をのぼり困じて、いつしか佛の御顔を拜み奉らんと、局に急ぎ入りたるに、蓑蟲のやうなるものの、あやしき衣著たるが、いとにくき

たのもし人の師―萬事を頼む宿坊

序のまゝに―其順序通り

猫の土に云云―春註に、衍文なるべし、一説品悪しきたとへ、又下の物食ふに掛る副詞

立居額づきたるは、押し倒しつべき心地こそすれ。いとやんごとなき人の局ばかりこそ、前はらひあれ、よろしき人は、制しわづらひぬかし。たのもし人の師を呼びていはすれば、「足下ども少し去れ」などいふ程こそあれ、歩み出でぬれば、おなじやうになりぬ。

いひにくきもの

人の消息、仰事などの多かるを、序のまゝに、初より奥までいといひにくし。返事また申しにくし。恥しき人の物おこせたるかへりごと。おとなになりたる子の、思はずなること聞きつけたる、前にてはいといひにくし。

四位五位は冬、六位は夏。宿直すがたなども、品こそ男も女もあらまほしきことなゝめれ。家の君にてあるにも、誰かはよしあしを定むる。それだに物見知りたる使人ゆきて、おのづからいふべかめり。ましてまじらひする人はいとこよなし。猫の土におりたるやうにて。工匠の物くふこそいと怪しけれ。新殿を建てて、東の對だちたる屋を作るとて、工

あはせ、おもの―菜、飯

もたいな―勿體なにて品なしの意

こと人云々―春註に下の人の字衍といふ、抄に、こと人と物いひ、まぎらはす人に作る

有明の月の―拾遺、長月の有明の

匠ども居並みて物くふを、東面に出で居て見れば、まづ持てくるや遲きと、汁物取りて皆飲みて、土器はついすゑつゝ、次にあはせを皆くひつれば、おものは不用なゝめりと見るほどに、やがてこそ失せにしか。二三人居たりし者、皆させしかば、工匠のさるなめりと思ふなり。あなもたいなの事どもや。

物語をもせよ、昔物語もせよ、さかしらに答うちして、こと人どものいひまぎらはす人、いと憎し。

ある所に、中の君とかやいひける人の許に、君達にはあらねども、その心いたくすきたる者にいはれ、心ばせなどある人の、九月ばかりに往きて、有明の月のいみじう照りておもしろきに、名殘思ひ出でられんと、言の葉を盡していへるに、今はいぬらんと遠く見送るほどに、えもいはず艶なる程なり。出づるやうに見せて立ち歸り、立蔀あいたる陰のかたに添ひ立ちて、猶ゆきやらぬさまもいひ知らせんと思ふに、「有明の月のありつつも」とうちいひて、さしのぞきたるかみの頭にも寄りこず、五寸ばかりさがりて、火

月の有りつつも君し來まさば我戀ひめやも

頓の事なり―急用なりとも

と云々―

再び車借らんとは言ひ入れじと也

わが從者―やはり業遠の從者

事なしびに云々―春

ともしたるやうなる月の光、催されて驚かさるゝ心地しければ、やをら立ち出でにけりとこそかたりしか。

女房のまゐりまかゝでするには、車を借る折もあるに、こゝろよそひしたる顏にうちいひて貸したるに、牛飼童の、例の牛よりもしもざまにうちいひて、いたう走り打つも、あなうたてと覺ゆかし。男どもなどの、物むづかしげなる氣色にて、「いかで夜更けぬさきに、追ひて歸りなん」といふは、なほ主の心おしはかられて、頓の事なりと、又いひ觸れんとも覺えず。業遠朝臣の車のみや、夜中あかつきわかず人の乘るに、聊さる事なかりけん、よくぞ教へ習はせたりしか。道に逢ひたりける女車の、深き所におとし入れて、え引き上げで、牛飼のはらだちければ、わが從者してうたせさへしければ、まして心のまゝに、誠めおきたるに見えたり。

すきゞしくて獨住する人の、夜はいづらにありつらん、曉に歸りて、やがて起きたる、まだねぶたげなる氣色なれど、硯とり寄せ、墨こまやかに押し磨りて、事なしびに任せ

あはせ、おもの―菜、飯

もたいな―勿體なにて品なしの意

こと人云々―春註に下の人の字衍といふ、抄に、こと人と物いひ、まぎらはす人に作る

有明の月の―拾遺、長月の有明の

匠ども居並みて物くふを、東面に出で居て見れば、まづ持てくるや遅きと、汁物取りて皆飲みて、土器はついするるつゝ、次にあはせを皆くひつれば、おものは不用なゝめりと見るほどに、やがてこそ失せにしか。二三人居たりし者、皆させしかば、工匠のさるなめりと思ふなり。あなもたいなの事どもや。

物語をもせよ、昔物語もせよ、さかしらに答うちして、こと人どものいひまぎらはす人、いと憎し。

ある所に、中の君とかやいひける人の許に、君達にはあらねども、その心いたくすきたる者にいはれ、心ばせなどある人の、九月ばかりに往きて、有明の月のいみじう照りておもしろきに、名残思ひ出でられんと、言の葉を盡していへるに、今はいぬらんと遠く見送るほどに、えもいはず艶なる程なり。出づるやうに見せて立ち歸り、立蔀あいたる陰のかたに添ひ立ちて、猶ゆきやらぬさまもいひ知らせんと思ふに、「有明の月のありつつも」とうちいひて、さしのぞきたるかみの頭にも寄りこず、五寸ばかりさがりて、火

月の有りつつも君し來まさば我戀ひめやも

頓の事なりと云々―急用なりとも再び車借らんとは言ひ入れじと也

わが從者―やはり業遠の從者

事なしびに云々―春

ともしたるやうなる月の光、催されて驚かさるゝ心地しければ、やをら立ち出でにけりとこそかたりしか。

女房のまゐりまかでするには、車を借る折もあるに、こゝろよそひしたる顔にうちいひて貸したるに、牛飼童の、例の牛よりもしもざまにうちいひて、いたう走り打つも、あなうたてと覺ゆかし。男どもなどの、物むづかしげなる氣色にて、「いかで夜更けぬさきに、追ひて歸りなん」といふは、なほ主の心おしはかられて、頓の事なりと、又いひ觸れんとも覺えず。業遠朝臣の車のみや、夜中あかつきわかず人の乘るに、聊さる事なかりけん、よくぞ教へ習はせたりしか。道に逢ひたりける女車の、深き所におとし入れて、え引き上げで、牛飼のはらだちければ、わが從者してうたせさへしければ、まして心のまゝに、誠めおきたるに見えたり。

すきゞしくて獨住する人の、夜はいづらにありつらん、曉に歸りて、やがて起きたる、まだねぶたげなる氣色なれど、硯とり寄せ、墨こまやかに押し磨りて、事なしびに任せ

註、いふ事もなきに任せてざつと書く

まひろげ―前註、一一九頁參照

錄―古人の語錄

てなどはあらず、心とどめて書く。まひろげ姿をかしう見ゆ。白き衣どものうへに、山吹紅などをぞ著たる。白き單衣のいたく萎みたるを、うちまもりつゝ書き立てて、前なる人にも取らせず、わざとたちて、小舍人童のつきぐしきを、身近く呼び寄せて、うちさゝめきて、往ぬる後も久しく詠めて、經のさるべき所々など、忍びやかに口ずさびに爲居たり。奥のかたに、御手水、粥などしてそゝのかせば、歩み入りて、文机に押しかゝりて文をぞ見る。おもしろかりける所々は、うち誦じたるもいとをかし。手洗ひて、直衣ばかりうち著て、錄をぞそらに讀む。實にいとたふとき程に、近き所なるべし、あり つる使うちけしきばめば、ふと讀みさして、返事に心入るゝこそいとほしけれ。清げなるわかき人の、直衣も袍も狩衣も、いとよくて、きぬがちに、袖口あつく見えたるが、馬に乘りて往くまゝに、供なるをのこ、たて文を、目をそらにて取りたるこそをかしけれ。

前の木だち高う庭廣き家の、東南の格子どもあげ渡したれば、涼しげに透きて見ゆるに、母屋に四尺の几帳立てて、前に圓座をおきて、三十餘ばかりの僧の、いとにくげならぬが、薄墨の衣、羅の袈裟など、いとあざやかにうちさうぞきて、香染の扇うちつかひ、千手陀羅尼讀み居たり。物怪にいたうなやむ人にや、うつすべき人とて、おほきやかなる童の、髮など麗しき、生絹の單、あざやかなる袴長く著なして、ゐざり出でて、横ざまに立てたる三尺の几帳の前に居たれば、外ざまにひねり向きて、いとほそう、にほやかなる獨鈷を取らせて、をゝと目うち塞ぎて讀む陀羅尼も、いとたふとし。顯證の女房あまた居て、集ひまもらへたり。久しくあらでふるひ出でぬれば、もとの心失ひて、行ふまゝに隨ひ給へる護法も、げにたふとし。兄の袿きたる、細冠者どもなどの、後に居て團扇するもあり。皆たふとがりて集りたるも、例の心ならば、いかに恥しと惑はん。みづからは苦しからぬ事と知りながら、いみじうわび歎きたるさまの心苦しさを、附人の知人などは、らうたく覺えて、几帳のもと近く居て、衣ひきつくろひなどする程に、よろしとて、御湯など北面に取り次ぐほどをも、わかき人々は心もとなし。盤も引きさげ

いたうなやむ人にや―一本いたうなやめばに作る

集ひまもらへ―一本つとまもらへ

兄―一説姉

ひきつくろひ―一本この下を、な

どす、かゝる程に作る

まかり申して―いとまごひをしてほうちはうたう―ほうちはほそちの誤にて熱瓜、はうたうは餅饂（ホウタウ）などの訛あれど、一本まゐらせんまで十二字無きをよしとすべし

ながらいそいでくるや。單など清げに、薄色の裳など萎えかゞりてはあらず、いと清げなり。申の時にぞ、いみじうことわりいはせなどして許しつ。「几帳の内にとこそ思ひつれ、あさましうも出でにけるがな。いかなる事ありつらん」と恥しがりて、髪を振りかけてすべり入りぬれば、しばしとどめて、加持少しして、「いかに、さわやかになり給へりや」とてうち笑みたるも恥しげなり。「しばし侍ふべきを、時のほどにもなり侍りぬべければ」とまかり申して出づるを、「しばし、ほうちはうたう參らせん」などとどむるを、いみじう急げば、所につけたる上薦とおぼしき人、簾のもとにゐざり出でて、「いと嬉しく立ちよらせ給へりつるしるしに、いと堪へがたく思ひ給へられつるを、只今おこたるやうに侍れば、かへすゞ〳〵悦び聞えさする。明日も御暇の隙には、物せさせ給へ」などいひつゝ。「いとしうねぎ御物怪に侍るめるを、たゆませ給はざらんなんよく侍るべき。よろしく物せさせ給ふなるをなん、悦び申し侍る」と、詞ずくなにて出づるは、いと尊きに、佛のあらはれ給へるとこそ覺ゆれ。

したゝかに―一本しらかみに

のけくびつき―碧

清げなる童の髪ながき。また大やかなるが、髪生ひたれど、思はずに髪うるはしき。又したゝかに、むくつけげなるなど多くて、いとなげにて、こゝかしこに、やんごとなきおぼえあるこそ、法師もあらまほしきわざなゝめれ。親などいかに嬉しからんとこそ、おしはからるれ。

見ぐるしきもの

衣の背縫かたよせて著たる人。又のけくびしたる人。下簾穢けなる上達部の御車。例ならぬ人の前に子を率ていきたる。袴著たる童の足駄はきたる、それは今様のものなり。つほ裝束したる者の、急ぎて歩みたる。法師、陰陽師の、紙冠して祓したる。また色黑う、瘦せ、にくげなる女のかづらしたる。髪がちにやせ〳〵なる男と晝寢したる、何の見るかひに臥したるにかあらん。夜などはかたちも見えず、又おしなべてさる事となりにたれば、我にくげなりとて、起き居るべきにもあらずかし。翌朝疾く起き往ぬる、めやすし。夏晝寢して起きたる、いとよき人こそ今少しをかしけれ。えせかたちはつやめき

ほその云々―生絹はすき通りて腑まで見ゆればと戯れいふ也

きようかくしたり云々―一本ようかくしたりと思ひしを心よりほかにこそもり出でにけれに作る

こよや―一本こじや

寐はれて、ようせずば、頬ゆがみもしつべし。互に見かはしたらん程の、いけるかひなさよ。色黒き人の、生絹單著たる、いと見ぐるしかし。のしひとへも同じくすきたれど、それはかたはにも見えず。ほその通りたればにやあらん。

ものくらうなりて、文字もかゝれずなりたり。筆も使ひはてて、これを書きはてばや。この草紙は、目に見え。心に思ふ事を、人やは見んずると思ひて、徒然なる里居のほどに、書き集めたるを、あいなく、人のため便なきいひ過しなどしつべき所々もあれば、きようかくしたりと思ふを、涙せきあへずこそなりにけれ。宮の御前に、内大臣の奉り給へりけるを、「これに何を書かまし。うへの御前には、史記といふ文を書かせ給へる」などの給はせしを、「枕にこそはし侍らめ」と申しょかば、「さば得よ」とて賜はせたりしを、あやしきを、こよや何やと、つきせずおほかる紙の數を、書きつくさんとせしに、いと物おぼえぬことぞおほかるや。大かたこれは世の中にをかしき事を、人のめでたしなど思ふべき事、なほ選り出でて、歌などをも、木、草、鳥、蟲をもいひ出したらばこそ、思ふ

人なみ〳〵なる云々―人なみ〳〵の評を聞くべき物ならず、耳を聞くは目を見るると同一の語法

ほどよりはわろし、心見えなりともそしられめ。たゞ心ひとつに、おのづから思ふことを、たはぶれに書きつけたれば、物に立ちまじり、人なみ〳〵なるべき耳をも聞くべきものかはと思ひしに、はづかしきなども、見る人はの給ふなれば、いとあやしくぞあるや。實にそれもことわり、人の憎むをもよしといひ、譽むるをもあしといふは、心の程こそおしはからるれ。たゞ人に見えけんぞねたきや。

枕草紙終

方丈記

うたかた―泡沫

破れて―一本やけてに作る

行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまることなし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。玉敷の都の中に、棟を竝べ甍を爭へる、尊き卑しき人の住居は、代々を經てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。或は去年破れて今年は造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれにおなじ。處もかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、僅に一人二人なり。朝に死し、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて、何方へか去る。又知らず、假の宿、誰が爲に心をなやまし、何によりてか目を悅ばしむる。その主人と住家と、無常を爭ひ去るさま、いはゞ朝顏の露に異ならず。或は露おちて花殘

いぬる—一本いにしに作る
たつみ、いぬゐ—東南、西北
死にぬ—一本死しぬ、又死ぬに作る

れり。残るといへども朝日に枯れぬ。或は花は萎みて露なほ消えず。消えずといへども夕ふべを待つことなし。

およそ物の心を知りしより以來、四十あまりの春秋を送れる間に、世の不思議を見ること、やゝ度々になりぬ。いぬる安元三年四月二十八日かとよ。風烈しく吹きて靜ならざりし夜、戌の時ばかり、都のたつみより火出で來りて、いぬゐに至る。はてには朱雀門、大極殿、大學寮、民部省まで移りて、一夜が程に、塵灰となりにき。火元は樋口富小路とかや、病人を宿せる假屋より出で來けるとなむ。吹き迷ふ風に、とかく移り行くほどに、扇をひろげたるが如く、末廣になりぬ。遠き家は煙にむせび、近き邊はひたすら焔を地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、火の光に映じて、あまねく紅なるなかに、風に堪へず吹き切られたる焔、飛ぶがごとくにして、一二町を越えつゝ移り行く。その中の人、現心ならんや。或は煙にむせびてたふれ伏し、或は焔にまぐれて忽に死にぬ。あるはまた、僅に身一つ辛くして遁れたれども、資財を取り出づるに及ばず、七珍萬寶、さながら灰燼となりにき。その費いくそばくぞ。このたび公卿の家十六燒けたり。ましてその外は數を知らず。すべて都のうち三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬牛の類邊際を知らず。人の營みな愚なるなかに、さしも危き京中の家をつくるとて、寶を費し心をなやますことは、勝れてあぢきなくぞ侍るべき。

辻風—廻飄旋風
業風—劫風也、佛說に世界破滅の時三災として火災水災と共に起る風災

また治承四年卯月二十九日の頃、中御門京極のほどより、大なる辻風おこりて、六條わたりまで、いかめしく吹きけること侍りき。三四町をかけて吹きまくるに、その中にこもれる家ども、大なるも小きも、一つとして破れざるはなし。さながら平にたふれたるもあり、桁柱ばかり殘れるもあり。又門の上を吹き放ちて、四五町がほどに置き、又垣を吹き拂ひて、隣と一つになせり。いはんや家の内の寶、數を盡して空にあがり、檜皮葺、板の類、冬の木の葉の風に亂るゝがごとし。塵を煙の如くに吹き立てたれば、すべて目も見えず。おびたゞしくなり動む音に、物いふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かくこそはとぞ覺えける。家の損亡せるのみならず、これを取り繕ふ間に、身を害ひて、か

たはづけるもの、數を知らず。この風未申の方に移り行きて、多くの人の歎をなせり。辻風は常に吹くものなれど、かゝることやはある。たゞごとにあらず、さるべき物のさとしかなとぞ、疑ひ侍りし。

さとし―祥、前兆

又おなじ年の六月の頃、俄に都遷り侍りき。いと思の外なりし事なり。おほかたこの京のはじめを聞けば、嵯峨の天皇の御時、都と定りにけるより後、既に數百歳を經たり。ことなる故となる故なくて、たやすく改まるべくもあらねば、これを世の人たやすからず愁へあへるさま、ことわりにも過ぎたり。されどとかくいふかひなくて、御門より始め奉りて、大臣、公卿、ことゞく摂津國難波の京に遷り給ひぬ。世に仕ふる程の人、誰かひとり故郷に殘り居らん。官位におもひをかけ、主君の蔭をたのむ程の人は、一日なりとも疾く移らんとはげみあへり。時を失ひ世にあまされて、期する所なき者は、愁へながらとまり居たり。軒を爭ひし人の住居、日を經つゝ荒れ行く。家はこぼたれて淀川に浮び、地は目の前に畠となる。人の心皆あらたまりて、唯馬鞍をのみ重くす、牛車を用とする人

ことなる故―特別の譯

時を失ひ云云―羽振り悪くなり世間に用ひられずして

なし。西南海の所領をのみ願ひ、東北國の庄園をば好まず。

その時、おのづから事の便ありて、津の國今の京に到れり。所のありさまを見るに、その地ほどせばくて、條里をわるに足らず。北は山にそひて高く、南は海に近くて下れり。波の音常にかまびすしくて、鹽風殊にはげしく、内裏は山の中なれば、かの木丸殿もかくやと、なか〳〵樣かはりて、優なるかたも侍りき。日々にこぼちて、川もせきあへず運びくだす家は、いづくに作れるにかあらん、なほ空しき地は多く、作れる家は少なし。故郷は既に荒れて、新都はいまだ成らず。ありとしある人、皆浮雲のおもひをなせり。もとよりこの處に居たるものは、地を失ひて愁へ、今うつり住む人は、土木の煩あることを嘆く。道の邊を見れば、車に乘るべきは馬に乘り、衣冠布衣なるべきは直垂を著たり。都のてぶり忽に改りて、たゞ鄙びたる武士に異ならず。これは世の亂るゝ瑞相とか聞きおけるもしるく、日を經つゝ世の中うき立ちて、人の心も治らず、民の愁遂に空しからざりければ、同年の冬、なほこの京に歸り給ひにき。されど毀ちわたせりし家ども

條里―拾芥抄に、條起レ從レ北行二於南一里起レ西行二於東一三十六町爲二一里一六里爲レ條

木丸殿―新古今、天智天皇御製、朝倉や木の丸殿に我が居れば名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ

しるく―果して其通り

茅を葺き―史記韓に、子曰堯之有二天下一也堂高三尺采椽不レ刊茅茨不レ剪云々

ぞめき―さわぎ

さのみやは云々―さう品格を保ちても居られず

は、いかになりにけるにか、悉くもとのやうにも作らず。ほのかに傳へ聞くに、いにしへのかしこき御代には、憐をもて國を治め給ふ。すなはち御殿に茅を葺きて、軒をだに整へず。煙の乏しきを見給ふ時は、かぎりある貢物をさへゆるされき。これ民を惠み、世をたすけ給ふによりてなり。今の世の中のありさま、昔になぞらへて知りぬべし。

又養和のころかとよ。久しくなりてたしかにも覺えず。二年が間、世の中飢渇して、あさましきこと侍りき。あるは春夏日でり、あるは秋冬大風大水など、よからぬ事どもうち續きて、五穀悉く實らず。空しく春耕し、夏植うる營のみありて、秋かり冬收むるぞめきはなし。これによりて、國々の民、あるは地を捨てゝ境を出で、あるは家をわすれて山に住む。さまぐの御祈はじまりて、なべてならぬ法ども行はるれども、更にそのしるしなし。京の習、何わざにつけても、みなもとは田舍をこそ頼めるに、絶えてのぼる者なければ、さのみやは操も作りあへん。念じわびつゝ、寶物かたはしより捨つるが如くすれども、更に目みたつる人もなし。たまゝ易ふる者は、金を輕くし、粟を重くまさるやうに云々―飢は釜いまさりて祈禱のしるしは無し

少水の魚―文殊出曜經に、是日已過命則衰滅如二少水魚一斯有二何樂一

す。乞食道の邊に多く、愁へ悲しぶ聲耳にみてり。

さきの年かくの如く、辛くして暮れぬ。明くる年は、立ちなほるべきかと思ふに、あまさへ疫病うちそひて、まさるやうに跡方なし。世の人皆飢ゑ死にければ、日を經つゝきはまり行くさま、少水の魚のたとへに叶へり。はてには笠うち著、足ひきつゝみ、よろしき姿したるもの、ひたすら家ごとに乞ひありく。かくわびしれたるものども、歩くかと見ればすなはちたふれ死ぬ。築地のつら、路頭に飢ゑ死ぬる類は數も知らず。取り捨つるわざもなければ、臭き香、世界にみちゝて、變り行くかたちありさま、目もあてられぬこと多かり。況や河原などには、馬車の行きちがふ道だにもなし。

賤、山がつも、力盡きて、薪にさへ乏しくなりゆけば、頼むかたなき人は、みづから家を毀ちて、市に出でて之を賣るに、一人が持ち出でたる價、なほ一日が命をさゝふるにだに及ばずとぞ。怪しき事は、かゝる薪の中に、丹つき、白銀黄金の箔など、所々につきて見ゆる木のわれあひまじれり。これを尋ぬれば、すべなき者の、古寺にいたりて、佛

を盗み、堂の物の具を破り取りて、わりくだけるなりけり。濁悪の世にしも生れ逢ひて、かゝる心うきわざをなん見侍りし。

又あはれなること侍りき。さり難き女男など持ちたるものは、その思まさりて志深きは必先だちて死しぬ。その故は、我が身をば次になして、男にもあれ女にもあれ、いたはしく思ふかたに、たま〳〵乞ひ得たる物を、まづ譲るによりてなり。されば父子あるものは、定れる事にて、親ぞ先だちて死にける。また母が命つきて臥せるをも知らずして、いとけなき子の、その乳房に吸ひつきつゝ、臥せるなどもありけり。

思―一本志に作り、下なる志の字なし

阿字―毘盧舎那經に出づ、眞言祕密中の祕密

仁和寺に、隆暁法印といふ人、かくしつつ数しらず死ぬることを悲みて、聖を数多かたらひつゝ、その死首の見ゆるごとに、額に阿字を書きて、縁を結ばしむるわざをなんせられける。その人数を知らんとて、四五両月がほど数へたりければ、京の中、一條より南、九條より北、京極より西、朱雀より東、道のほとりにある頭、すべて四萬二千三百餘なんありける。況やその前後に死ぬるもの多く、河原、白河、西の京、もろ〳〵の邊

地などを加へていはゞ、際限もあるべからず。いかにいはんや諸國七道をや。近くは崇徳院の御位のとき、長承のころかとよ、かゝる例はありけると聞けど、その世のありさまは知らず。まのあたりいとめづらかに、かなしかりしことなり。

長承云々―崇徳帝の長承三年諸國洪水京師火災ありし事舊記に見ゆ

また元暦二年のころ、大地震ふること侍りき。そのさま世の常ならず。山崩れて川を埋み、海かたぶきて陸をひたせり。土さけて水湧きあがり、巌われて谷にまろび入り、渚こぐ船は浪にたゞよひ、道行く駒は足の立處をまどはせり。況や都の邊には、在々所々、堂舎塔廟、一として全からず。或はくづれ、或はたふれたる間、塵灰立ち上りて、盛なる煙のごとし。地の震ひ家のやぶるゝ音、雷に異ならず。家の中に居れば、忽にうちひしげなんとす。走り出づれば、また地われ裂く。羽なければ空へもあがるべからず、龍ならねば雲にのぼらんこと難し。おそれの中におそるべかりけるは、たゞ地震なりけりとぞ覺え侍りし。その中にある武士のひとり子の、六つ七つばかりに侍りしが、築地のおほひの下に小家を作り、はかなげなる跡なしごとをして遊び侍りしが、俄に崩れ埋め

跡なしごと―遊戯、跡もら殘ずとりとめなき事の義

ふる―地震にて大地のゆれる

四大種―義楚六帖に、四大地水火風也亦名大種―以形相大―能生萬物―也

齊衡―文徳天皇の御字

られて、あとかたなく平にうちひしがれて、二つの目など、一寸ばかりうち出されたるを、父母かゝへて、聲もをしまず悲しみあひて侍りしこそ、あはれにかなしく見侍りしか。子のかなしみには、猛きものも恥を忘れけりと覺えて、いとほしく理かなとぞ見侍りし。かくおびたゞしくふることは、しばしにて止みにしが、その餘波しば〳〵絶えず。世の常に驚くほどの地震、二三十度ふらぬ日はなし。十日二十日過ぎにしかば、やうやう間遠になりて、或は四五度、二三度、もしは一日まぜ、二三日に一度など、大かたそのなごり三月ばかりや侍りけん。四大種の中に、水火風は常に害をなせど、大地に至りては殊なる變をなさず。

むかし齊衡のころかとよ。大地震ふりて、東大寺の佛の御首落ちなどして、いみじきことども侍りけれど、なほこのたびには如かずとぞ。すなはち人皆あぢきなき事を述べて、いさゝか心の濁もうすらぐかと見し程に、月日かさなり、年越えしかば、後は、言の葉にかけていひ出づる人だになし。すべて世のありにくきこと、わが身とすみかとの、はか

すぼき―みすぼらしき

玉ゆらも―しばらくも

なくあだなる樣かくのごとし。いはんや所により、身のほどに隨ひて、心をなやますこと、あげて數ふべからず。もしおのづから身かなはずして、權門のかたはらに居る者は、深く悅ぶ事はあれども、大にたのしぶにあたはず。歎ある時も、聲をあげて泣くことなし。進退やすからず、立居につけて恐れをのゝく、たとへば雀の鷹の巣に近づけるがごとし。もし貧しくして、富める家の隣に居るものは、朝夕すぼき姿を恥ぢて諂ひつゝ、出で入る妻子僮僕の羨めるさまを見るにも、富める家のないがしろなるけしきを聞くにも、心念々にうごきて、時としてやすからず。もし狹き地に居れば、近く炎上する時、その害を遁るゝことなし。もし邊地にあれば、往反わづらひ多く、盜賊の難はなれがたし。いきほひある者は貪欲深く、ひとり身なる者は人に輕しめらる。寶あればおそれ多く、貧しければ歎切なり。賴めば身他の奴となり、人をはごくめば心恩愛につかはる。世にしたがへば身くるし、またしたがはねば狂へるに似たり。いづれの所をしめ、いかなるわざをしてか、暫しもこの身をやどし、玉ゆらも心をなぐさむべき。

しのぶかたがた—住むに堪へざるといふ、金葉集、周防内侍、住み侘びて我さへ軒の忍ぶ草しのぶかたがた繁き宿かな

白波—盜人といふ、水難と盜難とを兼ねいふなり

雲に云々—一本雲に臥していつかへりの春秋

我が身、父方の祖母の家を傳へて、久しく彼の所に住む。その後緣かけ、身おとろへて、しのぶかたぐ〜しげかりしかば、遂に跡とむることを得ずして、三十餘にして、更に我が心と一の庵をむすぶ。これをありし住居になずらふるに、十分が一なり。たゞ居屋ばかりをかまへて、はかぐしくは屋をつくるに及ばず、わづかに築地をつけりといへども、門たつるにたづきなし。竹を柱として、車やどりとせり。雪ふり風吹くごとに、危からずしもあらず。所は河原近ければ、水の難深く、白波の恐もさわがし。すべてあらぬ世を念じ過しつゝ、心をなやませることは、三十餘年なり。その間をり〜のたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。すなはち五十の春をむかへて、家をいで世をそむけり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとどめん。空しく大原山の雲に、いくそばくの春秋をかへぬる。

こゝに六十の露消えがたに及び、更に末葉のやどりを結べることあり。いはゞ狩人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶のまゆを營むがごとし。これを中ごろのすみかになずらふ

に作る

狩人—一本旅人に作る

世の常にも似ず—一本世の常ならず

用途—費用

閼伽棚—閼伽は水の梵語、佛に供ふる水等を載せ置く棚

ほどろ—老穂なり

つかなみ—蘆筵

れば、また百分が一にだも及ばず。とかくいふ程に、齡は年々にかたぶき、住家はをりをりにせばし。その家のありさま世の常にも似ず、廣さは僅に方丈、高さは七尺が内なり。所をおもひ定めざるが故に、地をしめて造らず。土居を組み、うちおほひを葺きて、つぎめごとにかけがねをかけたり。もし心にかなはぬことあらば、やすく外に移さんがためなり。その改め造る時、いくばくのわづらひかある。積むところわづかに二兩なり。車の力をむくゆる外は、更に他の用途いらず。

いま日野山の奥に跡をかくして後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚を作り、中には西の垣に添へて阿彌陀の畫像を安置しまつり、落日をうけて眉間のひかりとす。かの帳のとびらに、普賢ならびに不動の像をかけたり。北の障子の上にちひさき棚をかまへて、黑き皮籠三四合を置く。すなはち和歌、管絃、往生要集ごときの抄物を入れたり。傍に箏、琵琶、おの〜一張をたつ。いはゆるをり箏、つぎ琵琶これなり。束にそへて、わらびのほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の

正木のかづら―薜荔なり、古今神樂歌に、深山には霰ふるらし外山なる正木のかづら色づきにけり

跡の白波―

垣に窓をあけて、こゝに文机を出せり。枕の方にすびつあり。これを柴折りくぶる便とす。庵の北に少地をしめ、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。すなはちもろ〳〵の藥草をうゑたり。假の庵のありさまかくのごとし。

その處のさまをいはゞ、南に筧あり、岩を疊みて水をためたり。林軒近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡をうづめり。谷しげけれど、西は晴れたり。觀念のたよりなきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲の如くにして西のかたに匂ふ。夏は時鳥をきく。かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋はひぐらしの聲耳にみてり。うつせみの世をかなしむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。つもり消ゆるさま、罪障に譬へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとり居れば口業ををさめつべし。かならず禁戒をまもるとしもなけれども、境界なければ、何につけてか破らん。もし跡の白波に身をよする朝には、岡の屋に行きかふ船をな

拾遺集沙彌滿誓、世の中を何にたとへん朝ぼらけ漕ぎ行く船の跡の白波

源都督―琵琶の名手桂大納言經信

ぬかご―零餘子、むかご也

ほぐみ―穂掛に同じく穂を組合せ門又は倉の戸に掛けて神に奉る物

がめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉をならす夕には、潯陽の江をおもひやりて、源都督のながれをならふ。もしあまりの興あれば、しばし〳〵松のひゞきに秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悅ばしめんとにもあらず、ひとり調べ、ひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

また麓に一つの柴の庵あり。すなはち山守が居る所なり。かしこに小童あり。時々來りてあひ訪ふ。もしつれ〴〵なる時は、これを友としてあそびありく。かれは十六歳、われは六十、その齡ことの外なれど、心を慰むることはこれ同じ。或はつばなを拔き、いはなしを採る。またぬかごをもり、芹をつむ。あるはすそわの田井にいたりて、落穂を拾ひてほぐみをつくる。もし日うらゝかなれば、嶺に攀ぢ上りて、遙に故郷の空をのぞみ、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさはりなし。あゆみ煩なく、こゝろざし遠くいたる時は、これより峰つゞき、炭山を越え、笠取を過ぎて、岩間にまうで、石山ををがむ。もしはまた粟津の原を分けて、蟬丸の翁が

山鳥の云々—玉葉、行基菩薩、山鳥のほろほろと鳴く聲きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ

かせぎ—鹿

白地—かりそめ、つひ一寸

今までに—一本今すでに

跡をとぶらひ、田上川をわたりて、猿丸太夫が墓をたづね、歸るさには、をりにつけつつ、櫻をかり、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛に奉り、かつは家づとにす。もし夜靜なれば、窗の月に古人を忍び、猿の聲に袖をうるほす。叢の螢は遠く眞木の島の篝火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろ〳〵と鳴くを聞きても、父か母かと疑ひ、峰のかせぎの近く馴れたるにつけても、世にとほざかる程を知る。あるは埋火をかきおこして、老の寢覺の友とす。おそろしき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景氣、折につけてつくることなし。いはんや深く思ひ、深く知れらん人のためには、これにしも限るべからず。

おほかた此の所に住みはじめし時は、白地とおもひしかど、今までに五年を經たり。假の庵もやゝふる屋となりて、軒には朽葉ふかく、土居に苔むせり。おのづから事の便に都を聞けば、この山にこもり居て後、やんごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。ましてその數ならぬたぐひ、盡してこれを知るべからず。たび〳〵の災上にほろびたる

がうな—寄居蟲（ヤドカリ）

すなほなる—一本すぐなる

家、またいくそばくぞ。たゞ假の庵のみ、のどけくしておそれなし。ほど狹しといへども、夜臥す床あり、晝居る座あり。一身をやどすに不足なし。がうなは小さき貝をこのむ。これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯に居る。すなはち人を恐るゝが故なり。我またかくのごとし。身を知り世を知れらば、願はず、まじらはず、たゞ靜なるを望とし、愁なきを樂とす。すべて世の人の住家をつくるならひ、かならずしも身のためにはせず、或は妻子眷屬のためにつくり、或は親昵朋友のためにつくる。あるは主君師匠、および財寶馬牛のためにさへ是をつくる。我今身のためにむすべり。人のためにつくらず。ゆゑ如何となれば、今の世のならひ、この身のありさま、ともなふべき人もなく、たのむべき奴もなし。たとひ廣くつくれりとも、誰をかやどし、誰をかすゑん。それ人の友たる者は、富めるを貴み、ねんごろなるを先とす。かならずしも、情あると、すなほなるとをば愛せず。たゞ絲竹花月を友とせんにはしかず。人の奴たるものは、賞罰の甚しきを顧み、恩の厚きを重くす。更にはごくみあはれぶといへども、やすく閑なる

たゆからずしもあられど―だるくないでもないが、たゆくは支體に云へるダルキ也（雅言集覽）

藤の衣―藤の皮、葛などにて織れる賤者の粗服

たくらぶる―比較する

をば願はず。たゞわが身を奴とするには如かず、もしなすべきことあれば、すなはちおのづから身をつかふ。たゆからずしもあらねど、人をしたがへ、人をかへりみるよりはやすし。もし歩くべきことあれば、みづから歩む。苦しといへども、馬鞍牛車と心をなやますには似ず。今一身を分ちて、二の用をなす、手のやつこ、足の乘物、よくわが心にかなへり。心また身のくるしみを知れば、苦しむ時はやすめつ、まめなる時はつかふ。つかふとてもたびたび過さず、ものうしとても心を動すことなし。いかに況や、常にありき、常に動くは、これ養生なるべし。何ぞいたづらにやすみ居らん。人を惱すはまた罪業なり。いかゞ他の力をかるべき。

衣食のたぐひまたおなじ。藤の衣、麻のふすま、得るに隨ひて肌をかくし、野邊の茅花、峯の木の實、わづかに命をつぐばかりなり。人にまじはらざれば、姿を恥づる悔もなし。糧乏しければ、おろそかなれども、なほ味をあまくす。すべてかやうのこと、樂しく富める人に對していふにあらず、たゞわが身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりな

まだし―未だし、不足

三界―祖庭事苑に、三界謂二欲界色界無色界一又謂二之三有一

知らず―原本いかでか知らん

餘算―餘命

三途―火途、刀途、血途

り。おほかた世を遁れ、身を捨てしより、恨もなく恐もなし。命は天運にまかせて、をしまず、いとはず。身をば浮雲になずらへて、たのまず、まだしとせず。一期のたのしみは、うたゝねの枕の上にきはまり、生涯の望は、をり〳〵の美景にのこれり。

それ三界はたゞ心一つなり。心もし安からずば、牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣ものぞみなし。今さびしき住居、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出でては、乞食となれることをはづといへども、かへりてこゝに居る時は、他の俗塵に著することをあはれぶ。もし人このいへることを疑はゞ、魚鳥の分野を見よ。魚は水にあかず。魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ。鳥にあらざればその心をしらず。閑居の氣味もまたかくの如し。住まずして誰かさとらん。

そも〳〵一期の月影傾きて、餘算山の端に近し。忽に三途の闇にむかはん時、何のわざをかかこたんとする。佛の人ををしへ給ふおもむきは、ことにふれて執心なかれとなり。いま草の庵を愛するも科とす。閑寂に著するも障なるべし。いかゞ用なき樂をの

浄名居士―維摩詰なり、毘耶梨城中方丈の室に入り假に病臥して來訪者に説法せる人

周梨槃特―楞嚴經に見ゆ、釋迦弟子中の愚人

べて、空しくあたら時を過さん。しづかなる曉、この理を思ひつゞけて、みづから心に問ひていはく、世を遁れて山林にまじはるは、心ををさめて道を行はんがためなり。然るを汝が姿は聖に似て、心は濁にしめり、住家はすなはち淨名居士の跡をけがせりといへども、たもつ所はわづかに周梨槃特が行にだにも及ばず。もしこれ貧賤の報のみづからならやますか、はた又妄心のいたりて狂はせるか。そのとき心さらに答ふることなし。ただ傍に舌根をやとひて、不請の念佛兩三度を申してやみぬ。時に建暦の二年、三月の晦日ごろ、桑門蓮胤、外山の庵にしてこれをしるす。

月かげは入る山の端もつらかりきたえぬひかりは見るよしもがな

方丈記終

そこはかとなく―漫然と

竹の園生―皇族

舍人―朝廷より賜はる從者、隨身

はふれにたれど―おちぶれたるも

いみじ―えらい、立派

徒然草

つれ〴〵なるまゝに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつり行くよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。

いでや、この世に生れては、願はしかるべき事こそ多かゝめれ。帝の御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御ありさまはさらなり、たゞうども、舍人なゝどたまはる際はゆゝしと見ゆ。その子孫までは、はふれにたれどなほなまめかし。それより下つかたは、ほどにつけつゝ、時に逢ひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いと口をし。法師ばかり羨しからぬものはあらじ。人には木の端のやうに思はるゝよと、清少納言が書けるも、げにさることぞかし。勢猛にのゝしりたるにつけて、いみじとは見えず。增賀聖のいひけんやうに、名聞ぐるし

かけずけおさるる―對峙し得ずして他に壓せらるゝ義、甚だ見劣りするをいふ

いたましうするものから―酒を勸められて痛痛しく困る樣にはするものゝ

く、佛の御教にたがふらんとぞ覺ゆる。ひたぶるの世すて人は、なか〳〵あらまほしき方もありなん。人はかたちあり樣の勝れたらんこそ、あらまほしかるべけれ。ものうち言ひたる聞きにくからず、愛敬ありて、詞多からぬこそ、他かずむかはまほしけれ。めでたしと見る人の、心おとりせらるゝ本性見えんこそ、口をしかるべけれ。人品容貌こそ生れつきたらめ。心はなどか、賢きより賢きにも、うつさば移らざらん。かたち心ざまよき人も、才なくなりぬれば、人品くだり、顏にくさげなる人にも立ちまじりて、かけずけおさるゝこそ、本意なきわざなれ。ありたきことは、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、また有職に公事のかた、人の鑑ならんこそいみじかるべけれ。手なゝど拙からずはしりがき、聲をかくして拍子とり、いたましうするものから、下戸ならぬこそ男はよけれ。

いにしへの聖の御代のまつりごとをも忘れ、民のうれへ、國のそこなはるゝをも知らず、よろづにきよらを盡していみじと思ひ、所せきさましたる人こそ、うたて思ふところなく

九條殿―右大臣師輔

禁中の事ども云々―禁祕抄にいふ

さうぐしく―さびしく物たらぬ

あふさきるさ―往くさ來るさ、何かにつけて

ふつゝかに―きまぐれに、深き覺悟もなく

見ゆれ。衣冠より駒車にいたるまで、あるに隨ひてもちひよ。美麗をもとむることなかれとぞ、九條殿の遺誡にもはべる。順德院の禁中の事ども書かせ給へるにも、おほやけの奉物はおろそかなるをもてよしとすとこそ侍れ。

よろづにいみじくとも、色このまざらん男は、いとさうぐしく、玉の巵の當なき心地ぞすべき。露霜にしほたれて、所さだめず惑ひありき、親のいさめ、世のそしりをつゝむに、心のいとまなく、あふさきるさに思ひ亂れ、さるは獨寢がちに、まどろむ夜なきこそをかしけれ。さりとて一向たはれたる方にはあらで、女にたやすからず思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ。

後の世のこと心にわすれず、佛の道うとからぬ、心にくし。不幸にうれへに沈める人の、かしらおろしなど、ふつゝかに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つこともなく明し暮したる、さるかたにあらまほし。顯基中納言のいひけん、配所の月罪なくて見んこと、さもおぼえぬべし。

前の中書王—兼明親王
九條の太政大臣—藤原伊通
花園の左大臣—源有仁
染殿の大臣—藤原良房
世繼の翁の物語—大鏡をいふ

我が身のやんごとなからんにも、ましてすくなからざらんにも、子といふもの無くてありなん。前の中書王、九條の太政大臣、花園の左大臣、皆族絶えん事を願ひ給へり。染殿の大臣も、子孫おはせぬぞよく侍る。末のおくれ給へるはわろき事なりとぞ、世繼の翁の物語にはいへる。聖德太子の御墓をかねて築かせ給ひける時も、こゝをきれ、かしこをたて。子孫あらせじと思ふなりと侍りけるとかや。

あだし野の露消ゆる時なく、烏部山の烟立ちさらでのみ住みはつるならひならば、いかに物のあはれもなからん。世は定なきこそいみじけれ。命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふのゆふべを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つれ〴〵と一年をくらす程だにも、こよなうのどけしや。飽かずをしとおもはゞ、千年を過すとも、一夜の夢の心地こそせめ。住みはてぬ世に、醜きすがたを待ちえて何かはせん。命長ければ恥おほし。長くとも四十にたらぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。そのほど過ぎぬれば、かたちを愧づる心もなく、人にいでまじらはんことを思ひ、夕の日に子孫

あらまし—豫想し
えならぬ—何ともいはれぬ
心ときめきす—心動く
いもねず—安眠もせず
六塵—色、聲、香、味、觸、法

を愛し、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみ深く、物のあはれも知らずなり行くなんあさましき。

世の人の心惑すこと色欲には如かず。人の心は愚なるものかな。にほひなゞどは假のものなるに、しばらく衣裳に薫物すと知りながら、えならぬ匂には、かならず心ときめきするものなり。久米の仙人の、物洗ふ女のはぎの白きを見て、通を失ひけんは、まことに手足膚などのきよらに、肥え膏づきたらんは、外の色ならねばさもあらんかし。

女は髪のめでたからんこそ、人のめだつべかゝめれ。人のほど、心ばへなどは、物うちいひたるけはひにこそ、物ごしにも知らるれ。事に觸れてうちあるさまにも、人の心をまどはし、すべて女のうちとけたるいもねず、身ををしとも思ひたらず、堪ふべくもあらぬ業にもよく堪へ忍ぶは、たゞ色を思ふがゆゑなり。まことに愛著の道、その根深く源遠し。六塵の樂欲おほしといへども、皆厭離しつべし。その中に、たゞかの惑のひとつ止めがたきのみぞ、老いたるも若きも、智あるも愚なるも、かはる所なしとぞ見ゆる。さ

女の髪筋云云―大威徳陀羅尼經に乃至以二女人髪一爲レ作二綱維一香象能繋況丈夫聖云々

むかし覺えて―古風にて

やは―反語

後徳大寺の大臣―藤原實定

れば女の髪筋をよれる綱には、大象もよくつながれ、女のはける足駄にて作れる笛には、秋の鹿かならず寄るとぞいひ傳へ侍る。自ら戒めて、恐るべく慎むべきはこの惑なり。

家居のつきづきしくあらまほしきこそ、假のやどりとは思へど、興あるものなれ。よき人ののどかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、一際しみじみと見ゆるぞかし。今めかしくきらきらかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子透垣のたよりをかしく、うちある調度も、むかし覺えてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。多くの工匠の心を盡して磨きたて、唐の日本の、めづらしくえならぬ調度ども竝べおき、前栽の草木まで、心のまゝならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやはながらへ住むべき、また時の間の烟ともなりなんとぞ、うち見るよりも思はるゝ。大かたは、家居にこそ事ざまは推しはからるれ。後徳大寺の大臣の、寢殿に鳶ゐさせじとて繩を張られたりけるを、西行が見て、「鳶の居たらん何かは苦しかるべき。この殿の御心さばかりにこそ」とて、その後は參らざりけると聞きはべるに、綾小路の宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩をひかれたりしかば、かのためし思ひ出でられ侍りしに、「まことや、烏のむれゐて池の蛙をとりければ、御覽じかなしませ給ひてなん」と人の語りしこそ、さてはいみじくこそとおぼえしか。德大寺にも、いかなるゆゑか侍りけん。

綾小路の宮―龜山天皇の皇子性惠法親王

栗栖野―山城國醍醐の邊

たわゝに―撓む程に、實の多くなりたる形容

神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入ること侍りしに、遙なる苔の細道をふみわけて、心ぼそく住みなしたる庵あり。木の葉にうづもるゝ筧の雫ならでは、つゆおとなふものなし。閼伽棚に菊紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に、大なる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりを嚴しく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覺えしか。

おなじ心ならん人と、しめやかに物がたりして、をかしき事も世のはかなき事も、うら

心おきなく

なくいひ慰まんこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ、つゆ違はざらんと向ひ居たらんは、ひとりある心地やせん。互にいはんほどの事をば、げにと聞くかひあるものから、いさゝか違ふ所もあらん人こそ、「我はさやは思ふ」など爭ひにくみ、「さるからさぞ」ともうち語らはゞ、つれ〴〵慰まめと思へど、げには少しかこつかたも、我とひとしからざらん人は、大かたのよしなしごといはん程こそあらめ、まめやかの心の友には、遊にへだたる所のありぬべきぞわびしきや。

さやは思ふ―さうは思はず

大かたの云云―插入句

ひとり燈火のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするこそ、こよなう慰むわざなれ。文は文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇、この國の博士どもの書けるものも、いにしへのは、あはれなることおほかり。

南華の篇―莊子

和歌こそなほをかしきものなれ。あやしの賤山がつのしわざも、いひ出づればおもしろく、おそろしき猪も、臥猪の床といへばやさしくなりぬ。この頃の歌は、一ふしをかしくいひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに、いかにぞや、言葉の外にあ

をかし―おもしろし、興あり

はれにけしき覺ゆるはなし。貫之が、絲による物ならなくにといへるは、古今集の中のうたくづとかやいひ傳へたれど、今の世の人の詠みぬべきことがらとは見えず。その世の歌には、すがたことばは、この類のみ多し。この歌にかぎりて、かくいひ立てられたるも知りがたし。源氏物語には、ものとはなしにとぞ書ける。新古今には、のこる松さへ峰にさびしきといへる歌をぞいふなるは、誠に少しくだけたるすがたにもや見ゆらん。されどこの歌も、衆議判の時よろしきよし沙汰ありて、後にもことさらに感じおほせ下されけるよし、家長が日記には書けり。歌の道のみいにしへに變らぬなゝどいふ事もあれど、いさや、今もよみあへる、おなじことば歌枕も、むかしの人のよめるは更におなじものにあらず。やすくすなほにして、すがたも清げに、あはれも深くみゆ。梁塵秘抄の郢曲のことばこそ、またあはれなる事はおほかゝめれ。むかしの人は、いかにいひ捨てたる言種も、皆いみじく聞ゆるにや。

絲による云云―絲による物ならなくに別路の心細くもおもほゆる哉

源氏物語云云―總角の巻に貫之の歌を引くとて物ならなくにを物とはなしにと改む

のこる松云云―冬の來て山もあらはに木の葉ふり殘る松さへ峰にさびしき

いづくにもあれ、しばし旅だちたるこそ、めさむる心地すれ。そのわたり、こゝかしこ

梁塵秘抄―神樂、催馬樂の歌謠を集めし書

和琴―あづまごと、六絃也

なりひさご―瓢、和名抄に、奈利

見ありき、ゐなかびたる所、山里などは、いと目馴れぬことのみぞ多かる。都へたよりもとめて文やる。「その事かの事、便宜にわするな」など、いひやることをかしけれ。さやうの所にてこそ、よろづに心づかひせらるれ。持てる調度まで、よきはよく、能ある人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺社など、忍びてこもりたるもをかし。

神樂こそなまめかしくおもしろけれ。大かた物の音には笛篳篥。つねに聞きたきは琵琶和琴。

山寺にかきこもりて、佛につかうまつるこそ、つれ〴〵もなく、心の濁もきよまる心地すれ。

人はおのれをつゞまやかにして、驕を退けて財をもたず、世を貪らざらんぞいみじかるべき。昔よりかしこき人の富めるは稀なり。唐土に許由といひつる人は、更に身に隨へるたくはへもなくて、水をも手してさゝげて飲みけるを見て、なりひさごといふものを、人の得させたりければ、ある時木の枝にかけたりければ、風に吹かれて鳴りけるを、か

比佐古、掛レ水器也、本文の話は高士傳に出づ

これらの人―唐土の古人に對し當時の邦人を指していへるにや

しがましとて捨てつ。また手にむすびてぞ水も飲みける。いかばかり心の中すゞしかりけん。孫晨は冬月に衾なくて、藁一束ありけるを、夕にはこれに臥し、朝にはをさめけり。もろこしの人は、これをいみじと思へばこそ、しるしとゞめて世にも傳へけめ。これらの人はかたりも傳ふべからず。

花橘は云々―花橘は昔を追懐せしむとの名を負ふものなれど

折節のうつり變るこそ、ものごとにあはれなれ。物のあはれは秋こそまされと、人ごとにいふめれど、それもさるものにて、今一きは心もうきたつものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日かげに、垣根の草萌え出づるころより、やゝ春深くかすみわたりて、花もやう〳〵氣色だつほどこそあれ、をりしも雨風うちつゞきて、心あわたゞしく散りすぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづに唯心をのみぞなやまし。花橘は名にこそおへれ、なほ梅のにほひにぞ、いにしへの事も立ちかへり戀しう思ひいでらるゝ。山吹のきよげに、藤のおぼつかなき樣したる、すべて思ひすて難きことおほし。

灌佛―四月八日に行はるゝ佛生會

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢すゞしげに繁りゆくほどこそ、世の

祭—賀茂の御形（ミアレ）の祭、四月、中の酉の日

おぼしき事—思ふ事

かいやり—書き破り

荷前の使—年の終に幣帛を十陵八墓に奉る使

追儺—鬼やらひ、十二月晦日

ほだしもたらぬ—妻子などの絆を持たざる

あはれも人の戀しさもまされと、人のおほせられしこそ、實にさるものなれ。五月、菖蒲ふくころ、早苗とるころ、水鶏のたゝくなど、心細からぬかは。六月の頃あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。七夕祭るこそなまめかしけれ。やう〳〵夜寒になるほど、雁なきて來るころ、萩の下葉色づくほど、早稲田刈りほすなど、とり集めたることは秋のみぞおほかる。また野分の朝こそをかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語、枕草紙などに事ふりにたれど、おなじ事また今更にいはじとにもあらず。おぼしき事いはぬは腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやり捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。さて冬枯の景色こそ、秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。汀の草に紅葉のちりとどまりて、霜いと白うおける朝、遣水より烟のたつこそをかしけれ。年の暮れはてゝ、人ごとに急ぎあへる頃ぞ、またなくあはれなる。すさまじき物にして見る人もなき月の、寒けく澄める二十日あまりの空こそ、心ぼそきものなれ。御佛名、荷前の使たつなどぞ、あはれにやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎにとり重ねて、催し行はるゝさまぞいみじきや。追儺より四方拜につゞくこそおもしろけれ。晦日の夜いたう暗きに、松どももともして、夜半すぐるまで、人の門たゝき走りありきて、何事にかあらん、ことゞしくのゝしりて、足を空にまどふが、曉がたより、さすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心ぼそけれ。亡人のくる夜とて魂まつるわざは、このごろ都にはなきを、東の方には猶することにてありしこそ、あはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、ひきかへ珍しき心地ぞする。大路のさま、松たてわたして、花やかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。

某とかやいひし世すて人の、この世のほだしもたらぬ身に、たゞ空のなごりのみぞ惜しきといひしこそ、まことにさも覺えぬべけれ。

よろづの事は月見るにこそ慰むものなれ。ある人の「月ばかりおもしろきものは有らじ」といひしに、またひとり、「露こそあはれなれ」と爭ひしこそをかしけれ。折にふれば何

沅湘日夜云云―唐の戴叔倫が湘南即事と題する詩の句

嵇康―竹林七賢の一人、文選四十三嵇康與山濤絶交書に、游山澤觀魚鳥心甚樂之

人數だて―節會御神樂などに天子の行幸せさせ給ふ時主殿寮二人立明を執りて

かはあはれならざらん。月花はさらなり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩に碎けて清く流るゝ水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。沅湘日夜東に流れ去る、愁人の爲にとどまること少時もせず、といへる詩を見侍りしこそあはれなりしか。嵇康も、山澤にあそびて魚鳥を見れば心樂ぶといへり。人遠く水草きよき所にさまよひありきたるばかり、心慰むことはあらじ。

何事も古き世のみぞ慕はしき。今やうは無下に卑しくこそなり行くめれ。かの木の道の匠の作れる美しき器物も、古代の姿こそをかしと見ゆれ。文の詞などぞ、昔の反古どもはいみじき。たどいふ詞も、口惜しうこそなりもて行くなれ。いにしへは、車もたげよ、火掲げよとこそいひしを、今やうの人は、もてあげよ、かきあげよといふ。主殿寮の人數だてといふべきを、たちあかししろくせよといひ、最勝講の御聽聞所なるをば、御講の廬とこそいふべきを、かうろといふ、口をしとぞ、古き人の仰せられし。

衰へたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたる有樣こそ、世づかずめでたきものな

供奉せるをいふ

陣―陣の座、禁中の節會に諸卿の列坐する所

夜のまうけ―灯の用意

飛鳥川云々―世の中は

れ。露臺、朝餉、何殿、何門などは、いみじとも聞ゆべし、あやしの所にもありぬべき小部、小板敷、高遣戸なゝども、めでたくこそ聞ゆれ。陣に夜のまうけせよといふこそいみじけれ。夜の御殿のをば、掻燈疾うよなゝといふ、まためでたし。上卿の陣にて事行へるさまはさらなり、諸司の下人どもの、したり顔になれたるもをかし。さばかり寒き夜もすがら、こゝかしこに睡り居たるこそをかしけれ。内侍所の御鈴の音は、めでたく優なるものなりとぞ、德大寺の太政大臣は仰せられける。

齋宮の野宮におはします有樣こそ、やさしくおもしろき事のかぎりとは覺えしか。經佛なゝど忌みて、中子、染紙などいふなるもをかし。すべて神の社こそ、捨てがたくなまめかしき物なれや。ものふりたる森の景色もたゞならぬに、玉垣しわたして、榊に木綿かけたるなど、いみじからぬかは。殊にをかしきは、伊勢、賀茂、春日、平野、住吉、三輪、貴船、吉田、大原野、松尾、梅宮。

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時うつり事さり、樂び悲びゆきかひて、花やかな

何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬となる

御堂殿―関白藤原道長

あせ果てん―荒れはてん

思ひおきてん―思ひ掟てん、思ひ定めん

りしあたりも、人すまぬ野らとなり、變らぬ住家は人あらたまりぬ。桃李物いはねば、誰と共にか昔をかたらん。まして見ぬ古のやんごとなかりけん跡のみぞいとはかなき。京極殿、法成寺など見るこそ、志とどまり、事變じにける樣はあはれなれ。御堂殿の作り磨かせ給ひて、庄園おほく寄せられ、我御族のみ、御門の御うしろみ、世のかためにて、行末までとおぼしおきし時、いかならん世にも、かばかりあせ果てんとはおぼしてんや。大門金堂など近くまでありしかど、正和のころ南門は燒けぬ。金堂はその後たふれ伏したるまゝにて、取りたつるわざもなし。無量壽院ばかりぞ、そのかたとて殘りたる。丈六の佛九體、いと尊くて並びおはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法花堂なゝどもいまだ侍るめり。これも亦いつまでかあらん。かばかりの名殘だになき所々は、おのづから礎ばかり殘るもあれど、さだかに知れる人もなし。されば萬に見ざらん世までを思ひおきてんこそ、はかなかるべけれ。風も吹きあへずうつろふ人の心の花に、馴れにし年月をおもへば、あはれと聞きし言の

白き絲云々―淮南子に出づ、絲は墨子、衢は楊子

むかし見しの歌―藤原公實の詠

とものみやつこ―伴御奴、主殿寮の下部伴氏の者

諒闇―天子の喪中

倚廬―諒闇の時の假御所

葉ごとに忘れぬものから、我世の外になり行くならひこそ、亡人の別よりも勝りて悲しきものなれ。されば白き絲の染まん事をかなしび、道の衢のわかれん事を歎く人もありけんかし。堀河院の百首の歌の中に、

むかし見し妹が垣根はあれにけり茅花まじりのすみれのみして

さびしきけしき、さること侍りけん。

御國ゆづりの節會おこなはれて、劍、璽、内侍所わたし奉らるゝほどこそ、かぎりなう心ぼそけれ。新院のおりゐさせ給ひての春、よませ給ひけるとかや。

殿もりのとものみやつこよそにしてはらはぬ庭に花ぞちりしく

今の世のことしげきにまぎれて、院にはまゐる人もなきぞ寂しげなる。かゝるをりにぞ人の心もあらはれぬべき。

諒闇の年ばかりあはれなる事はあらじ、倚廬の御所のさまなど、板敷をさげ、葦の御簾をかけて、布の帽額あら〳〵しく、御調度ども疎に、みな人の裝束、太刀、平緒まで、異

具足―道具
このごろある人―なき人に對して現に世に生存せる人をいふ
中陰―死後の七七四十九日間
あがれぬ―別れぬ
あなかしこ―必ず畏れ慎むべし
去るもの云

樣なるぞゆゝしき。

靜におもへば、よろづ過ぎにしかたの戀しさのみぞせん方なき。人しづまりて後、永き夜のすさびに、何となき具足とりしたゝめ、殘しおかじとおもふ反古などやりすつる中に、なき人の手ならひ、繪かきすさびたる見出でたるこそ、たゞその折の心地すれ。このごろある人の文だに、久しくなりて、いかなるをり、いつの年なりけんと思ふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なゝども、心もなくてかはらず久しき、いとかなし。人のなきあとばかり悲しきはなし。中陰のほど、山里などにうつろひて、便あしく狹き所にあまたあひ居て、後のわざども營みあへる、心あわたゞし。日數のはやく過ぐるほどぞ、ものにも似ぬ。はての日はいと情なう、互にいふ事もなく、我かしこげに物ひきしたゝめ、ちりぐゝに行きあがれぬ。もとの住家にかへりてぞ、更に悲しきことは多かるべき。しかぐゝの事はあなかしこ、跡のため忌むなる事ぞなどいへるこそ、かばかりの中に何かはと、人の心はなほうたて覺ゆれ。年月經てもつゆ忘るゝにはあらねど、去

云―文選廿九古詩に、去者日已疎、來者日已親、出二郭門一直視但見二丘與一墳古墓犂爲レ田松柏摧爲レ薪云々

るものは日々に疎しといへる事なれば、さはいへど、その際ばかりは覺えぬにや。よしなし事いひてうちも笑ひぬ。骸はけうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣でつゝ見れば、ほどなく卒都婆も苔むし、木の葉ふり埋みて、夕の嵐夜の月のみぞ、ことと ふよすがなりける。思ひ出でて忍ぶ人あらんほどこそあらめ。そも又ほどなくうせて、聞き傳ふるばかりの末々は、あはれとやは思ふ。さるは跡とふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ、心あらん人はあはれと見るべきを、はては嵐にむせびし松も、千年を待たで薪にくだかれ、ふるき墳はすかれて田となりぬ。その形だになくなりぬるぞ悲しき。

雪のおもしろう降りたりし朝、人の許いふべき事ありて、文をやるとて、雪のことは何ともいはざりし返事に、「この雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひがくしからん人の仰せらるる事聞き入るべきかは。かへすぐ口惜しき御心なり」といひたりしこそ、をかしかりしか。今はなき人なれば、かばかりの事も忘れがたし。

ひがくし―僻々し、無風流なり

今少し云々—客の出でたる妻戸を更に今少し廣く押し開きて

えふ—葉の字ならん、大全に圖あり。この内部の細線卽ちえふ也

九月二十日の頃、ある人にさそはれ奉りて、明くるまで月見ありくこと侍りしに、おぼし出づる所ありて、案内せさせて入りたまひぬ。荒れたる庭の露しげきに、わざとならぬ匂しめやかにうち薫りて、忍びたるけはひ、いと物あはれなり。よきほどにて出で給ひぬれど、猶ことざまの優に覺えて、物のかくれよりしばし見居たるに、妻戸を今少しおしあけて、月見るけしきなり。やがてかけ籠らましかば、口惜しからまし。あとまで見る人ありとは如何でか知らん。かやうの事は、たゞ朝夕の心づかひによるべし。その人程なくうせにけると聞き侍りし。

今の内裏つくりいだされて、有職の人々に見せられけるに、いづくも難なしとて、すでに遷幸の日近くなりけるに、立輝門院御らんじて、「閑院殿の櫛形の穴は、まろく緣もなくてぞありし」と仰せられける、いみじかりけり。これはえふの入りて、木にて緣をしたりければ、あやまりにて直されにけり。甲香は、ほらがひの樣なるが、小さくて、口のほどの細長にして出でたる貝の蓋なり。武藏の國金澤といふ浦にありしを、所の者は

まどし—文段抄には我身を守るには貧しと也といへり、惑ひ苦むの義とも解し得ん

仕丁—下僕

金は云々—莊子天地

へなたりと申し侍るとぞいひし。

手のわろき人の、憚らず文かきちらすはよし。見ぐるしとて人に書かするはうるさし。久しくおとづれぬ頃、いかばかり恨むらんと、我おこたり思ひ知られて、言葉なき心地するに、女のかたより、「仕丁やある、一人」なゝどいひおこせたるこそ、ありがたくうれしけれ。さる心ざましたる人ぞよきと、人の申し侍りし、さもあるべきことなり。

朝夕へだてなく馴れたる人の、ともある時に、我に心をおき、ひきつくろへるさまに見ゆるこそ、今更かくやはなどいふ人もありぬべけれど、猶げに〳〵しくよき人がなとぞ覺ゆる。疎き人のうちとけたる事などいひたる、またよしと思ひつきぬべし。

名利につかはれて、しづかなる暇なく、一生を苦むるこそ愚なれ。財おほければ身を守るにまどし。害を買ひ煩を招くなかだちなり。身の後には金をして北斗を支ふとも、人のためにぞ煩はるべき。愚なる人の目を喜ばしむるたのしび、またあぢきなし。大なる車、肥えたる馬、金玉のかざりも、心あらん人はうたて愚なりとぞ見るべき。金は山に

篇、藏二金於山一藏二珠於淵一不レ利二貨財一不レ近二貴富一云々

可不可は一條―可は善、不可は悪、一條は唯一つの義、荘子齊物論より出づ

す て、玉は淵になぐべし。利に惑ふはすぐれて愚なる人なり。うづもれぬ名をながき世に残さんこそあらまほしかるべけれ。位高くやんごとなきをしも、勝れたる人とやはいふべき。愚に拙き人も、家に生れ時にあへば、高位にのぼり、おごりを極むるもあり。いみじかりし賢人聖人、みづから卑しき位にをり、時に遇はずして止みぬる、またおほし。偏に高き官位をのぞむも、次におろかなり。智恵と心とこそ、世に勝れたる譽も残さまほしきを、つら〳〵思へば、譽を愛するは人の聞を喜ぶなり。譽むる人、毀る人、共に世にどどまらず、傳へ聞かん人また〳〵速に去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られんことを願はん。譽はまた毀のもとなり。身の後の名残りて更に益なし。これを願ふも次に愚なり。たゞし強ひて智をもとめ、賢をねがふ人のためにいはゞ、智恵いでては偽あり、才能は煩悩の増長せるなり。傳へて聞き、學びて知るは、まことの智にあらず。いかなるをか智といふべき。可不可は一條なり、いかなるをか善といふ。まことの人は、智もなく徳もなく、功もなく名もなし。誰か知り誰か傳へん。これ徳をかくし愚を守るにあらず、もとより賢愚得失のさかひに居らざればなり。まよひの心をもちて名利の要を求むるに、かくのごとし。萬事はみな非なり。いふにたらず、願ふにたらず。ある人法然上人に、「念佛の時睡におかされて、行を怠り侍ること、いかゞして此さはりをやめ侍らん」と申しければ、「目の覺めたらんほど念佛したまへ」と答へられたりける、いとたふとかりけり。また「往生は、一定とおもへば一定、不定とおもへば不定なり」といはれけり。これもたふとし。また「疑ひながらも念佛すれば往生す」ともいはれけり。これも亦たふとし。

法然上人―源空、美作の人建暦二年寂す、其唱へし所は浄土專念の宗也

因幡の國に、何の入道とかやいふものゝ女、かたちよしと聞きて、人數多いひわたりけれども、この女たゞ栗をのみ食ひて、更に米のたぐひを食はざりければ、「かゝる異樣のもの、人に見ゆべきにあらず」とて親ゆるさざりけり。

五月五日賀茂の競馬を見侍りしに、車の前に雜人たちへだてて見えざりしかば、おの〳〵おりて埒の際によりたれど、ことに人おほく立ちこみて、分け入りぬべきやうもなし。か

ついぬて―跪きぬて
あざみて―さげすみ笑ひて
しれもの―愚痴なる者
人木石云々―文選飽照の詩に、人非二木石一豈無レ感
唐橋中將―源雅清
教相―眞言宗にて經論聖教の學を

かる折に、むかひなる樗の木に法師の登りて、木の股についゐて物見るあり。取りつきながら、いたう眠りて、墮ちぬべき時に目を覺すこと度々なり。これを見る人嘲りあざみて、「世のしれものかな。かく危き枝の上にて安き心ありて眠るらんよ」といふに、わが心にふと思ひしまゝに、「われらが生死の到來只今にもやあらん。これを忘れて物見て日を暮す、愚なることは尙まさりたるものを」といひたれば、前なる人ども、「まことにさこそ候ひけれ。尤も愚に候ふ」といひて、みな後を見かへりて、「こゝへいらせ給へ」とて、所をさりて呼び入れ侍りにき。かほどのことわり、誰かは思ひよらざらんなれども、をりからの思ひかけぬ心地して、胸にあたりけるにや。人木石にあらねば、時にとりて物に感ずることなきにあらず。

唐橋中將といふ人の子に、行雅僧都とて、教相の人の師する僧ありけり。氣のあがる病ありて、年のやうゝたくるほどに、鼻の中ふたがりて、息も出でがたかりければ、さまざまにつくろひけれど、煩はしくなりて、目眉額なゞども腫れまどひて、うち覆ひけ

教相とし、行を爲すを事相とす
二の舞の面―安摩舞の次に舞ふ伶人の面、色赤くして恐し
心にくゝ云云―奥ゆかしく閑雅なる樣子にてゆゑづきたる―由緒ありげなる
さゝやかなる―小さき

れば、物も見えず、二の舞の面のやうに見えけるが、たゞ恐しく鬼の顏になりて、目は頂の方につき、額のほど鼻になりなゞどして、後は坊のうちの人にも見えず籠り居て、年久しくありて、猶煩はしくなりて死にけり。かゝる病もある事にこそありけれ。

春の暮つかた、のどやかに艶なる空に、曉しからぬ家の、奥ふかく木立ものふりて、庭に散りしをれたる花見過しがたきを、さし入りて見れば、南面の格子皆下して、さびしげなるに、東にむきて妻戸のよきほどに開きたる、御簾のやぶれより見れば、かたち清げなる男の、年二十ばかりにて、うちとけたれど、心にくくのどやかなる樣して、机の上に書をくりひろげて見居たり。いかなる人なりけん、たづね聞かまほし。

あやしの竹のあみ戸のうちより、いと若き男の、月かげに色合さだかならねど、つやゝかなる狩衣に濃き指貫、いとゆゑづきたるさまにて、さゝやかなる童一人を具して、遙なる田の中の細道を、稻葉の露にそぼちつゝ分け行くほど、笛をえならず吹きすさびた

る、あはれと聞き知るべき人もあらじと思ふに、行かんかた知らまほしくて、見送りつつ行けば、笛を吹きやみて、山の際に總門のあるうちに入りぬ。榻にたてたる車の見ゆるも、常よりは目とまる心地して、下人に問へば、「しか〳〵の宮のおはします頃にて、御佛事などさぶらふにや」といふ。御堂の方に法師ども參りたり。夜寒の風にさそはれくる空薫物の匂も身にしむ心地す。寢殿より御堂の廊にかよふ女房の追風用意など、人目なき山里ともいはず心づかひしたり。心のまゝにしげれる秋の野らは、おきあまる露にうづもれて、蟲の音かごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは、雲のゆきも早き心地して、月の晴れ曇ること定めがたし。

空薫物の匂―何處ともなく薫り來るたきものの匂

公世の二位のせうとに、良覺僧正と聞えしは、極めて腹あしき人なりけり。坊の傍に大なる榎ありければ、人「榎の僧正」とぞいひける。この名しかるべからずとて、かの木を切られにけり。その根のありければ、「切杭の僧正」といひけり。いよ〳〵腹立ちて、切杭を掘りすてたりければ、その跡大なる堀にてありければ、「堀池の僧正」とぞいひける。

せうと―兄

柳原の邊に、强盜法印と號する僧ありけり。度々强盜にあひたる故に、この名をつけにけるとぞ。

やふはなひたる云々―やふは文段抄にやうやうとして此故を答へたる也とあれど單に返答の發語と見るべからん、はなひたるは嘘したるの意

ある人清水へまゐりけるに、老いたる尼の行きつれたりけるが、道すがら嘘々といひもて行きたれば、「尼御前何事をかくはのたまふぞ」と問ひけれども、答もせず、猶いひ止まざりけるを、度々とはれて、うち腹だちて、「やゝ、はなひたる時かく呪はねば死ぬるなりと申せば、養ひ君の、比叡の山に兒にておはしますが、たゞ今もはなひ給はんと思へば、かく申すぞかし」といひけり。あり難き志なりけんかし。

ついがされ―衝重、白木づくりの三方也

光親卿、院の最勝講奉行してさぶらひけるを、御前へ召されて、供御をいだされて食せられけり。物食ひ散らしたるついがさねを、御簾の中へさし入れてまかり出でにけり。女房「あなきたな。誰に取れとてか」なゝど申しあはれければ、「有職のふるまひ、やんごとなき事なり」と、かへすゞ〳〵感ぜさせ給ひけるとぞ。

過ぎにし—世を過し來れる
まめやか—忠實
禪林の十因—禪林は東山永觀堂の寺號、永觀律師の往生十因をいふ

老きたりて始めて道を行ぜんと待つことなかれ。ふるき墳おほくはこれ少年の人なり。はからざるに病をうけて、忽ちにこの世を去らんとする時にこそ、はじめて過ぎぬる方のあやまれる事は知らるなれ。あやまりといふは他の事にあらず、速にすべき事をゆるくし、ゆるくすべきことを急ぎて過ぎにしことのくやしきなり。その時悔ゆともかひあらんや。人はたゞ無常の身にせまりぬる事を心にひしとかけて、つかのまも忘るまじきなり。さらばなどか此世の濁もうすく、佛道を勤むる心もまめやかならざらん。昔ありける聖は、人のきたりて自他の要事をいふとき、答へていはく、「今火急の事ありて、既に朝夕にせまれり」とて耳をふたぎ念佛して、終に往生を遂げたりと、禪林の十因にはべり。心戒といひける聖は、あまりにこの世のかりそめなることを思ひて、靜についゐる事だになく、常はうづくまりてのみぞありける。

應長のころ、伊勢の國より、女の鬼になりたるを率て上りたりといふ事ありて、そのころ二十日ばかり、日ごとに京白川の人鬼見にとて出でまどふ。「昨日は西園寺に參りたり

はやく跡なき—もとより無根
しるし—前兆
まかせ—引き入れ
あし—料足の義、錢をいふ

し、今日は院へまゐるべし。たゞ今はそこ〳〵に」などいひあへり。まさしく見たりといふ人もなく、虚言といふ人もなし。上下たゞ鬼の事のみいひやまず。そのころ東山より、安居院の邊へまかり侍りしに、四條よりかみざまの人、みな北をさして走る。「一條室町に鬼あり」とのゝしりあへり。今出川の邊より見やれば、院の御棧敷のあたり、更に通り得べうもあらず立ちこみたり。はやく跡なき事にはあらざンめりとて、人をやりて見するに、大方あへるものなし。暮るゝまでかく立ちさわぎて、はては鬪諍おこりて、あさましき事どもありけり。そのころおしなべて、二日三日人のわづらふこと侍りしをぞ、「かの鬼の虚言は、このしるしを示すなりけり」といふ人も侍りし。

龜山殿の御池に、大井川の水をまかせられんとて、大井の土民におほせて、水車を作らせられけり。多くのあしをたまひて、數日に營み出してかけたりけるに、大方めぐらざりければ、とかく直しけれども、終に廻らで、徒に立てりけり。さて宇治の里人を召してこしらへさせられければ、やすらかに結ひて參らせたりけるが、思ふやうにめぐり

て、水を汲み入るゝ事めでたかりけり。よろづにその道を知れるものは、やんごとなきものなり。

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心憂くおぼえて、ある時思ひたちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺、高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さて傍の人に逢ひて、「年ごろ思ひつる事はたし侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも參りたる人ごとに山へのぼりしは、何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へまゐるこそ本意なれと思ひて、山までは見ず」とぞいひける。すこしの事にも先達はあらまほしきことなり。

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名殘とて、おの〳〵遊ぶことありけるに、醉ひて興に入るあまり、傍なる足鼎をとりて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔をさし入れて舞ひ出でたるに、滿座興に入ること限なし。しばし奏でて後、拔かんとするに、大かた拔かれず。酒宴ことさめて、いかゞはせんと惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、うち割らんとすれど、たやすく割れず、響きて堪へがたかりければ、叶はでするべき樣なくて、三足なる角の上に帷子をうちかけて、手をひき杖をつかせて、京なる醫師のがり率て行きけるに、道すがら人の怪み見ること限なし。醫師のもとにさし入りて、むかひ居たりけんありさま、さこそ異樣なりけめ。物をいふも、くゞもり聲に響きて聞えず。かゝる事は書にも見えず、傳へたる敎もなしといへば、また仁和寺へかへりて、親しきもの、老いたる母など、枕上により居て泣き悲めども、聞くらんとも覺えず。かかるほどに、或者のいふやうは、「たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなどか生きざらん。力をたてゝ引き給へ」とて、藥の蕊をまはりにさし入れて、かねを隔てゝ、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻かけうげながら拔けにけり。からき命まうけて、久しく病み居たりけり。

御室にいみじき兒のありけるを、いかで誘ひ出して遊ばんとたくむ法師どもありて、能

極樂寺、高良―石清水の麓にある末寺末社

ゆかし―見たし、凡て追究的興味の禁じ難き狀態をいふ

くゞもり聲―鼎の中にくゝみて聲は響けども言語の外に聞えざるをいふ

かけうげ―缺け穿たれ

あるあそび法師どもなゝどかたらひて、風流の破籠やうのもの、ねんごろにいとなみ出でて、箱風情のものに認め入れて、雙の岡の便よき所にうづみおきて、紅葉ちらしかけなゝど、思ひよらぬさまにして、御所へ参りて、兒をそゝのかし出でにけり。うれしく思ひて、こゝかしこ遊びめぐりて、ありつる苔の筵になみゐて、「いたうこそ困じにたれ。あはれ紅葉を燒かん人もがな。しるしあらん僧たち、いのり試みられよ」などいひしろひて、埋みつる木のもとに向きて、數珠おしすり、印ことぐしく結びいでなゝどして、いらなくふるまひて、木の葉をかきのけたれど、つやくものも見えず。所の違ひたるにやとて、掘らぬ所もなく山をあされども無かりけり。埋みけるを人の見おきて、御所へ参りたる間に盗めるなりけり。法師ども言の葉なくて、聞きにくゝいさかひ腹だちて歸りにけり。あまりに興あらんとすることは、必ずあいなきものなり。家のつくりやうは夏をむねとすべし。冬はいかなる所にも住まる、暑き頃わろき住居は堪へがたきことなり。深き水は涼しげなし、淺くて流れたる、遙に涼し。こまかなるもの

ありつろ―例の、前に埋め置きし所をいふ
いちなく―勿體らしく、仰々しく
あいなき―愛なき、原本あひなきに作る

を見るに、遣戸は蔀の間よりもあかし。天井の高きは、冬寒く、燈くらし。造作は用なき所をつくりたる、見るもおもしろく、よろづの用にも立ちてよしとぞ、人のさだめあひ侍りし。

久しく隔たりて逢ひたる人の、わが方にありつること、かずくに殘なく語りつゞくるこそあいなけれ。へだてなく馴れぬる人も、程へて見るは恥かしからぬかは。次ざまの人は、あからさまに立ち出でても、興ありつる事とて、息もつぎあへず語り興ずるぞかし。よき人の物がたりするは、人あまたあれど一人に向きていふを、自ら人も聽くにこそあれ。よからぬ人は、誰ともなくあまたの中にうち出でて、見る事のやうに語りなせば、皆同じく笑ひのゝしる、いとらうがはし。をかしき事をいひてもいたく興ぜぬと、興なき事をいひてもよく笑ふにぞ、品の程はかられぬべき。人の見ざまのよしあし、才ある人はその事なゝど定めあへるに、おのが身にひきかけていひ出でたる、いとわびし。人のかたり出でたる歌物語の、歌のわろきこそ本意なけれ。すこしその道知らん人は、い

あかし―あかるし
次ざまの人―身分のよからぬ人
あからさま―苟且
らうがはし―亂りがはし、騷々し

かたはらいたく―笑止にて

いさましからん―何ぞ心勇む事あらんや

うつはもの―器量

なじかは捨てし―何しに世を捨てたるぞ、一説捨てじと濁り讀み、なじかはをいかでかと解す

みじと思ひては語らじ。すべていとも知らぬ道の物がたりしたる、かたはらいたく聞きにくし。

「道心あらば住む所にしもよらじ、家にあり人に交るとも、後世を願はんに難かるべきかは」といふは、更に後世知らぬ人なり。げにはこの世をはかなみ、必ず生死を出でんと思はんに、何の興ありてか、朝夕君につかへ、家を顧るいとなみのいさましからん。心は緣にひかれて移るものなれば、靜ならでは道は行じがたし。そのうつはもの昔の人に及ばず、山林に入りても、飢をたすけ、嵐を防ぐよすがなくては、あられぬわざなれば、おのづから世を貪るに似たることも、便にふればなどか無からん。さればとて、「背けるかひなし。さばかりならば、なじかは捨てし」なゝどいはんは無下のことなり。さすがに一たび道に入りて、世をいとはん人、たとひ望ありとも、勢ある人の貪欲多きに似るべからず。紙の衾麻の衣、一鉢のまうけ、藜のあつもの、いくばくか人のつひえをなさん。もとむる所はやすく、その心早く足りぬべし。形にはづる所もあれば、さはいへど惡には

菩提―醍醐名義集に、肇師云道之極者稱曰二菩提一云々後代諸師皆譯爲レ道

設けて―この下になど思ひ又と補ふ

年ごろも云云―年來も斯くてあればこそありしものをその事の果てんを待たんに幾程の事もあらじ

うとく、善には近づくことのみぞ多き。人と生れたらんしるしには、いかにもして世を遁れん事こそあらまほしけれ。偏に貪ることをつとめて、菩提に赴かざらんは、よろづの畜類にかはる所あるまじくや。

大事を思ひたゝん人は、さりがたき心にかゝらんことの本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。しばしこの事はてゝ、おなじくば彼の事沙汰しおきて、しかぐの事人の嘲やあらん、行末難なくしたゝめ設けて、年ごろもあればこそあれ、その事待たんほどあらじ、物さわがしからぬやうになゝど思はんには、えさらぬ事のみいとどかさなりて、事の盡くるかぎりもなく、思ひたつ日もあるべからず。おほやう人を見るに、すこし心ある際は、皆このあらましにてぞ一期は過ぐめる。近き火なゝどに逃ぐる人は、しばしとやいふ。身を助けんとすれば、恥をも顧みず、財をも捨てゝ遁れ去るぞかし。命は人を待つものかは。無常の來ることは、水火の攻むるよりも速に遁れがたきものを、その時老いたる親、いときなき子、君の恩、人の情、捨てがたしとて捨てざらんや。

眞乘院—仁和寺内の坊

三萬疋—永錢一貫を百疋といふ三百貫は則ち三萬疋也めし—食ふ

しろうるり—眞賴の説に、るりはりの延音、しろうりを態と解し難く云へるにてこの僧色白く面長にて白瓜に似たりしならん云々

眞乘院に、盛親僧都とてやんごとなき智者ありけり。芋頭といふものを好みて多く食ひけり。談義の座にても、大なる鉢にうづたかく盛りて、膝もとにおきつゝ、食ひながら書をも讀みけり。煩ふことあるには、七日二七日なゝど療治とて籠り居て、思ふやうによき芋頭をえらびて、ことに多く食ひて、萬の病をいやしけり。人に食はすることなし、ただ一人のみぞ食ひける。極めて貧しかりけるに、師匠死にざまに錢二百貫と坊ひとつを譲りたりけるを、坊を百貫に賣りて、かれこれ三萬疋を芋頭のあしと定めて、京なる人にあづけおきて、十貫づつ取りよせて、芋頭を乏しからずめしけるほどに、また他用にも用ふる事なくて、そのあし皆になりにけり。「三百貫のものを貧しき身にまうけて、かくはからひける、誠にありがたき道心者なり」とぞ人申しける。この僧都ある法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり。「とは何ものぞ」と人の問ひければ、「さるものを我も知らず。もしあらましかば、この僧の顔に似てん」とぞいひける。この僧都、みめよく、力つよく、大食にて、能書、學匠、辯説人にすぐれて、宗の法燈なれば、寺中に

宗の法燈—宗は眞言、法燈は棟梁の意

ときひじ—時非時、時は正午の食非時は午後の食をいふ

甑—蒸籠（セイロウ）

も重く思はれたりけれども、世を輕く思ひたる曲者にて、よろづ自由にして、大かた人に隨ふといふことなし。出仕して饗膳なゝどにつく時も、皆人の前するわたすを待たず、我前にすゑぬれば、やがてひとりうち食ひて、歸りたければ、ひとりついたちて行きけり。ときひじも人にひとしく定めて食はず、我食ひたき時、夜中にも曉にも食ひて、ねぶたければ晝もかけ籠りて、いかなる大事あれども、人のいふこと聽き入れず。目覺めぬれば、幾夜もいねず、心をすまして嘯き歩きなど、世の常ならぬさまなれども、人にいとはれず、よろづ許されけり。德のいたれりけるにや。

御産のとき甑おとすことは、定れることにはあらず。御衣胞滯る時のまじなひなり。滯らせ給はねばこの事なし。下ざまより事おこりて、さする本説なし。大原の里の甑をめすなり。ふるき寶藏の繪に、賤しき人の子産みたる所に、甑おとしたるを書きたり。延政門院いときなくおはしましける時、院へまゐる人に、御ことづてとて申させ給ひける御歌、

ふたつもじ云々―ふたつもじはこ、牛の角もじはい、すぐなもじはし、ゆがみもじはく

武者―警護の武士

ほどにつけて極むる―其家々の分に應じて最高の

岡本關白殿―家平

ふたつもじ牛の角もじすぐなもじゆがみもじとぞ君はおぼゆる

こひしく思ひまゐらせ給ふとなり。

後七日の阿闍梨、武者を集むる事、いつとかや盗人に逢ひにけるより、宿直人とてかくことぐしくなりにけり。一とせの相は、この修中の有様にこそ見ゆなれば、兵を用ひんこと穏ならぬ事なり。

車の五緒はかならず人によらず、ほどにつけて極むる官位に至りぬれば乗るものなりとぞ、ある人おほせられし。

このごろの冠は昔よりは遙に高くなりたるなりとぞ、ある人おほせられし。古代の冠桶を持ちたる人は、端をつぎて今は用ふるなり。

岡本關白殿、さかりなる紅梅の枝に、鳥一雙をそへて、この枝につけて參らすべきよし、御鷹飼下毛野武勝に仰せられたりけるに、「花に鳥つくるすべ知り候はず、一枝に二つつくることも存じ候はず」と申しければ、膳部に尋ねられ、人々に問はせ給ひて、また武勝

火うち羽―鳥の羽先の火打形の羽

雨覆の毛―雉の尾のつけぎはの毛

君がために―わがたのむ君がためにと折る花は時しもわかぬものにぞありける

に、「さらばおのれが思はんやうにつけて參らせよ」と仰せられたりければ、花もなき梅の枝に、一つをつけて參らせけり。武勝が申し侍りしは、「柴の枝、梅の枝、つぼみたるも散りたるにつく。五葉などにもつく。枝の長さ七尺、あるひは六尺、かへし刀五分に切る、枝のなかばに鳥をつく。つくる枝ふまする枝あり。黒葛藤のわらぬにて二所つくべし。藤のさきは、火うち羽のたけに比べて切りて、牛の角のやうに撓むべし。初雪のあした、枝を肩にかけて、中門よりふるまひてまゐる。大砌の石を傳ひて、雪に跡をつけず、雨覆の毛を少しかなぐり散らして、二棟の御所の高欄によせかく。祿をいださるれば、肩にかけて拜して退く。初雪といへども、沓のはなの隠れぬほどの雪にはまゐらず。雨覆の毛を散らすことは、鷹は弱腰を取ることなれば、御鷹の取りたるよしなるべし」と申しき。花に鳥つけずとは、いかなる故にかありけん。長月ばかりに、梅のつくり枝に雉をつけて、君がためにと折る花は時しもわかぬといへること、伊勢物語に見えたり。作花はくるしからぬにや。

賀茂の岩本橋本は業平實方なり。人の常にいひまがへ侍れば、一とせ參りたりしに、老いたる宮司の過ぎしを、呼びとどめて尋ね侍りしに、「實方は御手洗に影のうつりける所と侍れば、橋本やなほ水の近ければと覺えはべる。吉水和尚、

月をめで花をながめしいにしへのやさしき人はこゝにあり原

と詠みたまひけるは、岩本の社とこそ承りおき侍れど、おのれらよりは、なか〳〵御存知なゞともこそさぶらはめ」と、いと悲しくいひたりしこそいみじく覺えしか。今出川の院の近衛とて、集どもにあまた入りたる人は、若かりける時、常に百首の歌を詠みて、かの二つの社の御前に、水にて書きて手向けられけり。誠にやんごとなき譽ありて、人の口にある歌おほし。作文詩序なゞといみじく書く人なり。

筑紫に、なにがしの押領使などいふやうなる者のありけるが、土大根をよろづにいみじき藥とて、朝ごとに二つづつ燒きて食ひけること、年久しくなりぬ。ある時館のうちに人もなかりける隙をはかりて、敵襲ひ來りてかこみ攻めけるに、館の内につはもの二人

吉水和尚―慈鎭和尚、東山吉水に居たればいふ、嘉祿元年滅、嘉禎三年慈鎭と諡せらる、

出できて、命を惜しまず戰ひて、皆追ひかへしてけり。いと不思議におぼえて、「日頃ここにものし給ふとも見ぬ人々の、かく戰ひしたまふは、いかなる人ぞ」と問ひければ、「年來たのみて、あさな〳〵めしつる土大根らに候」といひて失せにけり。深く信をいたしぬれば、かゝる德もありけるにこそ。

書寫の上人は、法華讀誦の功つもりて、六根淨にかなへる人なりけり。旅の假屋に立ち入られけるに、豆の殼を焚きて豆を煑ける音の、つぶ〳〵となるを聞き給ひければ、「疎からぬおのれらしも、うらめしく我をば煑て、辛き目を見するものかな」といひけり。焚かるゝ豆がらのはら〳〵と鳴る音は、「わが心よりする事かは。燒かるゝはいかばかり堪へがたけれども、力なきことなり。かくな恨み給ひそ」とぞ聞えける。

元應の清暑堂の御遊に、玄上はうせにし頃、菊亭の大臣、牧馬を彈じたまひけるに、座につきてまづ柱をさぐられたりければ、ひとつ落ちにけり。御ふところに續飯をもち給ひたるにて付けられにければ、神供の參るほどに、よく干て事故なかりけり。いかなる

書寫の上人―性空上人、書寫山に居住せるよりいふ

玄上、牧馬―共に琵琶の名器

菊亭の大臣―左大臣兼季

いかなる意趣云々―斯

く柱の落ちし理由をいふ也、もとのやうには前に述べたるが如くにの意、衣被は古貴女の面を蔽ひかくす爲に頭に被りし衣、茲は之を被れる見物の女房也

作善―願文に佛像供養經典書寫の事など書き列ねるをいふ

意趣かありけん、物見ける衣被のよりて放ちて、もとのやうに置きたりけるとぞ。

名を聞くより、やがて面影はおしはからるゝ心地するを、見るときは、又かねて思ひつるまゝの顏したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、この頃の人の家のそこ程にてぞありけんと覺え、人も今見る人の中に思ひよそへらるゝは、誰もかく覺ゆるにや。またいかなる折ぞ、たゞ今人のいふことも、目に見ゆるものも、わが心のうちも、かゝる事のいつぞやありしがと覺えて、いつとは思ひいでねども、まさしくありし心地のするは、我ばかりかく思ふにや。

賤しげなるもの。居たるあたりに調度のおほき、硯に筆のおほき、持佛堂に佛のおほき、前栽に石草木のおほき、家のうちに子孫のおほき、人にあひて詞のおほき、願文に作善おほく書き載せたる。おほくて見苦しからぬは、文車の文、塵塚のちり。

世にかたり傳ふること、まことは愛なきにや、多くは皆虛言なり。あるにも過ぎて人はものをいひなすに、まして年月すぎ、さかひも隔りぬれば、いひたきまゝに語りなし

かつ―いふ片端より

おぼめき―明かに覺えぬ樣をなすをいふ

權者―神佛などの衆生濟度の爲めかりに人として出現せるをいふ

て、筆にも書きとどめぬれば、やがて定りぬ。道々のものゝ上手のいみじき事など、かたくななる人の、その道知らぬは、そゞろに神の如くにいへども、道知れる人はさらに信も起さず。音にきくと見る時とは、何事もかはるものなり。かつ顯るゝも顧みず、口に任せていひちらすは、やがて浮きたる事と聞ゆ。又我も誠しからずは思ひながら、人のいひしまゝに、鼻のほどおごめきて言ふは、その人の虛言にはあらず。けに〳〵しく所々うちおぼめき、能く知らぬよしして、さりながら、つま〴〵合せてかたる虛言は、恐しきことなり。わがため面目あるやうに言はれぬる虛言は、人いたくあらがはず。皆人の興ずる虛言は、一人さもなかりし物をといはんも詮なくて、聞き居たるほどに、證人にさへなされて、いとゞ定りぬべし。とにもかくにも虛言おほき世なり。たゞ常にある珍しからぬ事のまゝに心えたらん、よろづ違ふべからず。下ざまの人のものがたりは、耳驚くことのみあり。よき人はあやしき事を語らず。かくはいへど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは世俗の虛言を懇に信じたるもをこがまし

く、よもあらじなどいふも詮なければ、大方はまことしくあひしらひて、偏に信ぜず、また疑ひあざけるべからず。

蟻の如くにあつまりて、東西にいそぎ南北にわしる、貴きあり、賤しきあり、老いたるあり、若きあり、行く所あり、歸る家あり、夕にいねて朝に起く、いとなむ所何事ぞや。生を貪り利を求めてやむ時なし。身を養ひて何事をか待つ、期するところたゞ老と死とにあり。その來ること速にして、念々の間にとゞまらず。これを待つ間、何の樂かあらん。惑へるものはこれを恐れず。名利に溺れて、先途の近きことを顧みねばなり。愚なる人はまたこれをかなしぶ。常住ならんことを思ひて、變化の理を知らねばなり。

つれ〴〵わぶる人は、いかなる心ならん。まぎるゝ方なく、たゞ一人あるのみこそよけれ。世に隨へば、心外の塵にうばはれて惑ひ易く、人に交れば、言葉よそのきゝに隨ひて、さながら心にあらず。人に戯れ、物にあらそひ、一度はうらみ、一度はよろこぶ。そのこと定れることなし。分別安に起りて、得失やむ時なし。まどひの上に醉へり、醉の

先途―冥途、死して行く先

つれ〴〵わぶる―徒然を厭ふ

ほれて―醉中夢裡の如く茫然として

摩訶止觀―十卷、天台大師の著にして妙法蓮華經觀心の義を演べたるもの

いろふ―取り扱ふ、關知する

中に夢をなす。走りていそがはしく、ほれて忘れたること、人皆かくのごとし。いまだまことの道を知らずとも、緣を離れて身をしづかにし、事に與らずして心を安くせんこそ、暫く樂ぶともいひつべけれ。生活、人事、伎能、學問等の諸緣をやめよとこそ、摩訶止觀にもはべれ。

世のおぼえ花やかなるあたりに、嘆も喜もありて、人おほく往きとぶらふ中に、聖法師のまじりて、いひ入れたゞずみたるこそ、さらずともと見ゆれ。さるべき故ありとも、法師は人にうとくてありなん。

世の中に、そのころ人のもてあつかひぐさに言ひあへること、いろふべきにはあらぬ人の、能く案内知りて、人にもかたり聞かせ、問ひ聞きたるこそうけられね。殊にかたほとりなる聖法師などぞ、世の人の上はわが如く尋ね聞き、如何でかばかりは知りけんと覺ゆるまでぞ言ひ散らすめる。

今やうの事どもの珍しきを、いひ廣めもてなすこそ、またうけられね。世に事ふりたる

今さらの人—今あらたに交際する人

こゝもとに—此許、つひ口先になどの義にもいへどこゝは其人々の問にの義ならん

されば云々—されば其人の話には京恥しく奥ゆかしき方もあれどおろかなるおのが道—

まで知らぬ人は心にくし。今さらの人などのある時、こゝもとに言ひつけたる言種、物の名など心えたるどち、かたはし言ひかはし、目見あはせ笑ひなどして、心しらぬ人にごゝろえず思はすること、世なれずよからぬ人の必ずあることなり。

何事も入りたゝぬさましたるぞよき。よき人は知りたる事とて、さのみ知りがほにやはいふ。片田舎よりさしいでたる人こそ、萬の道に心えたるよしのさしいらへはすれ。されば世に恥しき方もあれど、自らもいみじと思へる氣色かたくなり。よく辨へたる道には、かならず口おもく、問はぬかぎりは言はぬこそいみじけれ。

人ごとに、我身にうとき事をのみぞ好める。法師はつはものの道をたて、夷は弓ひくすべ知らず、佛法知りたる氣色し、連歌し、管絃を嗜みあへり。されどおろかなる己が道よりは、なほ人に思ひあなづられぬべし。法師のみにもあらず、上達部、殿上人、上ざまで、おしなべて武を好む人おほかり。百たび戰ひて百たび勝つとも、いまだ武勇の名を定めがたし。その故は運に乘じて敵をくだく時、勇者にあらずといふ人なし。兵盡き矢きはまりて、遂に敵に降らず、死を安くして後、はじめて名を顯すべき道なり。生けらんほどは武に誇るべからず。人倫に遠く禽獸に近きふるまひ、その家にあらずば、好みて益なきことなり。

巧ならざる自己の專門の道

屏風障子などの絵も文字も、かたくなる筆樣して書きたるが、見にくきよりも、宿の主人のつたなく覺ゆるなり。大かた持てる調度にても、心おとりせらるゝ事はありぬべし。さのみよき物を持つべしとにもあらず、損ぜざらんためとて、品なく見にくきさまにしなし、珍しからんとて、用なき事どもしそへ、わづらはしく好みなせるをいふなり。古めかしきやうにて、いたくこと〴〵しからず、費もなくて、物がらのよきがよきなり。

「羅の表紙は疾く損ずるがわびしき」と人のいひしに、頓阿が、「羅は上下はづれ、螺鈿の軸は、貝落ちて後こそいみじけれ」と申し侍りしこそ、心まさりて覺えしか。一部とある草紙などのおなじ樣にもあらぬを、醜しといへど、弘融僧都が「物を必ず一具に整

頓阿—二條爲世の門弟にて慶運淨辨兼好と相竝びて和歌の四天王と稱せらる

一の上―左大臣

亢龍の悔―易の象に亢之爲レ言也知レ進而不レ知レ退知レ存而不レ知レ亡知レ得而不レ知レ喪云云

法顯三藏―晉朝の高僧、三藏とは經律論の三を修得せる人の稱

へんとするは拙き者のする事なり。不具なるこそよけれ」といひしも、いみじく覺えしなり。すべて何もみな事整りたるはあしきことなり。爲殘したるを、さてうちおきたるは、面白く生きのぶるわざなり。内裏造らるゝにも、必ず造りはてぬ所を殘す事なりと、ある人申し侍りしなり。先賢の作れる内外の文にも、章段の闕けたる事のみこそ侍れ。竹林院入道左大臣殿、太政大臣にあがりたまはんに、何の滯かおはせんなれども、「珍しげなし。一の上にてやみなん」とて、出家し給ひにけり。洞院左大臣殿この事を甘心し給ひて、相國の望おはせざりけり。亢龍の悔ありとかやいふ事侍るなり。月滿ちては缺け、物盛にしては衰ふ。萬の事さきのつまりたるは、破に近き道なり。

法顯三藏の天竺に渡りて、故郷の扇を見ては悲び、病に臥しては漢の食を願ひ給ひける事を聞きて、「さばかりの人の無下にこそ、心弱き氣色を人の國にて見え給ひけれ」と人のいひしに、弘融僧都「優に情ありける三藏かな」といひたりしこそ、法師の樣にもあらず、心にくゝ覺えしか。

べからず―うつる、辭すの下なるは推量、學ぶの下なるは命令

風月の才―詩歌の才

法師―一説に寺を燒かれたれば火憂（ホウシ）といふ秀句といへり

人の心すなほならねば、僞なきにしもあらず、されどおのづから正直の人などかなからん。おのれすなほならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。いたりて愚なる人は、またま賢なる人を見てこれを憎む。「大なる利を得んがために少しきの利を受けず、いつはり飾りて名を立てんとす」と謗る。おのれが心に違へるによりて、この嘲をなすにて知りぬ。この人は下愚の性うつるべからず、僞りて小利をも辭すべからず。假にも愚をまなぶべからず。狂人のまねとて大路を走らば、すなはち狂人なり。惡人のまねとて人を殺さば、惡人なり。驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。僞りても賢をまなばんを賢といふべし。

惟繼中納言は、風月の才に富める人なり。一生精進にて、讀經うちして、寺法師の圓伊僧正と同宿して侍りけるに、文保に三井寺やかれし時、坊主にあひて、「御坊をば寺法師とこそ申しつれど、寺はなければ、今よりは法師とこそ申さめ」といはれけり。いみじき秀句なりけり。

一度せさせよ―一杯飲ませよ

具して逢ひたるに―引き連れ來れるに逢ひたるに

下部に酒のますることは心すべきことなり。宇治に住みける男、京に具覺坊とてなまめきたる遁世の僧を、小舅なりければ、常に申しむつびけり。ある時迎に馬を遣したりければ、「はるかなる程なり、口つきの男にまづ一度せさせよ」とて酒を出したれば、さしうけさしうけよゝと飲みぬ。太刀うち佩きてかひ〳〵しげなれば、たのもしく覺えて、召し具して行くほどに、木幡のほとりにて、奈良法師の兵士あまた具して逢ひたるに、この男立ちむかひて、「日暮れにたる山中にあやしきぞ。とまり候へ」といひて太刀をひき拔きければ、人もみな太刀ぬき矢はげなどしけるを、具覺坊手をすりて、「現心なく醉ひたるものに候ふ。枉げて許し給はらん」といひければ、おの〳〵嘲りて過ぎぬ。この男具覺坊にあひて、「御坊は口惜しき事したまひつるものかな。おのれ醉ひたること侍らず。高名つかまつらんとするを、拔ける太刀空しくなし給ひつること」と怒りて、ひたぎりに斬り落しつ。さて「山賊あり」とのゝしりければ、里人おこりて出であへば、「われこそ山賊よ」といひて走りかゝりつゝ斬り廻りけるを、あまたして手負せうち伏せてしばり

によび―呻吟して

うける事―浮きたる事、虛事

四條大納言―藤原公任

これら―此邊

あやまたず―果して

けり。馬は血つきて宇治大路の家に走り入りたり。あさましくて、男ども數多はしらかしたれば、具覺坊は梔原にによび伏したるを、求め出でてかきもて來つ。からき命生きたれど、腰きり損ぜられて、かたはになりにけり。

あるもの小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちたりけるを、ある人「御相傳うけること には侍らじなれども、四條大納言えらばれたるものを、道風書かんこと、時代や違ひ侍らん。覺束なくこそ」といひければ、「さ候へばこそ世にありがたきものには侍りけれ」とていよ〳〵祕藏しけり。

「奥山にねこまたと云ふものありて、人を食ふなる」と人のいひけるに、「山ならねども、これらにも猫の經あがりて、ねこまたになりて、人とることはあゝなるものを」といふものありけるを、なに阿彌陀佛とかや連歌しける法師の、行願寺のほとりにありけるが聞きて、一人ありかん身は心すべきことにこそと思ひける頃しも、ある所にて夜ふくるまで連歌して、たゞ一人かへりけるに、小川の端にて、音に聞きしねこまたあやまたず足

のもとへふと寄り來て、やがてかきつくまゝに、頸のほどを食はんとす。肝心もうせて、防がんとするに力もなく、足も立たず、小川へころび入りて、助けよやねこまた、よやよや」と叫べば、家々より松どもともして、走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。こはいかにとて、川の中より抱き起したれば、連歌の賭物とりて、扇小箱なんど懐に持ちたりけるも水に入りぬ。希有にして助かりたるさまにて、はふ〳〵家に入りにけり。飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。

大納言法印のめしつかひし乙鶴丸、やすら殿といふものを知りて、常にゆき通ひしに、ある時いでて歸り來るを、法印「いづくへ行きつるぞ」と問ひしかば、「やすら殿のがりまかりて候ふ」といふ。「そのやすら殿は、男か法師か」とまた問はれて、袖かき合せて、「いかゞ候ふらん。頭をば見候はず」と答へ申しき。などか頭ばかりの見えざりけん。

赤舌日といふ事　陰陽道には沙汰なきことなり。昔の人これを忌まず。このごろ何者のいひ出でて忌みはじめけるにか。この日あること末通らずといひて、その日いひたりし

赤舌日―晴明の簠簋内傳によるに赤舌赤口共に羅刹神に當る日にて赤口は大歳東門番神、赤舌は大歳西門番神なり、兼好は此書を見ざりしならん

こと、爲たりしこと叶はず、得たりしものは失ひ、企てたりしこと成らずといふ、愚なり。吉日を選びてなしたるわざの末通らぬを數へて見んも、また等しかるべし。その故は、無常變易のさかひ、ありと見るものも存せず、始あることも終なし。志は遂げず、望は絶えず。人の心不定なり、ものみな幻化なり。何事かしばらくも住する。この理を知らざるなり。吉日に惡をなすに必ず凶なり、惡日に善を行ふにかならず吉なりといへり。吉凶は人によりて日によらず。

ある人弓射ることを習ふに、もろ矢をたばさみて的にむかふ。師のいはく、「初心の人ふたつの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて初の矢になほざりの心あり、毎度たゞ得失なく、この一箭に定むべしと思へ」といふ。わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろそかにせんと思はんや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ萬事にわたるべし。道を學する人、夕には朝あらんことを思ひ、朝には夕あらんことを思ひて、重ねて懇に修せんことを期せり。いはんや一刹那のうちにおいて、懈怠の

幻化―まぼろしの如く變化する義、楞嚴經疏に、假託ニ虛偽一妄設レ情名稱レ幻無而忽有畢竟無レ體稱レ之曰レ化

もろ矢―一手にて矢二筋持つこと

心あることを知らんや。何ぞたゞ今の一念において直にすることの甚だ難き。

「牛を賣るものあり、買ふ人、明日その價をやりて牛を取らんといふ。夜の間に牛死ぬ。買はんとする人に利あり、賣らんとする人に損あり」とかたる人あり。これを聞きて傍なるものの曰く、「牛の主まことに損ありといへども、また大なる利あり。その故は、生あるもの死の近きことを知らざること、牛すでにしかなり。人またおなじ。はからざるに牛は死し、計らざるに主は存せり。一日の命萬金よりもおもし。牛の價鵝毛よりも輕し。萬金を得て一錢を失はん人、損ありといふべからず」といふに、皆人嘲りて、「その理は牛の主に限るべからず」といふ。またいはく、「されば人死をにくまば、生を愛すべし。存命のよろこび日々に樂しまざらんや。愚なる人この樂を忘れて、いたづがはしく外の樂をもとめ、この財を忘れて、危く他の財を貪るには、志滿つることなし。いける間生をたのしまずして、死に臨みて死を恐れば、この理あるべからず。人みな生をたのしまざるは、死をおそれざる故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近き事を忘るゝなり。もしまた生死の相にあづからずといはば、實の理を得たりといふべし」といふに、人いよいよ嘲る。

いたづがはしく―わづらはしく、面倒なる思をして

常磐井の相國―太政大臣實氏

常磐井の相國出仕したまひけるに、勅書を持ちたる北面あひ奉りて、馬よりおりたりけるを、相國後に、「北面なにがしは勅書を持ちながら下馬し侍りしものなり。かほどのもの、いかでか君に仕うまつり候ふべき」と申されければ、北面をはなたれにけり。勅書を馬の上ながら捧げて見せ奉るべし、おるべからずとぞ。

はなたれ―免職せられ

「箱のくりかたに緒をつくること、いづかたにつけ侍るべきぞ」とある有職の人に尋ね申し侍りしかば、「軸につけ表紙につくること兩説なれば、いづれも難なし。文の箱は多くは右につく。手箱には軸につくるも常のことなり」と仰せられき。

くりかた―栗形、大全に図の如き形といへり

めなもみといふ草あり。蝮にさゝれたる人、かの草をもみてつけぬれば、すなはち癒ゆとなん。見知りておくべし。

めなもみ―蒴茶の俗稱、野生にして莖方直枝對生、葉三稜ありて細毛を生じ秋枝端に小黄花を著く

其物につきて、そのものを費しそこなふもの、數を知らずあり。身に虱あり、家に鼠あ

り、國に賊あり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧に法あり。

たふとき聖のいひおきけることを書きつけて、一言芳談とかや名づけたる草紙を見侍りしに、心にあひて覺えし事ども、

一爲やせまし、爲ずやあらましと思ふことは、おほやう爲ぬはよきなり。

一後世を思はんものは、糟汰瓶ひとつも持つまじきことなり。持經本尊にいたるまで、よきものを持つ、よしなきことなり。

一遁世者は、なきに事かけぬやうをはからひて過ぐる、最上のやうにてあるなり。

一上臈は下臈になり、智者は愚者になり、德人は貧になり、能ある人は無能になるべきなり。

一佛道を願ふといふは別のことなし、暇ある身になりて、世のこと心にかけぬを第一の道とす。

この外もありし事ども覺えず。

糟汰—ぬかみそ

上臈下臈—臈は出家者剃髪授戒してより一夏九旬の間勤行するをいふ僧位は其戒臈の前後にて次第するより上臈下臈を一般に上位下位の義にいふ

堀河の相國は、美男のたのしき人にて、その事となく過差を好みたまひけり。御子基俊卿を大理になして、廳務を行はれけるに、廳屋の唐櫃見苦しとて、めでたく作り改めらるべきよし仰せられけるに、この唐櫃は上古よりつたはりて、そのはじめを知らず、數百年を經たり、累代の公物、古弊をもちて規模とす、たやすく改められ難きよし、故實の諸官等申しければ、その事やみにけり。

久我の相國は、殿上にて水をめしけるに、主殿司土器をたてまつりければ、「まがりをまるらせよ」とて、まがりしてぞめしける。

ある人任大臣の節會の内辨を勤められけるに、内記のもちたる宣命を取らずして堂上せられにけり。きはまりなき失禮なれども、たちかへり取るべきにもあらず、思ひ煩はれけるに、六位の内記康綱、衣被の女房をかたらひて、かの宣命をもたせて、しのびやかに奉らせけり。いみじかりけり。

尹大納言光忠入道、追儺の上卿をつとめられけるに、洞院右大臣殿に次第を申し請けら

堀河の相國—源基具

過差—おごり

大理—檢非違使の別當

久我の相國—源雅實

まがり—貝を磨きて造れる飲器

膝突―小半疊のうすべり

我朝の云々―我朝のものとも見えぬは唐なり、忠守は平氏なり、卽ち唐瓶子と解けるも也

もてしづめたるけはひ―しとやかなる樣子

れければ、「又五郎をのこを師とするより外の才覺候はじ」とぞのたまひける。かの又五郎は老いたる衛士の、よく公事に馴れたるものにてぞありける。近衛殿着陣したまひける時、膝突をわすれて外記をめされければ、火をたきて候ひけるが、「まづ膝突をめさるべくや候ふらん」と忍びやかにつぶやきける、いとをかしかりけり。

大覺寺殿にて、近習の人ども、なぞ〳〵をつくりて解かれけるところへ、醫師忠守參りたりけるに、侍從大納言公明卿「我朝のものとも見えぬ忠守かな」となぞ〳〵にせられけるを、唐瓶子と解きて笑ひあはれければ、腹立ちてまかり出にけり。

荒れたる宿の人めなきに、女の憚ることあるころにて、つれ〴〵と籠り居たるを、ある人とぶらひ給はんとて、夕月夜のおぼつかなきほどに、忍びて尋ねおはしたるに、犬のことゞしくとがむれば、けす女のいでて、「いづくよりぞ」といふに、やがて案內せさせて入りたまひぬ。心ほそげなるありさま、いかで過すらんと、いと心ぐるし。あやしき板敷に、しばし立ち給へるを、もてしづめたるけはひの若やかなるして、「こなたへ」と

たてあけ―開閉

俄にしも云云―今俄にはあらず日頃よりたしなみて焚きしめし香の匂也

今宵ぞ云々―下部どもの言葉、今宵は泊る人のあれば心安く寢ぬべきを喜ぶ也

いふ人あれば、たてあけ所せげなる遣戸よりぞ入りたまひぬる。內のさまはいたくすさまじからず、心にくく、火はかなたにほのかなれど、物の綺羅なゝど見えて、俄にしもあらぬにほひ、いとなつかしう住みなしたり。「門よくさしてよ。雨もぞふる、御車は門の下に、御供の人はそこ〳〵に」といへば、「今宵ぞやすきいは寢べかゝめる」とうちさゝめくも、忍びたれど、ほどなければほの聞ゆ。さてこの程の事どもこまやかに聞え給ふに、夜ぶかき鷄も鳴きぬ。こしかた行くすゑかけて、まめやかなる御物語に、この度は鷄も花やかなる聲にうちしきれば、明け離るゝにやと聞きたまへど、夜深く急ぐべき所のさまにもあらねば、すこしたゆみ給へるに、隙白くなれば、忘れ難きことなゝどいひて立ち出でたまふに、梢も庭もめづらしく青みわたりたる卯月ばかりのあけぼの、艶にをかしかりしをおぼし出でて、桂の木の大なるがかくるゝまで、今も見おくり給ふとぞ。

北の家かげに消え殘りたる雪の、いたうこほりたるに、さし寄せたる車の轅も、霜いた

かぶしかたち―女の髪容、貞徳の説には女の打傾けるけはひなど云々―話の言葉の途切れ途切れ僅に漏れ聞ゆるをいふ

四部の弟子―四衆ともいふ、優婆塞は佛弟子の俗男、優婆夷は俗女

くきらめきて、有明の月さやかなれども、隈なくはあらぬに、人ばなれなる御堂の廊に、なみなみにはあらずと見ゆる男、女と長押にしりかけて、物がたりするさまこそ、何事にかあらんつきすまじけれ。かぶしかたちなゝどいとよしと見えて、えもいはぬ匂の、さとかをりたるこそをかしけれ。けはひなゝどはつれ〳〵聞えたるもゆかし。

高野の證空上人京へのぼりけるに、細道にて馬に乘りたる女の行きあひたりけるが、口引きける男あしく引きて、聖の馬を堀へ落してけり。聖いと腹あしく咎めて、「こは希有の狼藉かな。四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼はおとり、比丘尼より優婆塞はおとり、優婆塞より優婆夷はおとれり。かくのごとくの優婆夷なゝどの身にて、比丘を堀に蹴入れさする、未曾有の惡行なり」といはれければ、口引の男「いかに仰せらるゝやらん、えこそ聞き知らね」といふに、上人なほいきまきて、「何といふぞ。非修非學の男」とあらゝかに言ひて、きはまりなき放言しつと思ひける氣色にて、馬引きかへして遁げられにけり。たゝとかりける評論なるべし。

しれたる―ざれたる

敷ならぬ身むづかし―敷ならぬ身と某の答へしは安らかならずと也

人我の相―人と我との隔をたてゝ他人を輕くし我を重く

女のものいひかけたる返事、とりあへずよき程にする男はありがたきものぞとて、龜山院の御時、しれたる女房ども、若き男達の參らるゝ毎に、「時鳥や聞きたまへる」と問ひて試みられけるに、某の大納言とかやは、「敷ならぬ身はえ聞き候はず」と答へられけり。堀河内大臣殿は、「岩倉にて聞きて候ひしやらん」と仰せられけるを、「これは難なし。敷ならぬ身むづかし」など定めあはれけり。すべて男をば、女に笑はれぬ樣におほしたつべしとぞ、淨土寺の前關白殿は、をさなくて安喜門院のよく敎へまゐらせさせ給ひける故に、御詞なゝどのよきぞと人の仰せられけるとかや。山階左大臣殿は「あやしの下女の見奉るも、いと恥しく心づかひせらるゝ」とこそ仰せられけれ。女のなき世なりせば、衣紋も冠もいかにもあれ、ひきつくろふ人も侍らじ。かく人に恥らるゝ女、いかばかりいみじきものぞと思ふに、女の性はみなひがめり。人我の相ふかく、貪欲甚しく、物の理を知らず、たゞ迷の方に心もはやくうつり、詞も巧に、苦しからぬ事をも問ふ時はいはず、用意あるかと見れば、又あさましき事まで問はずがたりにいひ出す。深くたば

する心を云ふ、我相、人相、衆生相、壽者相を般若の四相とす。

道人―得道者名爲二道人一餘出家者未得道者亦名二道人一（智度論）

便利―便通

かり飾れる事は、男の智恵にも優りたるかと思へば、その事あとより顯るゝを知らず。質朴ならずして拙きものは女なり。その心に隨ひてよく思はれんことは、心うかるべし。されば何かは女の恥かしからん。もし賢女あらば、それも物うとく、すさまじかりなん。ただ迷をあるじとしてかれに隨ふ時、やさしくもおもしろくも覺ゆべきことなり。

寸陰惜む人なし。これよく知れるか、愚なるか。愚にして怠る人のためにいはゞ、一錢かろしといへども、これを累ぬれば貧しき人を富める人となす。されば商人の一錢を惜む心切なり。刹那おほえずといへども、これを運びてやまざれば、命を終ふる期忽ちにいたる。されば道人は、遠く日月を惜むべからず。只今の一念空しく過ぐることを惜むべし。もし人來りて、わが命明日は必ず失はるべしと告げ知らせたらんに、今日の暮るる間、何事をか賴み、何事をか營まん。我等が生ける今日の日、何ぞその時節に異ならん。一日の中に、飲食、便利、睡眠、言語、行歩、止むことを得ずして、多くの時を失ふ。そのあまりの暇、いくばくならぬうちに、無益の事をなし、無益のことをいひ、無益のことを思惟して、時を遷すのみならず、日を消し月をわたりて、一生をおくる、尤も愚なり。謝靈運は法華の筆受なりしかども、心常に風雲のおもひを觀ぜしかば、惠遠白蓮の交をゆるさざりき。しばらくもこれなき時は死人におなじ。光陰何のためにか惜むとならば、内に思慮なく、外に世事なくして、止まん人はやめ、修ぜん人は修ぜよとなり。

法華の筆受―法華飜譯の執筆者、靈運は涅槃經の筆受なりしが如し

惠遠白蓮の交―廬山の惠遠庭中に白蓮花を植ゑ同志と淨業をつとむ、これを白蓮の交といふ

おきてて―いひつけて

高名の木のぼりといひし男、人をおきてて、高き木にのぼせて梢をきらせしに、いと危く見えしほどはいふこともなくて、おるゝ時に、軒だけばかりになりて、「あやまちすな。心しておりよ」と言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛び下るゝともおりなん。如何にかくいふぞ」と申し侍りしかば、「その事に候ふ。目くるめき枝危きほどは、おのれがおそれ侍れば申さず。あやまちは安き所になりて、必ず仕ることに候ふ」といふ。あやしき下臈なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠もかたき所を蹴出して後、やすくおもへば必ずおつと侍るやらん。

四重―殺生、偸盜、邪淫、妄語
五逆―父、母、阿羅漢を殺し和合僧を破り佛身の血を出す

雙六の上手といひし人に、そのてだてを問ひ侍りしかば、「勝たんとうつべからず、負けじとうつべきなり。いづれの手かとく負けぬべきと案じて、その手をつかはずして、一目なりとも遲くまくべき手につくべし」といふ。道を知れるをしへ、身を脩め國を保たん道もまたしかなり。

「圍碁雙六このみてあかし暮す人は、四重五逆にもまされる惡事とぞ思ふ」とある聖の申しょこと、耳にとどまりて、いみじくおぼえ侍る。

明日は遠國へ赴くべしと聞かん人に、心しづかになすべからんわざをば、人いひかけてんや。俄の大事をもいとなみ、切に歎くこともある人は、他の事を聞き入れず、人のうれへよろこびをも問はず。問はずとてなどやと恨むる人もなし。されば年もやうくたけ、病にもまつはれ、況や世をも遁れたらん人、亦これに同じかるべし。人間の儀式、いづれの事か去りがたからぬ。世俗の默しがたきに從ひて、これをかならずとせば、願も多く、身も苦しく、心の暇もなく、一生は雜事の小節にさへられて、空しく暮れなん。日暮れ途とほし、吾生既に蹉跎たり、諸緣を放下すべき時なり。信をも守らじ、禮儀をも思はじ。この心を持たざらん人は、ものぐるひともいへ、現なし情なしともおもへ、譏るとも苦しまじ、譽むとも聞きいれじ。

日暮れ云々―白居易傳に、日暮而途遠吾生已蹉跎、老人病者などの菩提の途未だ至らざるに譬へし也

四十にもあまりぬる人の、色めきたるかた、おのづから忍びてあらんは如何はせん。ことにうち出でて、男女のこと、人の上をもいひ戯るゝこそ、似げなく見ぐるしけれ。大かた聞きにくゝ見ぐるしき事、老人の若き人にまじはりて興あらんと物いひ居たる、數ならぬ身にて、世のおぼえある人を隔なきさまにいひたる、貧しきところに酒宴このみ、客人に饗應せんときらめきたる。

今出川のおほい殿―菊亭兼季

今出川のおほい殿嵯峨へおはしけるに、有栖川のわたりに水の流れたる所にて、齋王丸御牛を追ひたりければ、あがきの水前板までさゝとかゝりけるを、爲則御車のしりに候ひけるが、「希有の童かな。かゝる所にて御牛をば追ふものか」といひたりければ、おほい殿御氣色あしくなりて、「おのれ車やらんこと、齋王丸に勝りてえ知らじ。希有の男なり」

太秦殿―藤原信清

ぼろ〳〵―暮露、虚無僧なり

わきざしたち云々―朋輩方どちらも助太刀は無用なり

とて御車に頭をうちあてられにけり。この高名の齋王丸は、太秦殿の男、料の御牛飼ぞかし。この太秦殿に侍りける女房の名ども、一人は膝幸、一人は悖槌、一人は胞腹、一人は乙牛とつけられけり。

宿河原といふ所にて、ぼろ〳〵おほく集りて、丸品の念佛を申しけるに、外より入りくるぼろ〳〵の、「もしこの御中に、いろをし坊と申すぼろやおはします」と尋ねければ、その中より、「いろをしこゝに候ふ。かくのたまふは誰ぞ」と答ふれば、「しら梵字と申す者なり。おのれが師なにがしと申す人、東國にていろをしと申すぼろに殺されけりと承りしかば、その人に逢ひ奉りて、うらみ申さばやと思ひて尋ね申すなり」といふ。いろをし「ゆゝしくも尋ねおはしたり。さることも侍りき。こゝにて對面したてまつらば、道場をけがし侍るべし。前の河原へまゐりあはん。あなかしこ。わきざしたち、いづ方をもみつぎ給ふな。數多のわづらひにならば、佛事のさまたげに侍るべし」といひ定めて、二人河原に出であひて、心ゆくばかりに貫きあひて、共に死にけり。ぼろ〳〵といふもの

さらぬ―其他

友とするに云々―論語季氏篇に出でたる益者三友損者三友の類

は、昔はなかりけるにや。近き世に、梵論字、梵字、漢字などいひける者、そのはじめなりけるとかや。世を捨てたるに似て我執ふかく、佛道を願ふに似て鬪諍を事とす。放逸無慚のありさまなれども、死を輕くして少しもなづまざる方のいさぎよく覺えて、人の語りしまゝに書きつけ侍るなり。

寺院の號、さらぬよろづの物にも名をつくること、昔の人はすこしも求めず、たゞありのまゝに安くつけけるなり。この頃は深く案じ、才覺を顯さんとしたるやうに聞ゆる、いとむづかし。人の名も、めなれぬ文字をつかんとする、益なき事なり。何事もめづらしき事をもとめ、異說を好むは、淺才の人の必ずあることなりとぞ。

友とするにわろきもの七つあり。一には高くやんごとなき人、二には若き人、三には病なく身つよき人、四には酒をこのむ人、五には武く勇める人、六にはそらごとする人、七には慾ふかき人。善き友三つあり。一にはものくるゝ友、二には醫師、三には智恵ある友。

鯉のあつもの食ひたる日は、鬚そゝけずとなん。膠にもつくるものなれば、ねばりたるものにこそ。鯉ばかりこそ、御前にても切らるゝものなれば、やんごとなき魚なり。鳥には雉さうなきものなり。雉松茸なンどは、御湯殿の上にかゝりたるも苦しからず。その外は心憂きことなり。中宮の御方の御湯殿の上のくろみ棚に、雁の見えつるを、北山入道殿の御覽じて、歸らせたまひて、やがて御文にて、「かやうのもの、さながらその姿にて、御棚にゐて候ひしこと、見ならはずさま惡しきことなり。はかゞしき人のさぶらはぬ故にこそ」なゝど申されたりけり。

鎌倉の海にかつをといふ魚は、かの境には雙なきものにて、この頃もてなすものなり。それも鎌倉の年寄の申し侍りしは、「この魚おのれら若かりし世までは、はかゞしき人の前へ出づること侍らざりき。頭は下部も食はず、切りて捨て侍りしものなり」と申しき。かやうの物も、世の末になれば、上ざままでも入りたつわざにこそ侍れ。

唐のものは、藥の外はなくとも事かくまじ。書どもは、この國に多くひろまりぬれば、書

さうなき—雙なき、この上なき
御湯殿—料理の間、湯にて物を煮などするより出でし語
北山入道殿—西園寺實氏、常盤井相國と號す

きも寫してん。もろこし船のたやすからぬ道に、無用のものどものみ取り積みて、所せく渡しもて來る、いと愚なり。遠きものを寶とせずとも、また得がたき寶をたふとまずとも、書にも侍るとかや。

養ひ飼ふものには馬牛、繋ぎ苦しむるこそ痛ましけれど、なくて叶はぬ物なれば如何はせん。犬はまもり防ぐつとめ、人にも優りたれば、必ずあるべし。されど家ごとにあるものなれば、ことさらに求め飼はずともありなん。その外の鳥獸、すべて用なきものなり。はしる獸は檻にこめ、鎖をさゝれ、飛ぶ鳥は翼を切り、籠に入れられて、雲を戀ひ野山をおもふ愁やむ時なし。そのおもひ我身にあたりて忍びがたくば、心あらん人これをたのしまんや。生を苦しめて目をよろこばしむるは、桀紂が心なり。王子猷が鳥を愛せし、林にたのしぶを見て逍遙の友としき。捕へ苦めたるにあらず。凡そめづらしき鳥、あやしき獸、國に養はずとこそ文にも侍るなれ。

人の才能は、文あきらかにして、聖の教を知れるを第一とす。次には手かくこと、旨と

遠きもの云云—尚書に不寶遠物則遠人格
得がたき云云—老子に、不貴難得之貨、使民不爲盜
桀紂—夏の桀、殷の紂、共に無道の王也
王子猷—晉の人、名は徽子、王羲之の子也

めづらしき鳥云々―尚書に、珍禽奇獸不レ育二于國一

多能は云々―論語孔子の言に吾少也賤故多二能鄙事一君子多乎不レ多也

する事はなくとも、これを習ふべし。學問に便あらんためなり。次に醫術を習ふべし。身を養ひ人を助け、忠孝のつとめも、醫にあらずばあるべからず。次に弓射、馬に乘ること六藝にいだせり。必ずこれを窺ふべし。文武醫の道、まことに缺けてはあるべからず。これを學ばんをば、いたづらなる人といふべからず。次に食は人の天なり。よく味をとゝのへ知れる人、大なる德とすべし。次に細工、よろづの要おほし。この外の事ども、多能は君子のはづるところなり。詩歌にたくみに、絲竹に妙なるは、幽玄の道、君臣これを重くすとはいへども、今の世には、これをもちて世を治むること、漸く愚なるに似たり。金はすぐれたれども、鐵の益多きに如かざるがごとし。

無益の事をなして時をうつすを、愚なる人とも、僻事する人ともいふべし。國のため君のために、止むことを得ずしてなすべき事おほし。そのあまりの暇、いくばくならず思ふべし。人の身に止むことを得ずして營む所、第一に食物、第二に著物、第三に居所なり。人間の大事この三つには過ぎず。飢ゑず、寒からず、風雨に冒されずして、しづかに

唐の狗に云云―眞賴翁の說に唐の狗は狆也狆は涙を常に流してある故に此法師の自ら涙を流し說經せるを斯く嘲りし也云々

過ぐすを樂とす。たゞし人みな病あり、病に冒されぬれば、その愁忍びがたし。醫療を忘るべからず。藥を加へて、四つの事もとめ得ざるを貧しとす。この四つ缺けざるを富めりとす。この四つの外を求め營むを驕とす。四つの事儉約ならば、誰の人か足らずとせん。

是法法師は、浮土宗に恥ぢずといへども、學匠をたてず、たゞ明暮念佛して、やすらかに世を過ぐすありさま、いとあらまほしし。

人におくれて、四十九日の佛事に、ある聖を請じ侍りしに、說法いみじくして、みな人涙をながしけり。導師かへりて後、聽聞の人ども「いつよりも殊に今日は尊くおぼえ侍りつる」と感じあへりし返事に、ある者のいはく、「何とも候へ、あれほど唐の狗に似候ひなん上は」といひたりしに、あはれもさめてをかしかりけり。さる導師のほめやうはあるべき。また人に酒勸むるとて、「おのれまづたべて人に强ひ奉らんとするは、劍にて人を斬らんとするに似たることなり。二方に刄つきたるものなれば、もたぐる時ま

我頸―大成本其他、我がかしらに作る
逢ひて―大全の説によれば相手也
思はずなれど―意外なれど

づ我頸を斬るゆゑに、人をばえ切らぬなり。おのれまづ醉ひて臥しなば、人はよもめさじ」と申しき。劍にて斬り試みたりけるにや、いとをかしがりき。

「博奕の負きはまりて、殘なくうち入れんとせんに、逢ひては打つべからず。立ち歸りつゞけて勝つべき時のいたれるを知るべし。その時を知るをよき博奕といふなり」とあるもの申しき。

あらためて益なきことは、改めぬをよしとするなり。

雅房大納言は、才かしこく善き人にて、大將にもなさばやとおぼしける頃、院の近習なる人「只今あさましきことを見侍りつ」と申されければ、「何事ぞ」と問はせ給ひけるに、「雅房卿、鷹に飼はんとて、生きたる犬の足を切り侍りつるを、中垣の穴より見侍りつ」と申されけるに、うとましく、にくゝおぼしめして、日ごろの御氣色もたがひ、昇進もしたまはざりけり。さばかりの人、鷹を持たれたりけるは思はずなれど、犬の足はあどなき事なり。虛言は不便なれども、かゝることを聞かせ給ひて、にくませ給ひける君の御

犬の足は云云―犬の足を切りし事は虛構也
顏回は云々―論語公冶長篇に、顏淵曰願無伐善無施勞
おとなしき人―大人

心は、いと尊きことなり。大かた生けるものを殺し、痛め鬪はしめて遊び樂まん人は、畜生殘害の類なり。よろづの鳥獸、小き蟲までも、心をとめてありさまを見るに、子をおもひ親をなつかしくし、夫婦を伴ひ、妬み怒り、慾おほく、身をあいし、命を惜める事、偏に愚癡なるゆゑに、人よりも勝りて甚だし。かれに苦を與へ、命を奪はんこと、いかでか痛ましからざらん。すべて一切の有情をみて慈悲の心なからんは、人倫にあらず。

顏回は志人に勞を施さじとなり。すべて人を苦しめ物を虐ぐること、賤しき民の志をも奪ふべからず。又いときなき子を嫌し嚇し、言ひ辱しめて興ずることあり。おとなしき人は、まことならねば事にもあらず思へど、幼き心には、身にしみて恐しく、恥しく、あさましきおもひ、誠に切なるべし。これを惱して興ずること、慈悲の心にあらず。おとなしき人の、喜び怒り哀び樂ぶも、皆虛妄なれども、誰か實有の相に著せざる。身を破るよりも、心を痛ましむるは、人を害ふ事なほ甚だし。病を受くる事も、多くは心より